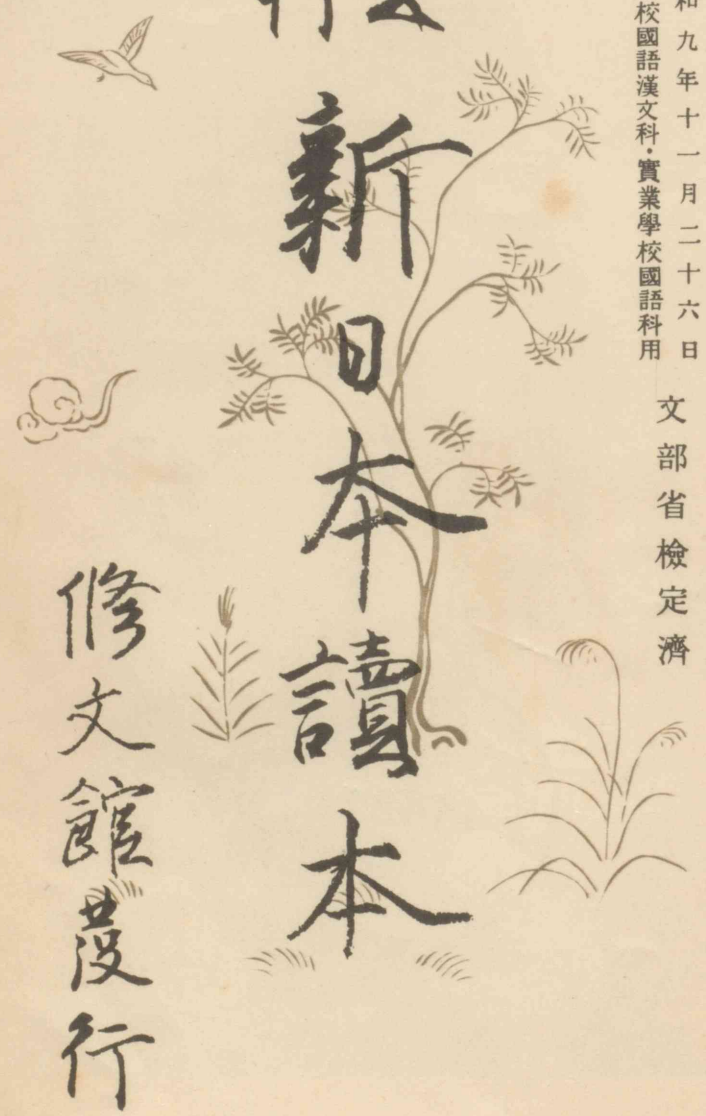
五訂 新日本讀本 巻之八

375.9
Y019
資料室

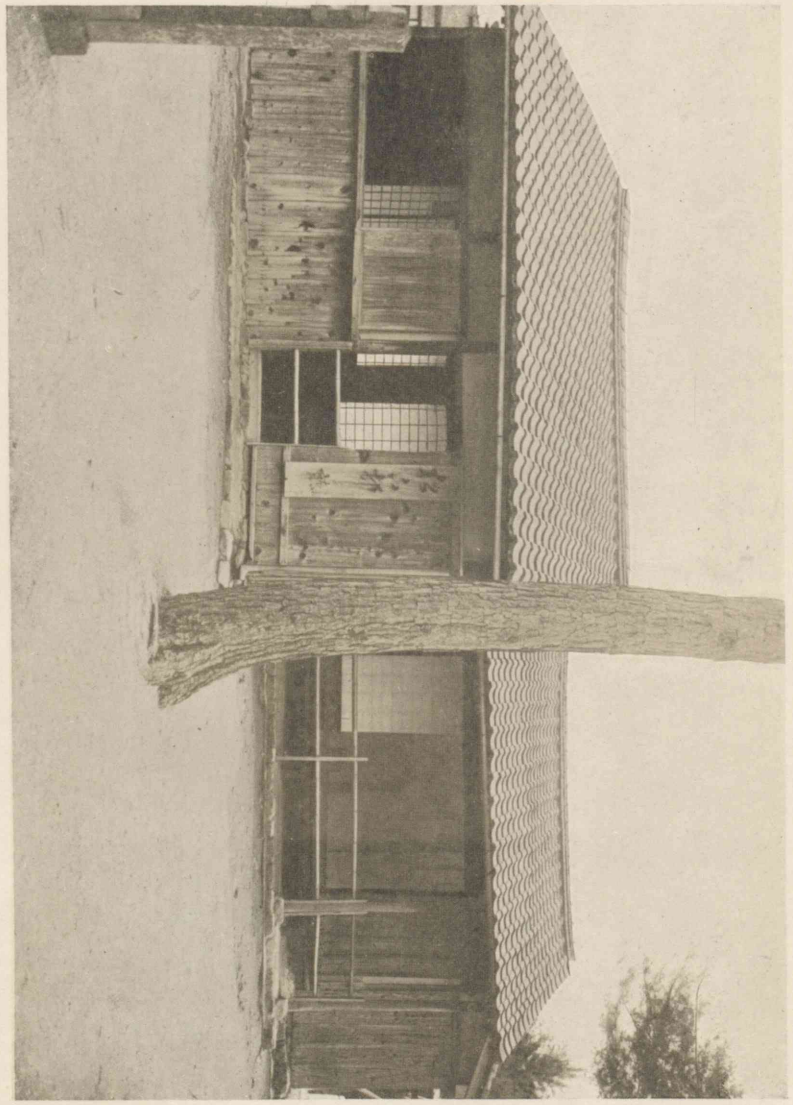
41439
教科書文庫
4
810
41-1934
20000
44027

資料室
375.9
Y019



改訂 新日本讀本

昭和九年十一月二十六日
中學校國語漢文科・實業學校國語科用
文部省檢定濟
修文館發行



（第二十三課參照）

松下村塾

廣島大學圖書館

廣島大學
教
44627
圖書

編纂趣意要項

國語教育の目的はまづ國語を正しく且つ完全に把握せしめ、次いで國語によつて表現された國民精神と國民文化とを徹底的に理解せしめるにあると信じます。

この目的を達成する爲に

一　現代の生命のさながらに動いてゐる現代文の精神を確實に味得せしめたい。

二　現代まで流れて來た源泉に棹さして前代文の精神を完全に理解せしめたい。

三　かくて國民精神を反射してゐる國語の運用に徹底せしめ、

世界の面前に於てそれを磨きあげる基礎を造りたい。

以上三旗幟を目標となし、古今の代表作家の名篇について採訪嚴選し、それを適宜に鹽梅排列しました。

かくて國語愛から國家愛への道程を殘す所なく桀しつゝ、中等學校に於ける國語教育の完成に貢獻したいと祈つて止まないのであります。

昭和九年七月

編者識

卷一八日次

一 光は日本より	高須梅溪	一
二 建國歌	北原白秋	二
三 國語の愛護	五十嵐力	五
四 そゞろごと	樋口一葉	三
一 雁がね		三
二 蟲の聲		五
五 月の前	(藤簍冊子)	八
六 歌人西行	藤岡東圃	天

七　夕づく夜　（諸家）　四五
八　表現せざる表現　志田義秀　四八
九　春の海　（諸家）　五五
一〇　いさよふ月　（十六夜日記）　五七
一一　深い心　得能文　六一
一二　世界の四聖　高山樗牛　六六
一三　長柄堤の訣別　坪内逍遙　七九
一四　母へ　頼山陽　八八
一五　都上り　（土佐日記）
一　大湊の泊　九一
二　舟中の月　九四

一六　光頼卿參内　（平治物語）　九六
一七　菅公の配流　（大鏡）　一〇四
一八　寺子屋　竹田出雲　一一
一九　竹、石、雨　荻原井泉水　一三五
二〇　日野山の閑居　（方丈記）　一三四
二一　雅文抄
一　驛　（櫪園文集）　一四〇
二　富士を觀て　（賀茂眞淵集）　一四一
三　古よりも後の世の勝れること　（玉勝間）　一四三
二二　國學者の業績　岩城準太郎　一四四
二三　松陰と國體論　德富蘇峰　一四八

二四　非常時に於ける我等の覺悟（非常時と國民の覺悟）一五三

附錄

近世文學　編者　一六〇

——目次——終——

大阪高等學校印

哲學
文化

高須梅溪
名は芳次郎、大阪市の人、評論家、明治十三年生。

五訂

新日本讀本　卷八

一　光は日本より

高須梅溪

現代の思想界は今や一大轉換期に入つた。言ひ換へれば、日本が自ら進んで世界に於ける思想界の大混亂を整理し、統一しなければならない秋となつた。この意味から、「光は東方より」といふ言葉に對して、「光は日本より」と言ひたい。

今日、西洋の學問を尊重する人々は、日本には何等獨自の思想もない、哲學もない、文化もないといふ風に速斷する。果してさうであらうか。

一體東洋文化の基調と西洋文化の基調とは自ら異なつてゐ

宇宙觀
森羅萬象

星辰

る。東洋では調和の美を尊ぶ。その主因は、すべて文化の要素を宇宙觀から想ひついてゐるのであつて、宇宙の森羅萬象は肉眼で見たところ、上下あり、高低あり、大小あり、種々變化錯綜してゐるが、根本的に見ると、調和に歸するのである。自然界では、地震の如き、大暴風雨の如き、驟雨の如き動的爭鬪情態を呈する場合もあるが、それらの破壞作用は、その目的とするところ、やはり調和にある。調和のための爭鬪であり、調和のための動搖である。結局、宇宙の眞相はどこまでも調和に存するとする。それゆゑ、支那では天といふことを西洋のゴッド以上に崇敬するのだ。靜夜、蒼茫たる天を仰げば、星辰が燦爛としてダイヤモンドを鏤めたやうに輝き、白日、空を望めば、光の女神たる太陽が麗しい光線を八方に射かけてゐる。それと共に風雨寒暑の差別も生じて、四季が推移してゆく。それらはすべて天の作用で、天の

綜合的
歸納的

唯物
唯心

上に大いなる調和が現れてゐるといふ意味に於て、天を崇敬するのが東洋人の常習だ。「則天去私。」といふことは、東洋獨得の精神であり、東洋哲學の一大基調をなすものである。この點に於て、日本も支那もほゞ同一で、すなはち文化の基調は共に調和の上にある。調和は統一的・綜合的・歸納的で、かの分析を主とする西洋文明とは根本的に色合を異にする。西洋に於てはすべての事體を分析して、その極微に至らねばやまない。例へば、國家に對する場合、西洋では、これらを分析して個人に至るのであるが、日本や支那では、個人から國家に歸著するといふ風に、綜合的な態度をとる。これが東洋文明の西洋文明に異なる所以である。

既に調和を以て特長とする日本思想は、現代の西洋の如く唯物に偏せず、又印度の如く唯心に偏せず、物・心を統合して圓融自

在なる境地を目指してゐる。隨つて日本哲學の一つの特長は、唯心のみを强調せず、又唯物のみを力說せず、この二つの長所を綜合した中正の道、卽ち圓融自在なる超越的境地にある。言ひ換へると、唯物に卽するが如くにして唯物を超越し、唯心に卽するが如くにして唯心を超越し、唯物・唯心の二境を超えて、更に一段高い根本原理、卽ち「まこと」といふ物・心一如の境地を支配するところに立つ。それを平たく言へば、天に則ると言ふことが出來よう。卽ち一切の私を去つて、公平無私の天の道につくといふことが、東洋人の心であり、同時に日本人の心である。日本哲學の源流は、かういふところに一つの根を据ゑてゐる。

然らば、さういふ思想を組織づけ、體系づけた哲學が日本にあるかどうか。日本人は西洋人のやうに、分析に得意でない、また、

言擧せぬ國

葦原の水穗の國は神ながら言擧せぬ國然れども言擧ぞ吾がする言幸く眞幸くませと惡なく幸くいまさば荒磯浪ありても見むと百重波千重波しきに言擧ぞする吾。（萬葉集、柿本人麿歌集の歌）

儒教

組織・體系に長けてゐない。したがつて古來、日本人の間には、今日西洋流にいふ哲學なるものは、或は無いかも知れぬ。それゆゑ、近世日本の國學者は、日本を「言擧せぬ國」と言つた。「言擧せぬ」とは、つまり、言說上、組織・體系をもたぬといふことである。或は空理・空論せず、道の實行を主とするといふ意味にもとれよう。由來日本人は、道德上、言ふことよりも、先づ行ふことを尙び、自ら哲學・宗教を組織するよりも、他の哲學・宗教の長所を採り入れ、それを調和の形に於て現すといふ上に、世界無類の能力を發現し來つた。現在に於ても、やはりさういふ統化力を充分に持つてゐる。

支那に於て發達した儒教は、今日では全く衰へたが、獨りその精神は日本に遺つてゐる。啻にその精神のみならず、形式及び文獻の類も悉く日本に保存せられてゐる。佛教は元來印度に

文獻

發生し、支那を經て日本に傳はつたが、それも今日は印度・支那に衰へ、ひとり日本にその精神を留めてゐる。否、精神のみならず、形式及び文獻をも保存してゐる。更に基督教は歐米から日本へ傳へられたが、或意味に於て、基督の精神は寧ろ日本に存してゐると言つてもよいかと思ふ。宗教のことばかりでなく、世界各國の文化は悉く海を越えて極東の島國なる日本に集中し、最後に日本の力に依つて把持せられ、整理せられるのが常だ。何故かといふに、日本人が調和といふことを重んじて、あらゆる文化を調和鹽梅し、それを日本化して一層光彩あらしむべき無比の能力を有するからである。

更に日本哲學の源流として第二に擧げなければならぬ一要素は、自然の人情を重んずることである。人情の發現は、所謂國學者の「眞心」に根を置いてゐると思ふ。即ち感情の上で少しも

もののあはれ

直覺的

僞ることなく、又少しも矯めることなく、自然の儘に眞情を流露する。人に對するときは、その相手に眞情を傾ける、動物に對するときは、動物に眞情を注ぐ。天地自然に對しても亦情の眞實を盡くすといふのが特色である。これが一歩進むと、天眞爛漫の境地に達し、丁度櫻の花がぱつと咲いてぱつと散るやうな、自然の趣と一如になつた心境に入る。本居宣長はそれを「もののあはれ」と言つた。「もののあはれ」を知ることは人情の極致である。「もののあはれ」には理窟がない、分析解剖がない。具體的・綜合的である、また直覺的・直感的である。平家物語が今日も尙我我の心を深く打つ所以は、人情の機微が能く現れてゐるからである。即ち「もののあはれ」が平家物語の中心をなしてゐるのだ。ところが、西洋人は人情よりも、より多く理性を尙び、その極、何事も理窟を以て解決しなければやまぬ。理窟に加ふるに理窟を

上下交〻利を征して

王ハ何ヲ以テ吾ガ國ヲ利セントヨヒ、大夫ハ何ヲ以テ吾ガ家ヲ利セントヨヒ、士庶人ハ何ヲ以テ吾ガ身ヲ利セントヨハバ、上下交〻利ヲ征リテ國危シ。（孟子、梁惠王上）

以てする。それは西洋人の一大長所であると共に一大短所である。彼等が實驗を重んじ、實證を尙び、何事をも分析解剖しなければやまぬのは、以上の如き傾向に根ざしてゐるのである。

極言すれば、西洋の考へ方はとかく調和を破壞する方に傾き易く、動もすれば理窟に捉はれ過ぎる爲の非人情になる。非人情の結果は、個人的となり、勢、利己主義に流れ易い。この傾向は上下を一貫し、何事も權利義務で解決しようとすることになる。そのため、調和を破ることが益〻はげしく、結局、孟子の所謂「上下交〻利を征りて國危し。」といふ情勢となる。

現代の日本人は、動もすれば日本自身の特色たる調和の哲學を忘れて、却つて調和を破る西洋の文化に隨喜し、極端から極端に走る西洋の學說を、何等の批判無く受け容れる弊に墮してゐる。若し日本人が祖先以來調和の精神を以て外來文化を統制

嚴正な批判

獨立不羈

禮讚

し、外來思想を巧に支配した世界無比の消化力あることを自覺するならば、日本の立脚地から外來思想の上に嚴正な批判を下して、取るべきは取り、捨つべきは捨てねばならぬ。「吾人は日本人なり。」といふ思想の上に、獨立不羈の精神を持することが何より必要である。

諸君、今日の時勢を何と觀るか。今や行きづまれる西洋文明は、何等かの解決を得なければならぬ。久しい間文明的優越を誇つた歐洲は、今や自己の作りあげた文明に自ら縛られて、どうにも身動きが出來ないのである。かくの如き有樣に對して、更に來るべき新文明の曉の鐘をつき鳴らし、東の空にほの〴〵と創造的文明の太陽を仰ぐべき道を切り開くのは、日本を除いて他に何國があるか。日本こそは東洋文明のあらゆる長所を助長し、且保有してゐる。支那、印度を禮讚するものは、その古代文

化を稱揚するけれど、それらは今日、皆日本の力で生命を持續してゐるのだ。　卽ち日本あつての東洋で、東洋あつての日本ではない。　日本人の優越な同化力に依つて、東洋文明の命脈が維持されて來たのであると共に、今や多年閉却された東洋文明の上に、新しい再評價が加へられんとしつゝあるのだ。　卽ち東洋文明の新清算を始める時代に入つてゐるのだ。

要するに現代は日本が多年に亙る西洋崇拜乃至歐化主義の病弊を一掃し、正しい日本的自覺の下に、新文明を創造してゆくべき時代になつたのである。　卽ち世界史上新しいエポックを劃する日本時代が正に來たのである。

（光は日本より）

二　建國歌

北原白秋

一

そのかみ、天地闢けし初め、
げに萌えあがる葦芽なして、
立たしし神こそ、
國の常立。

いざ、
いざ仰げ、起ち復り
かの若々し神の業を。

二

惟ふに日靈の大御神の
げに言よさし賜へる御詔
知らせよ、皇孫、
三つの寶と。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
豐葦原の中つ國を。

三

神武の御代こそ荒びる和し
げに現神、宮太敷きて

初めて築かせし、
國の礎。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
神ながらなる崇き道を。

四

爾にぞ、明治の大き帝、
げに晴れわたる、青高空と、
更にし照らさす、
四方に八隅に。
いざ、

いざ仰げ、起ち復り、
わが彌榮の日出づる國を。

五

依り合ふ天地きはみ知らず、
げに天皇の御稜威盡きず、
誇れよ、國民、
われら榮あり。
いざ、
いざ仰げ、起ち復り、
たゞひたむきの日本魂を。

（作曲白秋國民歌謠集）

五十嵐力
米澤市の人、明治七年生、文學博士、早稲田大學教授。

總攝

三　國語の愛護

五十嵐　力

私は、國語を豐かにまた統一あるものにしたいと思ひます。今後の國語・國文は、大體において、現代の口語を本位とすることになりませう。これは當然のこと、またそれで結構なことでありますが、たゞ口語の一方に執著して、他の要素を一切排斥するといふことでは、將來の國語を貧弱にし、狹小にする憂があります。で、私はぜひ、「現代の口語を本位とし、基調として、廣く衆美を總攝する。」といふことを、目安の心得にしたいと思ひます。

本來我々の思想は、その生まれた國、生まれた時代の言葉で現さるべきものであります。支那人の思想は支那語で現され、英國人の思想は英語で現されるのが自然であると同じやうに、また平安朝人の思想が王朝言葉で現され、鎌倉時代人の思想が鎌

古事記傳　四十四卷、本居宣長の著、古事記の注釋書。

倉言葉で現されるのが自然であると同じやうに、明治・大正・昭和時代の日本に生まれた我々の思想が、明治・大正・昭和時代の日本語で現されるのは、當然のこと、自然のことでありませう。本居宣長が「古事記傳」に、心持と事柄と言葉との三つが調和して助けあはねば、立派な活きた文章は出來ぬと說いたのは、そのためであります。

また、言語・文章の推移變遷は、話し言葉が魁をなして、書く方の文章がその後を追ふのが普通であり、書く文章の中では、散文が魁をなして、詩歌がその後を追ふのが普通であります。そして散文の中では、文學的文章が魁をなして、普通の文章がその後に續くのが普通であります。明治の口語文は、最初に小說に現れましたが、だん〳〵普通文に現れるやうになり、つゞいて韻文・詩歌に現れるやうになり、役所向の公文書にまで及ぶやうになり

純口語
準口語

ました。この大勢から見れば、昭和今後の標準文章が口語式に歸一すべきことは、疑のないことといつて差支ありますまい。

さて、その口語文のいかなるものなるべきかに就いては、いろいろの說があつて、多數の意見が必ずしも一致しないやうに思はれます。その中で最も多いのは、口語文は今の人のしやべる通りに書くべきもの、文字通りに口語そのまゝか、或は口語にすこし磨きをかけた程度に書くべきもので、古語や外國語を取り入れるべきものではないといふ考で、この考をもつてゐる人は、普通民衆のみならず、立派な知識階級の人にも澤山あるやうに思はれます。かういふ人たちは、古語を取入れ、あるひは漢語などを取入れると、いかにも取るべからざる餘所物を取つたかのやうに思ひます。しかし、口語文の意義・本質・理想を、しやべるがまゝの純口語乃至準口語に限るのは、みづから低くし、狹くし、貧

攝取

しくし、卑しくする所以であつて、口語文の前途を塞ぎ、口語文を窒息させるものであると私は考へます。私は口語文といふものは、その理想的本質からいふと、たゞ口語を本位とし、口語に基調を置くといふだけで、その本位を冒さず、基調に合し得る限りは、古今東西のあらゆる言葉・文體を攝取して、みづからを肥し、豐かにすべきものであると考へます。我々が父祖の遺産を繼承する場合の事情が、ちやうどこれと同じではありませんか。我我は親の財産を承け繼いで、自分の理想を實現するために、それを活用し、利用すべきでせう。なほその上に、他からいろ〳〵の要素を取入れて、大きくして子に傳へ、子は同樣の方法によりさらに大きくして孫に傳へ、孫は更に〳〵大きくして曾孫に傳へるべきでせう。新しい國語・國文樹立の消息も同じことで、ただその基調を外すか外さないかが問題であります。いかにして

謠曲 淨瑠璃

その基調を外さずして、多くの他の要素を攝取し得るかが問題であると思ひます。

基調は何物にもありませうが、假に音曲發聲の方面に就いて見ると、謠曲・淨瑠璃・琵琶歌等、皆その音の高低なり音色なりに、一種の基本となるべき調子があつて、その中に攝取される前代及び同時代の他の音曲は、皆その基本調子に化せられるために、言ひ換へれば、他の音曲を從屬せしめるために、その音曲が獨立した高い價値をもつことになるのでせう。そして他の要素を我が基本調子に化する呼吸は、向うの特色を取りながら、その角を倒して我に反を合はさしめるにあると思ひます。「平家」が謠曲に取入れられるときには、「平家」の特色をば見せながら、謠曲になじむやうにその角を倒されました。謠曲が淨瑠璃に取入れられる時には、同じ謠曲の特別味を見せながら、淨瑠璃の基調にな

じむやうにその角を倒されました。いはば、本曲の主位を立てて、穩やかに從位につくといふ呼吸で、例へば、日本文に英語を挿む時の讀みぶり、英文に日本語を挿む時の讀み方の呼吸などが、ちやうどそれだと思ひます。日本文の間に挿入する英語を、英語そのまゝの發音やアクセントで讀んだら、變なものでせうが、英語は英語ながら、日本風の發音・アクセントにしてしまふから、卽ち我が主位を立て、英語を臣僕扱ひして、我に對して從屬的態度を取らせるから、それで立派な日本文として讀まれ、また日本語だけよりは、むしろ變化に富んだ、趣味の豐富な日本文として賞されることになるのであらうと思ひます。

要するに、外國語でも、これを日本文の中に挿入する時には、その主位を奪ひ角を倒して、日本文になじませればよいので、同じ道理で、古語を現代の口語文の中に加へる時にも、その主位を奪

ひ角を倒して、口語の基調になじませればよいわけであらうと思ひます。そして、それがむしろ現代口語文の大を成し、變化を添へ、趣味を豐かにする所以であらうと思ひます。またこれが實際各時代の我が文學の常にやつて來たことでありました。例へば、「平家物語」の一節、清盛の淨海が熱病に罹り、大苦しみをして死ぬところの光景を描いた一節に、

「もしや助かると、板に水を置きて臥しまろび給へども、助かる心地もし給はず。同じき四日の日、悶絶躄地して、終にあつち死ぞし給ひける。」

とありますが、この中には、少くとも質の違つた三種の言葉がまじつてゐます。一つは「臥しまろび給へども」「し給ひける」といふ調子の王朝詞、一つは「悶絶躄地」といふ漢語、そしてもう一つは「あつち死」といふ當時の俗語であります。王朝語の方は說明す

四日
養和元年(一八四)二月。
躄地

る迄もありませんが、「悶絶躄地」は、悶え〳〵息が絶え入り〳〵してはぢだんだん踏んで苦しんだといふことで、むづかしい漢語、そして「あつち死」は「あつち、ち、ち、〳〵と叫びながら死んだ。」といふことで、俗語も俗語、大俗語であります。「平家物語」には、かやうに質の違つた三種の言葉が、各〻それ〴〵の特色を見せながら、少しも喧嘩せずに仲よく並んで、一つの調和した空氣を成り立たしてゐるではありませんか。これは王朝語を主位に立てて、他の二つが反を合はせた結果でありませうが、かういふ調子でゆけば、現代口語文の中に古語を入れようとも、外國語を入れようとも、また方言を入れようとも、少しも差支ないことと私は思ひます。

（國語の愛護）

樋口一葉
名は夏子、東京市の人、小説家、明治二十九年歿、年二十五。

思やすらん
深しや

四　そゞろごと

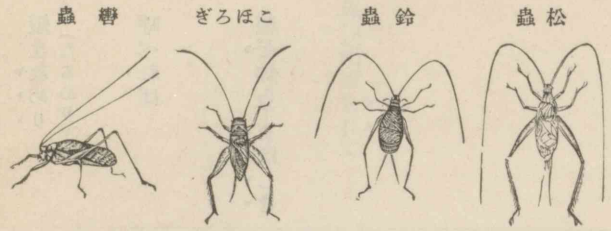
樋口一葉

一　雁がね

朝月夜のかげ空に殘りて、見し夢の名殘もまだ現なきやうなるに、雨戸あけさして打眺むれば、さと吹く風、竹の葉の露を拂ひて、そゞろ寒けく身にしみ渡る折しも、落ちくるやうに雁がねの聞えたる、一つなるは猶さら、列ねし姿もあはれなり。思ふ人を遠き縣などにやりて、明け暮れ便りの待ちわたらるる頃、これを聞きたらば如何なる思やすらんとあはれなり。朝霧、夕霧のまぎれに、聲のみ洩して過ぎゆくもをかしく、更けたる枕に鐘の音きこえて、月すむ田圃に落つらんかげ思ひやるも哀れ深しや。旅寢の床、わび人の住家、いづれに聞きても、物思ひ添ふる種なる

べし。一とせ下谷のほとりに假初の家居して、商人といふ名も恥づかしき、唯いさゝかの物とり並べて、朝夕のたつきとなししの家の二階のはづれを、纔にも頃、檐端の庇あれたれども、月さすたよりとなるにはあらで、向ひれ出づる影したはしく、大路に立ちて心ぼそく打仰ぐに、秋風たかく吹きて、空にはいさゝかの雲もなし。あはれ、かゝる夜よ、歌詠む友のたれかれ集ひて、靜に浮世の外のものがたりなど言ひ交はしつるはと、俄にそのわたりこひしく涙ぐまるるに、友に別れし雁唯一つ、空に聲して何處にか行く。淋しとは世の常、命つれなくさへ思はれぬ。擣衣の音にまじりて聞えたる、如

樋口一葉



三つ口
「雁々三つ口」といふ童謡。羨ましくなん

何ならん。三つ口など囃して、小さき子の大路を走れるは、さも淋しき物のをかしう聞ゆるやと羨ましくなん。

二　蟲の聲

垣根の朝顔やう〳〵小さく咲きて、昨日今日葉がくれに一花見ゆるも、その初のこと思はれてあはれなるに、松蟲・鈴蟲いつしか鳴きよわりて、朝日まちとりてこほろぎのはかなげに聲する、小溝の端、壁の中など、有るか無きかの命のほど、老いたる人、病める身などにて聞きたらば、さこそ比べられて物悲しからめ。まだ初霜は置くまじきを、今年は蟲の齡いと短くて、はやくに聲のかれ〳〵になりしかな。轡蟲はかしましき聲も形もいと丈夫めかしきを、いつしか時の間に衰へ行くらん。人にもさるたぐひはありけりとをかし。鈴蟲はふり出でて鳴く聲の美しけれ

短きなめり（なるめり）
呼べれば
親ぞ知らーまほしき

（入りつ、入りぬ）

ば、物ねたみされて齢の短きなめりと點頭かる。松蟲も同じこ
となれど、名と實と伴はねば怪しまるるぞかし。常磐の松を名
に呼べれば、千歳ならずとも枯野の末まではあるべきを、萩の花
散りこぼるる、やがて聲せずなりゆく。さる盛りの短きものな
れば、暫しも似よと、この名はおほせけん。名づけ親ぞ知らまほ
しき。この蟲一とせ籠に飼ひて、露にも霜にも當てじといたは
りしが、その頃病に臥したりし兄の、夜な〳〵鳴く聲耳につきて、
物わびしく厭はしく、あの聲なくばこの夜やすく睡らるべしな
ど言へるも道理にて、急ぎ取りおろして庭草の茂みに放ちぬ。
その夜鳴くやと試みたれど、更に聲の聞えねば、俄に露の身に寒
く、鳴くべき勢のなくなりしかと憐み合ひき。その年の暮れて
兄は空しき數に入りつ。又の年の秋、今日ぞその頃など思ひ出
づる折しも、ある夜更けて近き垣根のうちにさながらの聲聞え

よし……とも

思ひ出でられて

出でぬ。よもあらじと思へど、たゞその物のやうになつかしく、
戀しきにも珍しきにも涙のみこぼれて、この蟲がやうに、よし異
物なりとも、聲形同じかるべき人の、たゞ今こゝにたち出でば如
何ならん、我はその袖をつと捉へて放つことをなすまじく、母は
嬉しさに物は言はれで涙のみふりこぼし給ふや、父は如何さま
に爲し給ふらんなど怪しきことを思ひよる。かくて二夜ばか
りは鳴きつ。その後は何處に行きけん、假にも聲の聞えずなり
ぬ。今も松蟲の聲聞けば、やがてその折思ひ出でられて物悲し
きに、籠に飼ふことは更にも思ひ寄らず、おのづから野邊に鳴き
よわりゆくなど、たゞその人の別れのやうに思はるるぞかし。

（一葉全集）

文治　後鳥羽天皇の御代。（一八四五―一八四九）
鎌倉の大將　源頼朝。
あとべつかうまつる　蘆鶴の歩みして
直人

五月の前

文治某の年の秋、八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に詣でさせ給ふ。例の事にて、御供つかまつる人々、御前追ひ、御あとべつかうまつれる。渚に遊ぶ蘆鶴の歩みして、疾からず遲からず、列を亂さず練り出でさせ給へるを、大路に膝折り伏せ、畏み奉る人數多あるに、けいめいしてあなとだにいはせず、世に嚴めしく貴き御有樣なり。返り申しして御手輿に召させ給ふ程、さとき御まなじりに見とゞめさせ給ひ、御階の忌垣の許に畏まりを る法師のあるが、見上げ奉る面つき、旅に飢ゑていとやせ黑みづきたるに、衣・杖・笠なども乞食ものの樣したるが、めをぬすみてうずすまりをる、直人ならずと思しけむ、「あの法師の修業するやう、名をも問へ。」と、仰せたうぶ。御輿添の若侍いそぎ走りよりて、

圓位　西行の僧名。
おほとなぶら
簀子
藐姑射の山　莊子に出てゐる神仙の棲む山、轉じて仙洞御所の意。

「ありがたく御目たまへり。何處よりの修行ぞ。名をも申せよ。」といふ。ゆくりなきに驚きたる樣して、「雲水に在家定めず侍る者にて、名は圓位と申す。」といふ。聞しめされて、「されば こそ聞き知りたれ、穴熊の猛き獲物の類ならで、賢き人得たる例に、誘ひ歸らむ。吾が後につきて來れ。」とて、召し連れさせ給へり。

御館に入らせ、御裝束改めさせ給へば、やがておほとなぶらあまた照らしかゝげたり。「けふの道行づとゐてこ。」と仰せたうぶ。「法師まゐれ。」とて、おまし近き處の一間なる處の簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、「昔、藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思ししみて、身は黑くやつしたれど、月花のなげきの譽は、物の心なき東人さへ聞き知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には玉とて拾ひ收めたらむを、かたりて聞ゆべく」仰せたうぶ。

大樹

かひあること

いみじくかしこまりて、「思ひかけず大樹の御蔭に參り侍れば、いともかゞやかしきにぞ、たゞ夢路たどるやうに侍りて、聞え奉るべきことも侍らず。さとき御まなこに見あらはされ侍るこそ、いともありがたけれ。伊勢の海ちひろの濱におり立ちならひ侍れど、かひあることもうち出で侍らぬには、これとて捧げ奉るべくもあらず。君にもかねてまなばせ給ふとも漏り聞き奉る。天の下まつりごち給ふ御うつは物の大いなるに、おぼしよらせ給ふには、かけても及ぶまじきをさへ思し知り侍る。大空に羽うちつけて飛ぶたづの聲、霜枯の淺茅がもとの蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あなかしこし。」と申す。

うちゑまさせ給ひ、「弓取りし人のもとの心の猛きには、よむ歌も直くあからさまと聞くはまことか。歌は武士のあら〳〵しき心には詠みうつし得まじきものに、宮人達は沙汰し給へりと

あてに
なよびかに

大風起り
大風起り雲飛揚ス、威海内ニ加ハリ故郷ニ歸ル、安ゾ猛士ヲ得テ四方ヲ守ラシメン。（漢、高祖）

烏鵲南に
月明ラカニ星稀ニ、烏鵲南ニ飛ビ、樹ヲ繞ル三匝、何レノ枝ニカ依ルベキ。（魏、曹操）

や。軍に出で立ちて、笛・鼓の音・馬のいなゝきは物とも思はぬを、この三十文字あまりのまなびには心の後るるはいかに。」「こはかしこき御心にも思し惑はせ給ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、弓矢みとらして軍に立たせ給ひき。その御歌をよみ奉れば、猛く直々しく調もいと高しとこそ打聞き侍れ。いでや歌詠まむとては、ますらを心を取隱し、あてになよびかに詠みうつすべくすることこそ、この道のいみじき煩なれ。君がさとくたけき御心のまゝに、うちいで給はむには、今の世の人誰かは立ちあへ奉らむ。三尺の劍を執りて『大風起り雲飛揚す。』とうたひ、槊をよこたへて、『烏鵲南に』と詠ぜし君達は、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造らがいみじきをすりみがき、染殿のやしほの色もはかなき目うつりばかりには何にかは。されど谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、いづれの道、何の業にも始よ

りすぐれたらんは鬼にこそ侍らめ。」といふ。「人々あれ聞き給へ。世は捨てのがれてもたのもしき人の心ならずや。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき弓の上手となむ聞ゆる。傳へたる事もあるべし。かくこそとおぼししみぬることは忘れずてこそあらめ。こと一言にても教へ承るべし。」「こは益恐れある御問はせなり。御物語のはて〳〵は、つは者の道暫しも怠らせ給はぬ御心より、野山をすみかの瘦法師にだに、物問はせ給ふことのかたじけなさよ。向ひ奉りては、をこがましく家の傳なりなどとて聞えや奉るべき。まして有り難き大宮仕をいなみ奉り、みおやだちのいつくしみをさへあだなるものに、年纔に二十五にて家を出でたるいたづら者の、弦ひき一つだに心に留めし事も侍らず。たゞ一言の忘れ難きは、『賞を重くし罰を輕くせよ。』といひしと、『任ずる者をはづかしむれば危し。』と、い

士卒の疽を病めるを

卒ニ疽ヲ病メルモノアリ　起チテ之ガタメニ之ヲ吮フ。（史記呉起傳）

竈を減じ

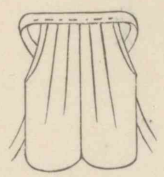
齊の孫臏の故事。

まれ人

暖にもこそ

ひしとのありがたさよ。士卒の疽を病めるを吮ひしは、人の心をよく買ひなすと雖も、誠の情よりとも覺え侍らず。竈を減じて人を危きに墮し入るるは、將帥のさかしきにて、國を治め天の下をしるべき君の御心にあらず。軍を出したまへることの、あやしきまでかしこくませるを、餘所ながら聞き奉るには、この方の御問ゆるさせ給へ。」とて、額を板敷にすりつけて申す。

君笑み誇らせ給ひ、「口とく心さとき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。物語今ははたしてむ。人々と土器とりはやし、曉かけて遊ばむ。まれ人は酒飲まざるべし。鹿・猿のなかに立交りて歌よめといふともよむまじ。たゞわが前に遊べ。風冷やかなるにも、飽かず飲み、物きたなげに食ひちらす人々は暖かにもこそ。この火取、法師に參らせよ。」とて、白銀もてつくりたる猫のかたちしたるを取傳へて、君より賜はるとて、前に置きたり。「鹿・猿は



くゝり袴

誰かはえ―させ―む
盗みやし―つる

尙心たけし。鼠をだにえとらぬ痩法師が爲には、似つかはしき御賜ぞ。」とて、三度おしいたゞきぬ。

あした、御暇賜はりて立ちいづるに、御館の人やどりに、誰殿のわらはべならむ、くゝり袴の裾、朝露に濡れそぼちて、いと寒げにをるを見て、「これ取らせむ。火埋みて手足煖めよ。」とて、かのきらきらしき物を與へて、かへり見もせず立ちぬ。童うち驚き、「これ見給へ。見も知らぬ法師の見も知らぬ物を賜ひつるは。」とて青侍に見すれば、目・口をはたけ、「かく尊き寶物を誰かはえさせむ。盗みやしつる。」といふ。「さらに更に道のそらにかゝるものやはあるべき。あなおそろし。殿に奉りて給へ。」といふ。

やがて御館にもてまゐり、つかふる君を呼びいで、しか〳〵のことととなむ申す。「いとあやし。大將殿の法師に賜はりしを、いかで童に得させけむ、いぶかし。」とて、まづ急ぎて聞え奉る。君

えせぬなるべし

漢高　支那漢の高祖。
曹孟德　支那魏の曹操。
心なき身云々　心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ澤の秋の夕暮。（西行）

（うちひそみぬべし
うちひそむべし

藤簍冊子　六卷、上田秋成の歌文集。上田秋成―通稱は東作、大阪の人、國學者、文化七年（一八一〇）歿、年七十八。

うちゑみ給ひ、「かのゑせ法師、あなづらはしくをさなげなる物くれしとて、腹だたしくや思ひけむ、わが門の前に捨て行きつるよ。法師とても男魂なくば修行もえせぬなるべし。されど家を出でて猶身を守り、才に誇りて野山にまじり、歌詠みてのみあるは、世捨人の捨てらるべきあさましさぞかし。一度けがれし物、その童に取らせよ。」とて、とりおろさせ給ひぬ。

西行、後にこの事を人に語りていふ、「右府は誠にねぢけたる君なり。口に蜜し給へど、心には針のおはするぞ。漢高の大度、曹孟德の智略あるに似て、天下の人皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふものを生まれ得させけむ。唯悲しむべきは、神の御裔の、この後やう〳〵衰へさせ給はむ世の姿なるは。」とて、涙止め難くして物語りしとなむ。心なき身にも之を聞き傳へては、秋の夕暮ならずもうちひそみぬべし。

（藤簍冊子）

藤岡東圃　名は作太郎、金澤市の人、國文學者、文學博士、前東京帝國大學助教授、明治四十三年歿、年四十一。

抑〻歌道　徹書記物語の文。

冥加

嘖々

藤原秀郷　田原藤太といふ、天慶の亂（一六〇）を平げて功があつた。歿年不詳。

北面

六歌人西行

藤岡東圃

西行何者ぞ、天涯放浪の行脚僧、その名を一時の名流俊成と齊しくし、鎌倉・室町の世、「抑〻歌道に於て定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべき事なり。」といはれし時、稱讃の聲また定家に讓らず、近世に至つて定家の價値いたく墜落したれども、山家集の一書は、尙如何なる歌人の机邊をも去らず。西行の名、今に嘖々たるは抑〻何が故ぞ。

西行法師、俗名は佐藤義清、鎭守府將軍藤原秀郷が九世の孫なり。代々武を以て家を立て、義清また勇敢にして弓術をよくす。和歌に堪能なるは蓋しその天稟なり。鳥羽上皇に仕へて北面の士となり、左兵衞尉に任ぜらる。上皇その才を愛して登庸せんとす。されど義清は名利を喜ばずして、常に厭離の志あり。

鳥羽殿　京都の南方（今伏見區）にあつた離宮。

惕然

棄レ恩云々　清信士度人經の文。

愛著の絆

その出家の動機については、或は傳へて曰く、嘗て同族左衞門尉憲康と同行して、鳥羽殿より退出し、明日を期して別る。次の朝參朝せんとて、約に從ひて憲康を誘へるに、門のほとりに人立騷ぎ、内には泣きかなしむ聲聞ゆ。怪しと思ひて尋ぬれば、「殿は昨夜頓死したまへり。」とて、若き妻、老いたる母の重なり伏して歎くに、義清は惕然として遁世の念更に堅し。官を辭して許されざれども、「棄恩入無爲。」は如來の教なりと觀じ、四歳の女が父の歸れるを喜びてとりすがれるを、思ひ切りて緣より下に蹴落し、「これこそ愛著の絆を斷つ始ぞ。」と、顧みもせで家を遁れ出で、嵯峨に至りて剃髮せりと。か

西行上人像

保延六年
紀元一八〇〇年。

右慕下
右近衛大將源頼朝。
大師
弘法大師。
桑門
抖擻
高尾
京都市右京區高尾山神護寺。
文覺
俗名は遠藤盛遠、正治元年（一八五九）歿、年八十。
數寄

くて名を西行または圓位といふ。出家せるとき保延六年にして、その歳まさに二十三なりきといふ。

西行既に世を遁れて、高野に籠り、吉野に隱れ、出でては熊野に參り、伊勢に詣で、鎌倉に下りて右慕下に見參し、進みて奥州に至り、西の方は中國より四國に渡りて、大師の靈場を拜み、それより筑紫に遊べり。常に謂へらく、「桑門に家なし、抖擻して身を終ふべし。」と。一蓋の笠・一條の杖草の枕苔の茵、東西にさすらひ、自然を友とし、悠々自適、興至れば則ち和歌を詠ず。高尾の文覺これをにくみ、弟子に告げて曰く、「遁世の身ならば、一筋に佛道修業の外、他事あるべからず。數寄を立てて、此處彼處に嘯き歩く條、憎き法師なり。何處にても見あひたらば、頭を打割るべし。」と。其の後、高尾の法華會に行脚の僧の參りあひて、花の蔭など眺め歩き、坊に來りて一宿を請ふあり。「誰ぞ。」と問へば、「西行と申す

手ぐすねを引く

打たーれーんーず
文覺をこそ…なれ

入涅槃

雙林寺
今京都市圓山公園内にある。

者。」といふ。文覺手ぐすねを引き、望の叶ひつる體にて、明障子を開けて出づ。暫しまもりて、「年頃承り及びたるに、御尋ね悦び入り候。」とて、迎へ入れて饗應に餘念なし。弟子達はいかなる事の出で來んかと、手に汗を握りたるに、この爲體にて、西行は無事に歸り去りしかば、「日頃の仰せに違ひたるは。」と、怪しみ問ふ。文覺答へて、「あら、いひがひなの法師どもや。あれは文覺に打たれんずる者の面樣か、文覺をこそ打たんずるものなれ。」と、いへりとぞ。

西行深く花月を愛し、また釋迦入涅槃と契を等しくせんことを思ひて、詠じて曰く、

願はくは花のもとにて春死なむ
そのきさらぎの望月の頃

晩年、洛東雙林寺の邊に草庵を結びて閑居せるが、幽契違はず、

建久元年
紀元一八五〇年。

宗祇
姓は三善、連歌の名人、文龜二年(三一六二)歿、年八十二。

芭蕉
姓は松尾、名は宗房、伊賀國(三重縣)の人、俳人、正風の祖、元祿七年(三三四)歿、年五十一。

連歌
吟嚢

鴨
賀茂川、京都を流れる川。

桂
大堰川の下流、嵐山の麓を過ぎ、紀伊郡に至つて鴨川と合流する。

建久元年二月十六日、七十三歳にして入滅せり。その和歌を集めたるもの卽ち山家集なり。

わが國、古來詩人多しといへども、深く自然にあこがれ、山川を無二の友として、生涯の過半を旅行の中に終へしもの、前後僅に三人、西行・宗祇・芭蕉これなり。

西行これが先達をなし、宗祇は應仁亂離の折をも厭はず、西行に私淑してその跡を追ひしもの、芭蕉は元祿泰平の機に乘じて、また西行・宗祇が行狀を慕ひしものとす。西行は歌道稀有の名手、宗祇は連歌第一の大家、芭蕉は俳諧に正風の眼を開きし偉人、各その道に一期を劃せし三家が、いづれもまた風月に放浪し、雲水に吟嘯せしことを思へば、旅行がいかに詩人の吟嚢を肥すものなるかを知るべし。

そも〳〵、平安朝の貴紳・淑女は鴨・桂二川の流域數里の間を已

踢蹐

東山
南北に連なつて京都の東を限つてゐる一帶の山脈の總稱。

西山
京都の西に連なつてゐる山脈の總稱。

典型

簸却

崇德院
第七十五代。

が世界とし、海も見ぬ天地に踢蹐して足畿外に出でず、一生の經過極めて單調に、感情を刺衝するものなかりければ、隨うて思想の發展もある事なし。見聞するところは、東山の花・西山の紅葉、いつも同じ京洛の風物より外は知らざれば、詠ずるところの和歌も變化を見ず。子は父に繼ぎ、孫は祖を承け、たゞ同じ詞花・言葉を飾るのみにて累代繼承しゆけば、和歌の思想・辭句の上にも、おのづから典型を生じて天眞を忘る。實情を欺き、虛僞に流れ、浮華、輕薄、徒に形式を飾りて、燦爛たる錦囊、その內容は空しく、滔滔として風を成せる時、西行ひとり蹶起して從來踏襲の典型を簸却し、みづから山水の間に逍遙して、直接に自然が隱微の聲を聞き、感得するところ萬朶の花と咲けり。平安朝の末、崇德院の御製が殊に斷腸の響あるは、その悲慘なる實境を詠ぜることの、世上一般の題詠と選を異にすればなり。わけて西行が歌ふと

粉本

ころ、一も古人の粉本を模倣せず、一字一句みな己が肺腑より出づ。數百年の後、なほ名聲赫々として、天成の大才と許さるることまた宜ならずや。

親昵

西行既に古來の典型を捨てて、たゞちに自然の堂奥に入らんとす。深く山川・草木を愛して、これを視ること猶己を視るが如く、親昵して同情の念に堪へざるは、固より然るべきことなり。

わきて見む老木は花もあはれなり
いまいくたびか春にあふべき

こゝにまた我が住みうくてうかれなば
松はひとりにならむとすらむ

同情は進んで愛著となりぬ。西行は官祿を捨てたり、妻子を捨てたり、すべて世間を捨てたり。されどゆかしき花よ月よ。

おのづから花なき年の春もあらば
何につけてか日を送らまし
うちつけにまた來む秋の今宵まで
月ゆゑをしくなるいのちかな

愛著は迷なり。この雲を去らざれば眞如の月は明らかなり難しと雖も、山水もと無心にして、人間の如き魔性を有せず。之を窓前日夜の友とす。

清淡・虛無

清淡・虛無、一心もまた物によつて動かされざること山の如く、機に隨うて轉ずること水の如し。來往自在、こゝに疑懼の境を去つて、安心は漸く決定すべし。

今更に春を忘るる花もあらじ
安く待ちつゝ今日もくらさむ
雲にたゞ今宵の月をまかせてむ
厭ふとてしもはれぬものゆゑ

西行の歌は企てて成すものにあらずして、自ら成れるなり。

斧鑿の痕

天籟

婉曲

渇仰

そのいかに自然にして平易に、斧鑿の痕なきかを見よ。

ながむるに慰むことはなけれども
月を友にてあかすころかな

つくづくと物を思ふにうちそへて
をりあはれなる鐘の音かな

今よりは昔がたりは心せむ
怪しきまでに袖しをれけり

要するに、西行は生まれながらの歌よみにして、歌を作るものにあらず。天籟ふき來つて松濤卽ち鳴る。その聲必ず自然を離れず、平易・率直を旨とすれども、風凄じければ鳴ることも亦强し。時に婉曲の響あれども、故らに人爲の巧を加へねば、天成の詩美は千歲の下愈〻光を增して、後人をして渇仰止まざらしむるなり。

（國文學全史）

七夕づく夜

けふといへば唐土までもゆく春を都にのみと思ひけるかな　　皇太后大夫俊成

夕づく夜しほみちくらし難波江のあしのわか葉をこゆるしらなみ　　藤原秀能

心なき身にもあはれはしられけり鳴たつ澤の秋のゆふぐれ　　西行法師

見わたせば花も紅葉もなかりけりうらのとま屋の秋の
ゆふぐれ　藤原定家

狩りくらし片野の眞柴をりしきて淀の川瀬の月を見る
かな　藤原公衡

みよし野の山の秋風さ夜更けてふるさとさむく衣うつ
なり　藤原雅經

石川やせみの小川の清ければ月もながれをたづねてぞ
すむ　鴨長明

君をいのる心のいろを人とはばたゞすの宮のあけの玉
がき　僧慈圓

鳰の海や月の光のうつろへば浪の花にも秋は見えけり　藤原家隆

うちしめりあやめぞ薫る時鳥なくや五月の雨の夕ぐれ　藤原良經

暮れて行く春の湊は知らねども霞に落つる宇治の柴舟　寂蓮法師

志田義秀　富山縣の人、明治九年生、國文學者、東京帝國大學講師。
維摩　維摩詰、釋迦と同時代の人、その教化を輔く。
山谷　黃庭堅、支那宋の詩人。
南畫　俳畫
中入　能樂にて、主役が一曲の半ばにて、一度樂屋又は造り物などの中へ入ること。
間　音樂・舞曲にて間止みすること。

八　表現せざる表現

志田義秀

「言はぬは言ふにまさる。」と云ふことは、世の中の人が能く云ふことである。それでゐて饒舌を逞しうせずにゐられぬのが人の常である。「維摩の一默、その聲雷の如し。」と云ふやうに、沈默は雄辯であることも吾々は承知してゐる。それでゐて沈默であり得ないのが吾々の常態である。詩人山谷は「萬言萬當不如一默。」と云ひながら、多くの詩を作つてゐるのである。

然るにこの言ふにまさる無言、沈默の雄辯が、藝術の形式として取扱はれれば、こゝに恐ろしい藝術が出來上るのである。南畫の餘白、俳畫の省筆、茶道の靜寂、禪の默想、能樂の中入、邦樂の間、俳句の句切などが卽ちそれである。茶道の靜寂、禪の默想も、藝術的境地と見られよう。言ひ換へれば、表現せざる表現が、表現

大須賀乙字　名は績、俳人、俳論家、前東京音樂學校教授、大正九年歿、年四十。
蛇足
世阿彌　名は元淸、室町時代に於ける能樂の改革者、嘉吉三年(二四三)歿、年八十一。
早態

以上の藝術的効果を收め得るので、かゝる藝術的形式を發達せしめて、今日猶完全に之を持續してゐるのは、恐らくは我が日本のみであらう。この事に就いては大須賀乙字が特に論じて居り、早く氣づいてゐる人もあるのであるが、私も茲に蛇足を試みようと思ふのである。

能樂の改革者として、寧ろ嚴格な意味に於ける能樂の創始者として、作舞・作詞・作曲すべてに天才を有し、優れた創作家で同時に優れた評論家であつた世阿彌は、その能樂觀を述べたものの中に、動く事を表すには、動かない事を以てせねばならぬと云ふ意味の事を述べてゐる。激動を表すには、無動を以てするのが有効であると云ふのである。當流には「總べて早態戒むる也。」とも云つてゐる。世阿彌は、かゝる藝術觀を以て猿樂の改革を謀つたので、從つて世阿彌以前の猿樂は、激動を以て表す

象徴的藝術

マールブルヒ大學
ドイツ最初の新設大學。
ルードルフ・オットー
一九一七年より一九三〇までマールブルヒ大學に勤む。（一八六九―）

主義のもので、跳躍的の舞踏劇を基本となした事は、この點からも推せられるので、世阿彌に至つて、始めて表現せざる表現の効果を認めて、暗示的象徴的の手法に依る、高級な象徴的藝術たる今日の如き能樂を打建てたのである。　されば能樂は、その中入を考へるまでもなく、能全體が既に表現せざる表現の主義に依つてゐるもので、從つて形式全體として、茶道の靜寂、禪の默想、俳畫の省筆に類すると云へるのであるが、而もかゝる全體の形式と共に、その焦點たる妙所をなすものは中入であるから、かゝる全體觀から云へば、能樂は、餘白を有する暗示的繪畫たる南畫、句切を有する暗示的文學たる俳句に類すると云へるであらう。

私はかつて友人から、マールブルヒ大學の神學教授ルードルフ・オットー氏の「聖」といふ神學書の所説を聞く事を得た。　同書は、神に對する感情を髣髴せしめ得るものは、音樂を聞く時の感情であるとし、それも樂曲を聞きつゝある時の感情よりも、曲を終へて樂器が靜寂に歸し、聽衆が沈默を守つてゐる時（同書はこれを「沈默（シユウイダン）」といふ言葉を用ひてゐるさうであるが）の感情であると云つてゐるさうである。　私は之を非常に面白く聞いたのである。

耳よりな論

至妙至靈

終曲の後の沈默が、神に對する感情を髣髴せしめるものであるとの所論は、吾々には如何にも耳よりな論である。　終曲後の沈默にこれ程の至妙至靈の意義を考へるのは、やがて藝術上に於ける表現せざる表現の至妙至靈の効果を認めるものと云へるであらう。　而も奏樂後の沈默といふことは、何れの國に於ても共通的に考へられることであるが、我が國に於ては、それ以上にそれが音樂に於ける間や、能樂に於ける中入として存するのであり、又同じ意義のものとして、茶道や禪に全體的形式として

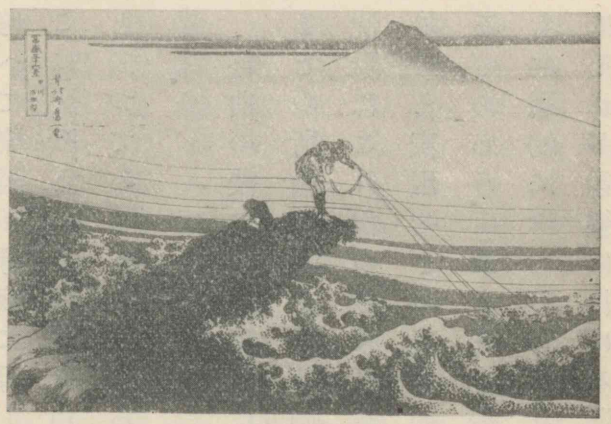
沈然の雄辯

表現主義
自然主義
唯心的

存するのであり、音樂以外のものとしては、南畫の餘白、俳句の句切として存するのである。

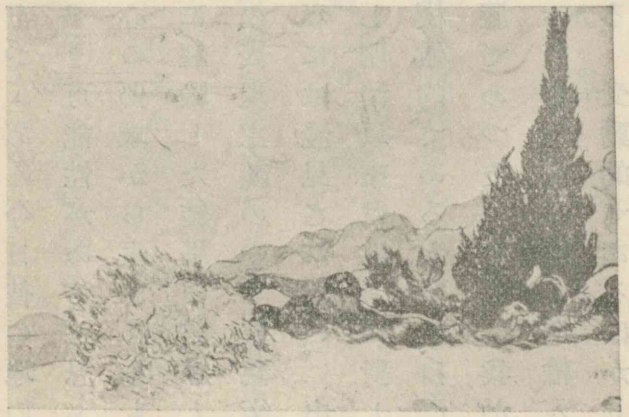
西諺にも「言談は銀、沈默は金」といふやうである。オットー氏のこの見方は、畢竟沈默の雄辯といふことを强調して考へて、そこに神祕的の或物の存在を認め、一面又宗教味と藝術味との極致に於ける一致といふことにも觸れてゐると思はれる。

彼の地の表現主義といふものが、我が國の一部でも奉ぜられてゐるやうである。併しながら、彼の表現主義なるものは、自然主義の唯物的思想の反動としての唯心的



富嶽三十六景　（甲州石班澤）　（葛飾北齋筆）

の思想が、種々な主義を生み來つた後、遂に極端に行きついて生じたもので、世界大戰の慘禍を經た彼の地の國民の生み出したもの、又生み出すべきものであつたのである。今猶未完成の主義と見られてゐるやうでもあり、又彼の地の國民に於て始めて意義あるものと思はれる。我が國の非表現的表現主義は、無主義も亦主義であると同じ意味で、やはり一種の表現主義と云へるけれども、彼の表現主義とは、歷史を異にし、その意義を異にすると共に、悠久性を帶びるものであるが、世界的に文化交流の行はれつ



杉　（ヴァン・ゴオグ筆）

つある今日、そして彼に於て東洋研究、特に日本研究の盛んになりつゝある今日、彼の地の思想界或は藝術界の一面に迎へらるべき可能性があると思ふのである。　要するに藝術は、必然な內心の要求から生まれるものであるとすれば、大戰の慘禍を直接に經驗した結果の焦燥と絕望とを感じない我が國の國民に、彼の表現主義のやうな藝術が必然に生まれねばならない理由が、私には發見されない。　由來我が國民は、嘗ては對岸の大陸に對し、明治以來は歐米に對して、餘りに受動的であり、輸入的であり、模倣的であると共に、自己の有するものの價値と尊さとを忘れ勝であつた。　そして我が國の浮世繪に據つて創造されたゴーホの畫が、我が國に逆輸入的に迎へられたりもしてゐるのである。　受動的であるばかりが國民の能ではないであらう。

（俳文學の考察）

浮世繪
ゴーホ　オランダの畫家、西曆一八九〇歿、年三十七。

九　春の海

春の海ひねもすのたり〳〵かな　谷口蕪村

鳥羽殿に五六騎いそぐ野分かな　同

絕頂の城たのもしき若葉かな　同

易水にねぶか流るる寒さかな　同

月天心貧しき町を通りけり　同

山路來て向ふ城下や凧の數　炭太祇

我が庵は榎ばかりの落葉かな　三浦樗良

五月雨やある夜ひそかに松の月　大島蓼太

美しや春は白魚かいわり菜　春秋庵白雄

柳散るや少し夕の日の弱り　久村曉臺

郊外に酒屋の倉や冬木立　春泥舍召城

鶯の二度來る日あり來ぬ日がち　高井几董

枯葦の日に〳〵折れて流れけり　高桑闌更

山霞み海くれなゐの夕かな　同

壁の中より　古文孝經を指す。
知らーざりーけりーな
みづぐきの
身ひとつなりけり
あだなるすさび

一〇 いさよふ月

昔、壁の中よりもとめ出でたりけむ書の名をば、今の世の人の子は、夢ばかりも身の上のこととは知らざりけりな。みづぐきの岡のくず葉、かへすがへすも、書き置くあとたしかなれども、かひなきものは親のいさめなり。また賢王の人をすてたまはぬまつりごとにもれ、忠臣の世を思ふなさけにも捨てらるるものは、かずならぬ身ひとつなりけりと思ひ知りながら、又さてしもあらで、なほこのうれへこそやるかたなく悲しけれ。

更に思ひつゞくれば、やまと歌の道は、たゞまことすくなく、あだなるすさびばかりと思ふ人もやあらむ。ひのもとの國に、あまの岩戸ひらけし時、よもの神たちの神樂のことばをはじめて、世を治め物をやはらぐるなかだちとなりにけるとぞ、この道の

ひじり
とぞ……おかーれーたりーける
二度勅をうけて
定家撰 新古今集。
新勅撰集。
爲家撰 續後撰集。
續古今集。
二人の男の兒
爲相。（十三歳）
爲守。（十一歳）
細川
播磨國（兵庫縣）細川の庄。
きえを爭ふ
子を思ふ
人の親の心はやみにあらねども、子を思ふ道にまどひぬるかな。藤原兼輔（後撰集）
あづまのかめの鏡
かげもやあらはるると

ひじりたちは記しおかれたりける。

さても又、集を撰ぶ人はためしおほかれど、二度勅をうけて代代に聞えあげたるは、たぐひなほありがたくやありけむ。そのあとにしもたづさはりて、二人の男の兒ども、もゝちの歌のふる反故どもを、いかなる緣にかありけむ、預りもたることあれど、「道を助けよ、子をはぐくめ、後の世を弔へ。」とて、深きちぎりをむすびおかれし細川のながれも、ゆゑなくせきとめられしかば、あとのりのともし火も、道を守り、家をたすけむ親子のいのちも、とふのりのともにきえをあらそふ年月を經て、危く心細きものから、何もろともにしてつれなくけふまではながらふらむ。

惜しからぬ身ひとつは、やすく思ひすつれども、子を思ふ心のやみはなほしのびがたく、道をかへりみるうらみはやらむかたなく、さてもなほ、あづまのかめの鏡にうつさば、曇らぬかげもや

ゆくりなく
出でなむとぞ思ひなりぬる
人やりならぬ
人やりの道ならなくに大方は、いきうしといひていざ歸りこむ。（古今集）
目かれーせーざりーつるーほど
侍從
爲相。
大夫
爲守。
あながちに

あらはるると、せめておもひあまりて、よろづのはばかりを忘れ、身を益なきものになしはてて、ゆくりもなくいさよふ月にさそはれ出でなむとぞ思ひなりぬる。

頃はみ冬たつはじめの、さだめなき空なれば、降りみ降らずみ時雨も絶えず、嵐にきほふ木の葉さへ、涙と共に亂れ散りつゝ、事に觸れて心細く悲しけれど、人やりならぬ道なれば、いきうしとても、とゞまるべきにもあらで、何となく急ぎ立ちぬ。

目かれせざりつるほどだに、あれまさりつる庭も籬も、ましてと見まはされて、したはしげなる人々の袖のしづくも、なぐさめかねたる中にも、侍從・大夫などのあながちに打屈したるさまいとこゝろぐるしければ、さまざまいひこしらへつ。

代々に書きおかれける歌の草子どものおくがきして、あだならぬかぎりをえりしたゝめて、侍從の方へ送るとて、書き添へた

藻鹽草

十六夜日記
一卷、阿佛尼の京都より鎌倉へ下れる紀行日記。阿佛尼：藤原爲家の妻、歌人、弘安六年（一九四三）歿。

る歌、

和歌の浦にかきとゞめたる藻鹽草
これを昔のかたみとも見よ

あなかしこ横波かくな濱千鳥
一方ならぬ跡を思はば

これを見て、侍從のかへりごといと疾く有り。
遂によもあだにはならじ藻鹽草
かたみを三代の跡に殘せば

迷はまし教へざりせば濱千鳥
一方ならぬ跡をそれとも

このかへりごと、いとおとなしければ、心やすくあはれなるにも、昔の人に聞かせたてまつりたくて、又うちしほたれぬ。

（十六夜日記）

得能 文
富山縣の人、哲學者、文學博士、前東京高等師範學校教授。

マーテルリンク
ベルギーの文學者、哲學者、劇作家、西曆一八六二年生。

跌宕
ものゝふの歌
源實朝の歌。

二 深い心

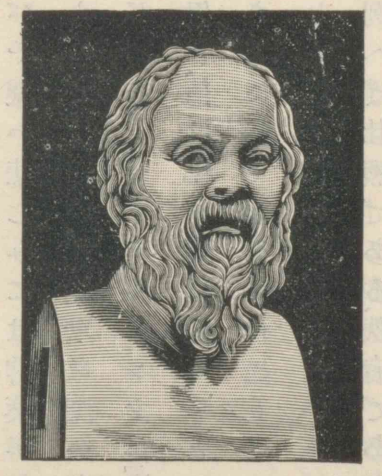
得能 文

淺い鍋は早く沸きたつ。深い思は言語に現れない。深い喜びや深い悲しみには言葉が無い。言葉に現れるのは眞に深いものではない。沈默は深い印象を與へる。沈默には深い意味がある。マーテルリンクが「蜂は暗黑裏に働き、思想は沈默裏に働く。」といつたのは面白い語である。詩歌などに於ても徒らに嬉しい又は悲しいといふよりも、却つてこれを露骨にいひ現さないところに無限の情趣が味はれる。例へば壯烈である、跌宕であると感歎の語を發するよりも、「もののふの矢並つくろふ小手のうへに霰たばしる那須の篠原。」といつた方が遙かに壯大である。それと同じく、悲しいといはぬ處に眞に深い悲しみがあり、嬉しいといはぬ處に眞に深い喜が

晦澁
佶屈

ある。われらがソクラテースや基督の運命に對して、無限の感慨をいだくのはこのためである。

我等が深い心の奥底には、常に動いて止まぬものがある。この活動が鈍り、若しくは停る時に我等は語を發する。しかもこの活動の眞相をその儘に發露することは困難である。されば、獨創的な思想家の書を讀む時は、常に晦澁・佶屈を感ずる。このやうな思想家は出來るかぎりおのれの思想を現し、これを傳へようとするのであるが、無限の活動はこれを捕捉することが容易でない。それで種々樣樣にこれをいひ現さうと苦心する。そして讀者はその言語を



ソクラテス

思索家
紹述

たどつてその思想を得ようとするのであるから、その眞實相に達することが困難なのである。既にいひ現さるれば動かなくなる。このいひ現された動かないものを再び整頓し、改めて排列すれば、平易明瞭ならしめることが出來る。これが卽ち獨創的思索家の書よりも、その紹述者の書が比較的に解しやすい所以である。これは深遠な思想のことのみではなく、我等の日常生活に於ても亦さうである。表面に現れた多くのことは、ありふれたことで何の奇もないやうであるが、然しその奥底にはいひ現しがたい深い活動があるのである。

奥の奥にある最も深いものは普通の意識ではなく、意識の奥底にあるものである。これが人格の核である、眞の我である。我等が深く思に沈む時は、眞の我が自らを見ようとするのである。我が我を見ようとする時には何の語もない。水中に魚鼈

純粋思惟
實踐理性

が跳れば水面に泡が浮かぶ。この泡が語である。そして跳るところが深いと泡は立たない。跳るところが水面に近ければ近い程、ます〳〵多く泡が立つ。語の多いのは活動が淺い處に行はれる證據である。そして跳躍の形狀によつて、泡の形狀に種類があると同じく、活動の樣式によつて、語がそれに應じて現れる。語はその人を表す。かくて生きた沈默は我等が深く自らの内に沈潛するのである。深く自らの内に沈んで自らを見る時に、我は具體的の全體に現れる。具體的のものは語で表されない。具體的の全體は活きて居る不斷の活動である、自由である。この活動は自らに法則を賦與する。それが理論的に働けば純粋思惟であり、實踐的に働けば實踐理性である。前者には學の基礎が立てられ、後者には道德の基礎が立てられる。自己が自己に與へた法則に從つて働けば善であり、働かなければ

ルーテル
ドイツの人、宗教改革を唱へた人、西暦一五四六年歿、年六十三。

法悅

惡である。惡は消極的であり、働かないことであり、意志しないことであり、非有である。從つて善惡は事の成果に在るのではなく、ルーテルのいつたやうに、「善事は善人を作らず、善人が善事をつくる。」のである。そして我が深く自ら省みて法則にそむいたと感ずる時に悔恨が起る。悔恨から罪の意識が起る。併し深く沈潛しないときはこの意識は起らない。されば沈潛することの淺い人には罪の意識は無い。從つて自ら辯護しようと試みる。こゝに於て語が多い。やがては不平を訴へる。自分ほど不幸なものは無いともいふ。眞實に切實に不幸を感ずるのは深く自ら省みた時である。即ち深い奥底が動いて居るのである。動いて居る時は語は無い。痛切な深い悲哀も、大歡喜の法悅も、共に語はない。しかも大地は震動する。

（淺人零語）

高山樗牛
名は林次郎、山形縣の人、文學博士、文藝批評家、明治三十五年歿、年三十二。

一代の宗師
百世の儀表

迦毘羅國
古代中印度にあつた釋迦族の一王國。

無上の正覺

巡錫

一三　世界の四聖

高山樗牛

生まれて一代の宗師となり、死して百世の儀表となる。聖人にあらずんば、誰かこれを能くせんや。釋迦・孔子・ソクラテース・キリストの四人、世呼んで世界の四聖と稱す。宜なるかな。

釋迦は西暦紀元前凡そ六百年の頃、印度迦毘羅國の王家に生まる。父は淨飯王、母は摩耶夫人、その本名を悉達多といふ。釋迦は、迦毘羅王家の族名にして、佛陀はその出家成道後の尊號なり。釋迦、身は一國の太子に生まれけれども、夙に思を人生の問題に潛め、二十九の歳、その妻子を捨てて王城を逃れ、山林に隱れて、道を修むる事六年、遂に人生の奥義を極め、無上の正覺に徹底せり。爾來五十餘年の間、中天竺の各地に巡錫して教化を布き、年八十餘歳にして跋提河の邊に歿しぬ。今の佛教は卽ち釋迦

名目

元々
歸命の大道

木鐸

令聞

大司寇
支那周代の官名。

一代の教訓に基づく。蓋し釋迦の當時、印度には幾多の哲學ありき。されど、徒らに思索の高遠を欽びて、人生の疑問に適切ならず、偏に幽玄なる談理と慘憺たる苦行とによりて、安心の道を求めたり。その流派を樹てて相爭ふ所は、畢竟名目上の優劣のみ。未だ一世の元々をして歸命の大道に就かしむるに足らず。釋迦この間に生まれ、その浩大なる慈悲と無邊なる智慧とを以て、一世の木鐸となり、民をしてその歸依する所を知らしめたり。

孔子、名は丘、孔子はその尊稱なり。今を去ること二千四百餘年の昔、支那の魯國に生まる。幼にして學を好み、禮を習ふ。壯年の頃より、魯國の官吏となり、傍ら子弟を教へて、夙に令聞あり、學德愈〻進む。魯の定公の時に至り、擢でられて大司寇の職に就く。治績大いに擧り、内外その風采を想望す。時に齊王、魯國の日に盛大に赴けるを嫉み、謀を構へ、定公をして孔子を用ひざら

老軀を挺す
蕩然
教化の陵夷
狂瀾を既倒に廻らす
名教
老脚蹉跎

しむ。孔子時運の非なるを見、五十六歳の老軀を挺し、門下の高弟を率ゐて四方の遊説を試みぬ。

當時の支那はいはゆる春秋戰國の亂世なり。周の王室は名のみにして、君臣の大義は蕩然として地を拂へり。或は臣にしてその君を弑する者あり、或は子にしてその親を害する者あり。強は弱を食み、大は小を併せ、權力の外に道義あるなし。教化の陵夷、風俗の頽廢、未だ曾てこの時の如きはあらず。孔子は既に志を魯に得ず、乃ち慨然として故國を出で、大義名分を天下に唱へて、狂瀾を既倒に廻らさんとす。志や高且大なりと謂ふべし。かくの如くにして四方を漂浪すること十三年、時非にして道容れられず、世また耳を名教に傾くる者なし。こゝに於て、已むを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸り、歎じていはく、「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾を知るものなきか。」と。門弟子貢、慰めていはく、「何ぞ夫子を知るものなからんや。」孔子答へていはく、「天を怨みず、人を尤めず、下學して而して上達す。我を知るものはそれ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えんや。」と。後、幾ばくもなくして歿す。時に年七十三。

下學して而して上達す
詭辯學派
空文

ソクラテースは、ギリシヤのアゼンス府に住める一彫刻師の子なり。その生まれたるは、凡そ紀元前四百七十年の頃にして、釋迦・孔子と年をへだつること二三十年に過ぎず。東西の聖人殆ど時を同じうして世に出でたるは、奇なりといふべし。ギリシヤの當時は、所謂詭辯學派の跋扈せし時代にして、知識は名目の爭に止まり、道德は空文の上にのみ貴ばれたり。その狀なほ釋迦當時の印度の如く、學問は人生社會の實際に關して、殆ど裨益するところなかりき。ソクラテースは慨然として時弊の救

諄々

倪諤

傲慢不遜

濟を以て自ら任じ、盛んに道を講じ、理を談じ、諄々として倦まず。詭辯學者の輩に遇へば、則ちその獨得の論法を以て辯難攻擊して一歩も假借せず。倪諤の正議、その稀代の雄辯と相伴ひて、一世を風靡せり。

然るに、喬木は風に折らるるの喩に漏れず、群小のソクラテースに快からざる者相謀りて、國法に背けるものとしてソクラテースを讒訴せり。その訴狀にいはく、「ソクラテースは國教を信ぜずして異教を剏め、以て人心を惑亂せり。宜しく國法により て死刑に處すべし。」と。ソクラテースがこの讒訴に對する抗議は實に壯快を極めたるものにして、慨世憂國の至誠を以て國民に訴ふるところ、語々百世の眞理ならざるはなし。然れども、判官は、ソクラテースを以て傲慢不遜なりとし、死刑を宣告せり。ソクラテース泰然として驚かず、いはく、「命のみ。」と。

アスクレピアスの神

ギリシヤの醫藥の神。

ソクラテースの獄中にあるや、常に門弟子を集めて、生死・靈魂・未來の事を說き、人の脫獄を勸むるものに對しては、輙ち答へていはく、「予はたゞ正義に導かれんのみ。死又何するものぞ。人生の幸福は靈魂の上に在るを知らずや。」と。終に從容として毒を仰いで歿す。將に歿せんとするや、弟子、遺言を求む。ソクラテース曰く、「爾一鷄を以てアスクレピアスの神に捧げよ。」と。蓋し、嘗て病みし時、平癒を祈りて謝を致すことを忘れしがためならん。ギリシヤの聖人ソクラテースは、かくのごとくにして逝きぬ。年七十。

キリストは本名を耶蘇といふ。キリストとは、「膏灌がれたる者。」といふ義にして、教徒の奉れる尊稱なり。ユダヤのベツレヘムに生まる。西曆紀元第一年は、その生後四年目に當れり。父はヨセフと呼べる賤しき木匠にして、母の名をマリヤといふ。

洗禮
收斂
放縱の俗
闕焉

長じて三十歳の頃、豫言者ヨハネの洗禮を受けて、始めて傳道の生涯に入り、爾來二年の間ユダヤの各地を歷遊し、諸〻の迫害に屈せずして、その福音を傳へたり。抑〻當時はローマ帝國の榮華その極に達し、禍亂の萌芽その中に胚胎し、災異荐(しきり)に至りて、天下寧日なし。殊にキリストの故國なるユダヤは、久しく暴君の收斂に疲れ、異邦人の侮慢を被れり。民衆は徒らに珍奇なる淫祠を崇拜して、益〻放縱の俗に流れ、學者は詭辯を弄し形式に拘泥して、空しく人を惑はすのみ。こゝに於て、一世の人心は闕焉として偉人の現出して、この暗黑の社會を照破せん事を渴望せり。キリストこの間に生まれ、自ら救世の使命を負へる神の子と稱し、昂然としてその偉大なる新教理を宣傳せり。遠近、靡然としてこれに赴く。僧侶・學者・官吏等はこれを喜ばず、以て、猥に新法異說を唱へて民を迷はす者なりとし、キリストを捕へて磔殺の刑

晏然
景慕
轗軻不遇
經綸

に處す。キリスト豫めこの事あらんを慮り、晏然として騷がず、靜に祈りていはく、「神よ、彼等を宥せ。彼等はその爲すべき所を知らざればなり。」と。その刑場に赴くや、路傍に哀哭する女子を顧みていはく、「エレサレムの女子よ、吾が爲に哭く事勿れ。唯己と己の子との爲に哭け。」と。かくの如くして、キリストが三十三年の短き生涯は十字架上の露と消え去りぬ。キリストの死後、その弟子等は激烈なる迫害に抵抗して、その教を天下に弘めぬ。キリスト教卽ちこれなり。

以上は四聖の略傳なり。その人物事蹟の高大にして雄偉なる、永く後人の景慕し、崇拜すべきところなり。四聖の中、釋迦を除きては、いづれも轗軻不遇の中にその生を終へたり。孔子は志を四方に得ず、その經綸を抱いて空しく詠歎の間に歿せり。ソクラテースとキリストとはいづれも讒奸の手に罹り、或は毒

を仰ぎ、或は盜賊と並びて十字架上に磔せられたり。慘憺たりと謂ふべし。然れども、これ等の人々の志すところは天下後世に在り。現世の禍福と一身の安危とは、毫もその顧慮するところにあらず。故に、その死に就くや、晏如としてなほ歸するが如し。孔子はその一身の不幸を憂へずして、却つて、「吾が道行はれずんば、吾何を以てか後世に見えん。」と、嗟歎せり。釋迦は衆生の爲に、その妻子と王位とを抛ちて、食を路傍に乞へり。ソクラテースは、死罪と脅迫に遇うて、揚言していはく、「正義を信ずるものにとりて、死はた何するものぞ。吾をして一日の生あらしめんか、その一日卽ち國民の迷をさまさざるべからず。」と。キリストは己を罪に陷るるものの爲に神に祈りたり。嗚呼、何ぞその慈悲の浩大にして無邊なるや。

四聖はその生まれたる所と時とを異にす。故に、その教理に

後天の氣質

も亦多少の差違なきを得ず。今その要略を擧ぐれば左の如し。

釋迦の教理は、煩惱を斷滅して、涅槃に達するを主旨とす。それ、人生は苦に始りて苦に終る。生老病死いづれか苦にあらざるべき。故に、吾人は現世を苦界と觀ぜざるべからず。而して、苦の原因は情慾に在り、情慾の原因は「我」の一念に執著するに在り。故に、吾人は「我」の一念を脫却して、無我無念の境界に達せざるべからず。これ人生究竟の樂地にして、涅槃卽ちこれなり。

孔子の教は、身を修め、家を齊へ、國を治め、天下を平かにするに在り。而して身を修むる基は孝に在り。故に孝は百行の本なり。君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信、皆これに本づく。人は生まれながらにして美德を天に稟くれども、後天の氣質によりて、これを完うすること能はざるもの多し。教育の要、こゝに於てかあり。すでに教育を受けて、身すでに修まらば、

知德合一

家自ら齊ふべく、家齊はば、國自ら治まるべく、國治まらば、天下自ら太平なるを得べし。故に、孔子の教は、一身の修養に始り、治國平天下に終るものと見るを得べし。

ソクラテースの教は、所謂知德合一說なり。思へらく、「眞正の知識は卽ち道德なり。故に行ふと知るとはもと一體のみ。知つて而して行はざると、行うて而して知らざるとは、共に知識道德の眞正なるものに非ず。眞理を確信し、その實行を以て最上の義務となさば、正義自らその中に在り。正義は靈魂の滿足なり。而して、靈魂は肉體と異にして、不朽不滅なるものなり。故に、人の正義を行ふ、現世の利害は決して顧慮すべきに非ず。道德は富貴の爲に存せず。然れども、富貴は道德の中に在り。」と。

キリストの教は、愛の教なりと稱せらる。いはゆる山上の垂訓は、三年傳道の極意を包括するを以て、左にその大略を擧げん。

いはく、「心の貧しきものは福なるかな、天國はその人の有なればなり。悲しむものは福なるかな、その人は慰めらるべければなり。飢ゑかわく如く義を慕ふものは福なるかな、その人は飽くことを得べければなり。憐むものは福なるかな、その人は憐みを得べければなり。心の清きものは福なるかな、その人は神を見るべければなり。惡に敵することなかれ。人若し汝の右の頰を打たば、左の頰をもめぐらしてこれに向けよ。汝の隣人を慈しみて、汝の敵を愛せよ。人に見せんがために義をその前に行ふなかれ。右の手の爲すところを左の手に知らしむる勿れ。僞善者の行に倣ふこと勿れ。隱れたるを鑑み給ふ神は、顯はに報い給ふべければなり。人は神と財とに兼ね事ふる事能はず。人を是非する勿れ。人の目にある塵を見ながら、何ぞ己が目にある梁木を見ざる。汝等求めよ、然らば與へられん。尋ねよ、然

沈淪

凛々

らば遇はん。叩け、然らば啓かれん。窄き門より入れ。沈淪に至る路は濶く、その門は大きく、これより入るものは多し。嗚呼いかに生命に至る門は窄く、その路は細く、これを得るものの少きぞや。凡そこの訓を聽きて行ふものは、磐の上に家建てたる智者の如く、聽けども行はざるものは、沙上に屋を架せる愚人の如し。」と。キリスト教の精髄は、後世の人如何なる色彩を加ふとも、畢竟この山上の垂訓を出でず。

かくの如きは、四聖の傳記及び教義の大要なり。嗚呼、四聖逝いてすでに幾千年ぞ。而して、この教の今なほ凛々として生氣あるを見よ。世界累代の幾億兆の民衆は、この教に憑りてその道念を養ひ、その安慰を求む。四聖の如きは實に人類の永遠の救濟者なりと謂ふべし。その遺德の高大なること何を以てかこれに比せんや。

（樗牛全集）

坪内逍遙
名は雄藏、岐阜縣の人、安政六年（一八五九）生、文學者、文學博士、早稲田大學名譽教授。

いなのめ
長柄堤
大阪市東淀川區豐崎町を流れる長柄川の堤。

片桐且元
豐臣秀吉・秀頼の臣、元和元年（一六一五）歿、年六十。

茨木
大阪府三島郡茨木町。

一三　長柄堤の訣別

坪内逍遙

晨鷄再び鳴いて殘月薄く、征馬しきりに嘶いて行人出づ。はや分れゆく横雲や、殘の星を一つづつ、鐘がけし行くいなのめの、長柄堤に秋闌けて、一叢蘆に風黑く、有明凄き淀川水、逝きて歸らぬ浪の音、狹霧に咽び白けゆく、千草が蔭の蟲の聲、哀はいとゞまさるらん。片桐市正且元は居城茨木へ立退かんと、從ふ郎黨一百餘人、寅の刻に邸を立つて、大阪城をあとになし、列を正してしづ〳〵と、長柄堤に差懸る。

後には何か一思案、寂然として駒立つる、長柄堤の有明がた、塒に囀る小鳥の聲、川霧やう〳〵晴れゆけば、遠樹模糊として幹を分ち、ほの見え渡る賤が屋に、一筋騰る朝煙、くだかけの聲勇ましく、生氣溢るる東の、空には似ぬやいる方の、月すさまじき

南山不落

加藤肥州　加藤清正、肥後國（熊本縣）熊本の城主、慶長十六年（三七一）歿、年五十。

阿附黨同

脣齒已に亡ぶ

鶉の嘴とくひちがふ

柳蔭、枯葉枝疎にして風飄々、見る目も昏しをちかたに、おぼろおぼろと現るる、名におほ阪の四衢八街、悄然として淋しげに、一棟高く聳えしは、

市「おゝ、あれこそはお天守ぢやなあ。南山不落と祝はせられ、千萬年の後までもと、築かせられし大阪城、故殿下薨れさせたまひて後、まだ程もなきに礎ゆらぎ、諸大名の心は、離れ々々、取りわけ加藤肥州逝去の後は、思慮ある者には堅節なく、義勇を存する者才略乏しく、阿附黨同して相鬩げば、大政所の御方さへ、當家を餘所にみそなはし、浮世離れし御有樣、脣齒已に亡ぶ。今にもあれ事起らば、金城湯池も其の甲斐なく、」

いひかけて聲曇らせ、

市「須彌より重き御遺命、夢聊かもわすれざれど、御運の末か情なや、此の且元のすること爲すこと、鶉の嘴とくひちがひ、兩家を繫ぐ絆にもと、迎へ奉りし千姫君は、東西不和の導火となり、毘盧舍那佛の御胸にも、大慈大悲は宿らざるか。『御家とこしなへに康かれ。』と、祝ひし文字が本となり、降いて湧いたる難題は、只前門の虎にして、後に不慮の豺狼あり。かゝる仕儀となつたること、御運の末といひながら、」

千姫君　德川秀忠の女、秀頼の室となる。

姑息因循

悚へず馬よりとび下り、彼方に向ひ平伏なし、

市「これしかしながら、不肖且元愚昧にして先見無く、姑息因循して大事を誤り、空しく關東の罠に罹り、仰せつけられし御遺命に、背き奉る今日の仕合せ、不忠とも言ひ甲斐なしとも思召さん。それを思へば、且元が、此の腸はちぎるるばかり。償ひ難き不臣の罪は、あの世で御詫び仕らん。御赦しなされて下さりませ。」

在すが如く兩手をつき、人目なければやゝしばし、不覺の涙に暮れけるが、やゝあつて心づき、

木村長門守重成
重玆の子、秀頼の臣、元和元年（一六一五）戰死、年二十一。

社稷

市「あゝ、われながら不覺のいたり。我が大罪の御詫よりも、差懸るお家の安危。長門守には如何にせし心もとなきことどもぢやなあ。」

すかしながむる折こそあれ、遙かに聞ゆる蹄の音、程もあらせず只一騎、淺霧つんざき一散に、汗馬に中を走り來る、木村長門守重成、

長「市正殿に候な。」市「長門殿、待ちかねしぞ。」

いふ間にかけ寄るくつわづら、右手におり立ち顏見合はせ、言葉はなくてそゞろにも、まづ袖濡るる朝露や、風飄々たる枯柳の枝、入るかたの月ゆらめきて、老いゆく秋の淋しさを、長柄堤に留むらん。

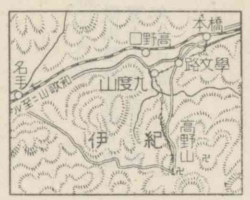
長「最早豐臣の御社稷も、愈、末となつたるか。棟梁と賴む足下まで、佞人讒者の毒舌に、逆臣の汚名を受け、空しく退身せらるるとは。某圖らぬ事よりして、端なくも御母公の御嫌疑、蒙り、出仕を遠慮の其の間に、思ひ懸けぬ珍變あり。續いて足下の御討手と昨朝承り、大いに驚きすぐにお表へ參入すれば、城內議論沸くが如く、織田入道殿日頃に似氣なく激論の末、席を蹴立て只今退座ありしとばかり。後は亂脈無法の評定、御母公の威を笠に被る大野・渡邊等が我意暴慢。此の上は是非に及ばず、彼等を一刀に斬つて捨て、腹かつ切らんと、二度まで刀の柄に手は懸けしが、貴殿が日頃の教訓を思ひ出して無念を忍び、無實と知つて忠臣を救ひ得ざりし言ひ甲斐なさ。」

悔むを且元押宥め、

市「いしくも堪忍せられしぞや。豫ても屢、申しし如く、お家の大仇は彼等にあらず。鼠輩の爲に命を落すは大忠臣の所爲にはあらじ。某とても此の度の一條、遺恨骨髓に徹すと雖も、今更繰

織田入道
織田信雄常眞入道、寛永七年（一六三〇）歿、年七十三。

いしくも



九度山　和歌山縣伊都郡、高野山北谷の山村。

眞田安房守　名は昌幸、慶長十三年（三三六）歿、年六十五。

り返すは愚痴の至り、大切なるはお家の後事、某退去の事關東に聞えなば、破綻生ぜんこと治定なるに、昨日までは、去就を定めざりし織田殿、已に心を變じ、京表へ退身せられしからは、城内の祕密悉く漏れ、年來の苦心皆うたかた。大亂破裂せんは目前なり。この上は只偏に籠城の計畫こそ肝要なれ。」　長「して籠城の計畫とは、何を以て先とすべきか。」　市「されば今御城に兵糧・金銀は乏しからず。まつた猛將勇卒にも事かゝねど、得難きは智謀の將なり。某これを慮り、萬一の備をなし置きたり。」　長「して其の智謀の將とは。」　市「いま九度山に隱れ忍ぶ、信州上田前の城主眞田安房守が二男左衞門佐幸村こそ、故太閤の恩を思ふ智勇兼備の良軍師、關ヶ原の一戰以來、關東の跋扈を怒り、蟄して世の態を窺ひ居るを、先年御味方となし置いたり。事起らば上使を以て急ぎかれを招かるべし。合戰の進退は一切彼の人に任ぜられよ。

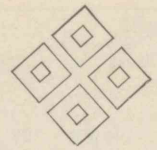
長曾我部盛親　元親の第四子、慶長十九年（三三四）歿、年不明。

後藤又兵衞基次　秀頼の臣、元和元年（三三五）歿、年不明。

紀州川　紀の川、和歌山市の北を流れる。

其の他關ヶ原の一亂以後、浪々なせし長曾我部盛親、まつた黑田家の浪人後藤又兵衞基次、何れも得易からぬ良將なるが、豫て因みはつけ置きたり。上、御使を以て招かせられなば、心を傾け馳せ參ぜん。これ第一の手配なり。」　長「して又籠城となつたる曉、敵を防がん手配は。」　市「その儀も豫て地利を考へ、出丸なくては叶ふまじと、前年紀州の山々より材木數多伐り出させ、商業の爲といつはり、紀州川の川上より浪華津におし流させ、御船入に積み置いたり。まつた港口の御庫には、年頃力めて購ひ置きたる數萬俵の糧米あり。籠城數年に亙るとも、なほ支ふるに餘りあるべし。」　長「それに加へて、故殿下が貯へ置かれし數萬の金銀、近年御出費嵩むと雖も、尙若干の餘財あり。」　市「甲冑・兵具も乏しからず。」　長「城は名に負ふ南山不落。」　市「眞田・後藤の智勇をもて、此の堅城にたて籠り、忠臣悉く心を一にし、偏に君家を守護すると

速水　名は守久、秀頼守護の七隊長の一。
御宿　名は正倫、元は武田氏の臣、後北條氏に仕ふ。
和久　名は宗是、秀吉の書佐。
先祖佐佐木　源三秀義の孫、近江守信綱。
四つ目結



（頼もしし
頼もし
社鼠

きんば、」　長「たとひ關東の老奸雄、利を啗はせ、諸大名を懷け、六十餘州の兵をつくし、四方八面より攻め寄すとも、」　市「中々三年・四年がほどに攻め落さんこと難かるべし。」　長「まつた若年には候へども、愈、軍始りなば、われまた一方を承り、速水・御宿・和久等と共に、忠義を金鐵の堅きに比し、命はもとより鴻毛の、吹き飜さん白旗は、先祖佐佐木が四つ目結・君臣・將士心を一にし、千變萬化の手を盡くさば、金石も亦透りぬべし。　利慾に集る關東勢、なに退くるに難かるべきや。　このうへは仰せに從ひ、この事君に言上なし、直ちに軍の手配せん。　御心安かれ、市正どの。」　市「ほゝ頼もし頼もしし。　只大切は上下の一致、必ず忠勤はげまれよ。　とはいひながら、往時に照らし、成行く末をかんがみれば、」　長「淀の御方の御氣質、社鼠に等しき大野・渡邊。」　市「上御發明にわたらせられるれど、」　長「讒佞これを蔽ふがゆゑ、」　市「地の利はあれども人の

大御所　徳川家康。

和なく、」　長「故太閤が御威武に、をのゝき震ひ打伏しし、六十餘州の民草も、」　市「天の時にや、大御所のおのづからなる德風に、いつしか靡く世の有樣。」　長「如何なれば、かく迄に、御運かたぶく西天の、」　市「有明の影薄れつゝ、」　長「東天紅と八面に、かしましく鳴くくだかけは、」　市「新日東天に昇るといふ、」　長「世の成行の、」　二人「影なるか。」

是非もなき世の有樣と、入る方の月詠め入り、しばしは愚痴にをちかた寺、耳驚かす鐘の聲、夜はほの〴〵と明けにけり。

二人「さらば〳〵。」

と、西東見送る方に霧や立つ、眼や曇る、おぼろ〳〵。　嘶く駒の聲はして、立別れゆく兩人が、此の世に殘す面影は、また見ぬ形となりにける。

（桐一葉）

頼山陽
名は襄、安藝國（廣島縣）の人、德川時代の文學者、歷史家、天保三年（一八四九）歿、年五十三。

頼山陽の母
春水の妻、名は靜、天保十四年（一八四三）歿、年八十四。

辰藏
山陽の長男、六歲にて夭死す。

三穗
山陽の妹、進藤彥介に嫁す。

當春
文政五年。（一八二二）

一四 母

頼山陽

新歲之慶千里同風、目出度申收め候。先以て益〻御機嫌能く御超歲遊ばせられし御儀と遙想、恭祝仕候。私方長幼無異加齡仕候。萬々御安意、被遊可被下候。冬年は尊書久々にて相達し、難有拜誦仕候。其の節寒氣の御障も不被爲在御氣丈に御世話被遊候旨、恐慶の至に存候。其節は被思召寄、辰藏へ、春服御贈り被下、頂戴爲致申候。色も仰せ被下候とは違ひ甚だ似合ひ申候。模樣も御好み被遊候事と相見え大に男らしく御座候。三穗よりくれられ候てんち羽織も縞柄大に辰藏に似合申候。當春は昨年とは違ひ、元日二日などは大に寒き事、雪も降り申候。三日は頗る長閑に御座候故、昨年祇園へ參り候事存じ出で、小池八幡宮へ私門生兩人かはる〴〵抱いて參詣致させ申候。

頼山陽

其の節彼の拜領の綿入に三穗よりもらひ候羽織きせ連れ參り申候。おばゝ樣にもらうたのぢやと度々御聞かせ候故、おば〳〵と申す事覺え言ひ申候。よくあるき申候。少しの間も目放なり不申候。扨も子を持て親の恩を知るとはよく申候ものと存候事に御座候。餘土などは皆皆あなた樣御世話にて成人仕候故苦勞を覺え不申との事に御座候。（中略）此度例年の如く鏡餅一重、砂糖一曲、差上げ申候。目出度

御祝ひ遊ばされ可被下候。舊臘中上候三輪酒は相屆き申候哉。梨影より三千三へ遣し度と申す一品、又御慰にも相成るべく畫本四册上げ申候。

御覽後、南の子供に遣され下さるべく候。梨影より、なにかと可申上候、之を略し候。猶永春の時を期し候。

三月三日　頓首

母上様　襄

餘一同覽

（書翰文講話及文話）

梨影　山陽の妻、元小石元瑞の養女、安政二年（一八五五）歿、年五十九。

三千三　山陽の義弟權二郎遺腹の子、號は後達堂、文化十二年（一八一五）生。

南の子供　賴杏坪の子、采眞のこと。

大湊　土佐國（高知縣）長岡郡と香美郡との間の港。

白馬　白馬の節會といふ、正月七日左右馬寮より白馬十頭宛を牽き、豐樂殿に於て天皇の御覽に供する儀式。

野邊にし……若菜なりけり

一五　都上り

一　大湊の泊

七日になりぬ。おなじ港にあり。けふは白馬を思へど、いとかひなし。たゞ波の白きのみぞ見ゆる。かゝる間に、人の家の池と名あるところより、鯉はなくて、鮒より始めて、川のも海のもこと物ども長櫃に擔ひ續けておこせり。若菜籠に入れて、雉など花に附けたり。若菜ぞ今日を知らせたる。歌あり。その歌、

淺茅生の野邊にしあれば水もなき
池に摘みつる若菜なりけり

いとをかしかし。この池といふは所の名なり。よき人の男につきて、下りて住みけるなりけり。この長櫃の物は皆人童までに呉れたれば、飽き滿ちて、舟子どもは腹鼓を打ちて、海をさへ

わりご

まじはれーれど

詠みーてむーやは

驚かして、波立てつべし。かくてこの間に事多かり。

今日わりご持たせて來たる人、その名などぞや今思ひ出でむ。この人歌よまむと思ふ心ありてなりけり。とかくいひ〳〵て、波の立つなることと憂へいひて、詠める歌、

行先に立つ白波の聲よりも
後れて泣かむわれや優らむ

とぞよめる。いと大聲なるべし。持て來るものよりは歌はいかがあらむ。この歌をこれかれ哀れがれども、一人も返せず。しつべき人もまじはれれど、これをのみ痛がり、物をのみ食ひて、夜更けぬ。この歌主「またまからず。」と、いひて立ちぬ。

ある人の子の童なる、窃にいふ、「まろこの歌の返せむ。」といふ。驚きて、「いとをかしき事かな。詠みてむやは。詠みつべくは、はや、言へかし。」といふに、「まからずといひて、立ちぬる人を待ちて、

（置かーるーめり
（置かーれーぬーめり

業平

在原業平のこと、阿保親王の第五子、在五中將といふ、六歌仙の一人、元慶四年（一八八〇）歿、年五十六。

山の端遁げて

あかなくにまだきも月のかくるるか、山の端遁げて入れずもあらなむ。（古今集）在原業平。

（あらなむ
（ありなむ

詠まむ。」とて、索めけるを、夜更けぬとにやあらむ、やがて往にけり。「抑、いかが詠みたる。」と、訝しがりて問ふ。この童さすがに恥ぢていはず。しひてとへば、言へる歌、

行く人も留るも袖の涙川
汀のみこそ濡れまさりけれ

となむ詠める。かくは言ふものか。うつくしければにやあらむ、いと思はずなり。「童言にては、なにかはせむ、おむな、おきなにをしつべし。惡しくもあれ、いかにもあれ、便あらば、遣らむ。」とて、置かれぬめり。

八日、障る事ありて、猶同じ所なり。今宵の月は、海にぞ入る。これを見て、業平の君の山の端遁げて入れずもあらなむといふ歌なむ覺ゆる。もし海邊にて詠まましかば、波立ちさへて入れずもあらなむと、詠みてましや。今この歌を思ひ出でて、ある人

那波　土佐國（高知縣）香美郡。

のよめりける。

照る月の流るる見れば天の川
出づる港はうみにざりける

とや。

二　舟中の月

九日、つとめて大湊より那波のとまりをおはむとて漕ぎ出でけり。これかれ、互に國の境のうちはとて、見送りにくる人あまたが中に、藤原言實・橘季衡・長谷部行政らなむ、御館よりいで給ひし日より、こゝかしこにおひくる。この人々ぞ志ある人なりける。この人々の深き志は、この海にも劣らざるべし。これより今はこぎはなれてゆく、之を見送らむとてぞ、この人どもはおひきける。かくて漕ぎ行くまに〳〵、海のほとりに留まる人も遠くなりぬ。舟の人も見えずなりぬ。岸にもいふ事あるべし。

宇多の松原　土佐國（高知縣）香美郡赤岡・岸本より手結崎の邊の海岸の古名。

舟にも思ふ事あれどかひなし。かゝれば此の歌を獨言にしてやみぬ。

おもひやる心は海をわたれども
ふみしなければしらずやあるらむ

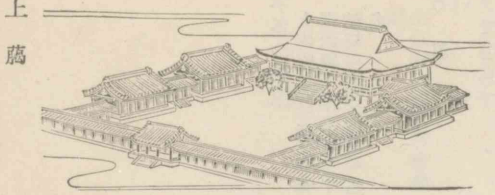
かくて宇多の松原をゆきすぐ。其の松の數いくそばく、いく千年へたりとしらず、もとごとに浪うちよせ、枝ごとに鶴ぞとびかふ。面白しと見るに、堪へずして、舟人のよめるうた。

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は
千代のどちとぞおもふべらなる

とや。此の歌は處を見るにえまさらず。かくあるを見つゝこぎゆくまに〳〵、山も海も皆くれ、夜ふけて西東も見えずして、てけの事機取の心に任せつ。男も習はねばいとも心細し。まして女は舟そこに頭をつきあてて音をのみぞなく。（土佐日記）

土佐日記　紀貫之が土佐國から國守の任を終へて歸京した時の日記。紀貫之―歌人、天慶九年（一六〇六）歿、年六十五。

十二月十九日
平治元年。（一八一九）
公卿僉議
光　頼
藤原顯頼の子、桂大納言、承安四年（一八五四）歿、年五十一。
信　頼
藤原氏、光頼の甥。
紫宸殿
上　蔦



一六　光頼卿參内

内裏には十二月十九日、公卿僉議とて催されけり。勤修寺左衛門督光頼卿、この程は信頼卿の擧動過分なりとて不參にておはしましけるが、參内して承らむとて、ことにあざやかに束帶引繕ひ、蒔繪の細太刀おとなしやかに佩きたまひ、乳母子の桂右馬允範能に、膚に腹卷著せ、雜色の裝束に出で立たせ、「自然の事もあらば人手にかくな。汝が手にかけて光頼が首をば急ぎ取れ。」とて、御身近く置き、その外清げなる雜色四五人召し具して、大軍陣を張りて處々門々を固め守護しけるを事ともせず、前高らかに追はせて入り給へば、兵共大いに恐れ奉り、弓をひらめ、矢をそばめて通し奉る。紫宸殿の後を經て、殿上を廻りて見給へば、信頼卿一座して、その座の上蔦達皆下にぞ著かれたる。光頼卿「こ

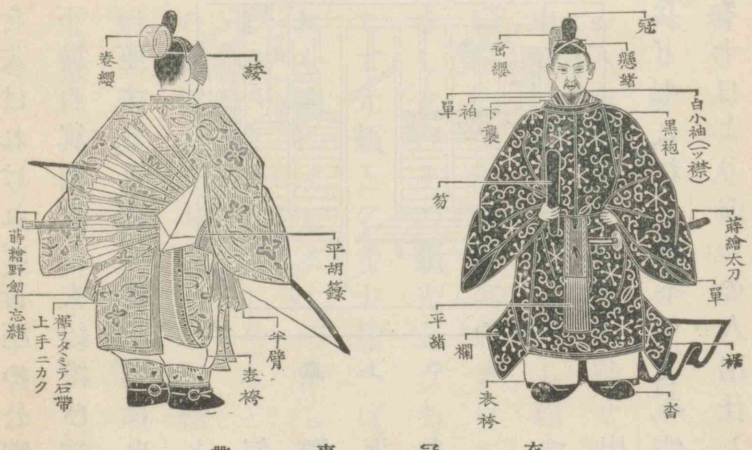
系圖

- 顯頼
  - 光頼
  - 惟方
  - 女（忠隆妻）
- 信頼
- 信俊
- 顯長
  - 長方
    - 時長

長　方
藤原顯長の子。

しどけなし

母方の伯父
光頼は信頼の母の兄に當る。

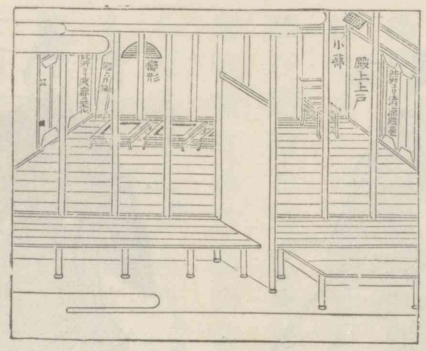


は不思議の事かな。人はいかに振舞ふとも、彼は右衛門督、われは左衛門督なれば、下には著くまじきものを。」と、思はれければ、左大辨宰相長方卿、末座の宰相にておはしましけるに、「今日の御座席こそ世にしどけなう見え候へ。」と、色代してしづ〳〵と歩み、信頼卿の上にむずと著き給ふ。光頼卿は信頼卿の爲には母方の伯父なる上、大力の剛の人なれば、殊に畏れて見えられけり。右の袖の上に居掛けられて、伏目になりて色

衛府督
右衛門督信頼を指す。

さんぬる

を失はれければ、著座の公卿、あなあさましと見たまふに、光頼卿下襲の尻引直し、衣紋繕ひ、笏とり直し、氣色して、「今日は衛府督が一座すと見えて候。召に參ぜざらむ者をば死罪に行はるべしとやらむ承りて參内する所なり。抑、何事の御諚ぞ。」と、問ひけれども、信頼卿物も宣はず。著座の公卿も一言の返答なかりければ、まして僉議の沙汰もなし。



殿上の圖

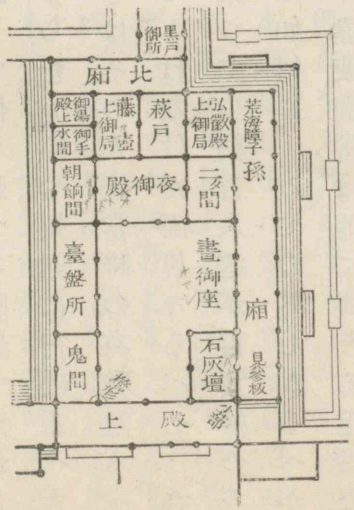
程經て、光頼卿つい立ちて、「惡しう參つて候ひけり。」とて、しづ〳〵と歩み出でられけり。庭上に充ち滿ちたる兵ども、これを見奉りて、「あはれ、この殿は大剛の人かな。さんぬる十日より多くの人出仕し給ひつれども、右衛門督殿の座上に

おはしまさざりつるに

頼信
源満仲の子。

壁に耳、天に口

著く人、一人もおはしまさざりつるに、仕出したることよ。門を入り給ふより、いさゝかも臆したる體も見え給はず。あはれ、この人を大將として合戰せば、いかばかりかたのもしからむ。」と申せば、傍なる者、「むかし頼光。頼信とて、源氏の名將おはしましき。その頼光をうち反して、光頼と名のり給へば、これも剛にましますぞかし。」といへば、また傍より、「などその頼信をうち反して、信頼と附き給ふ右衛門督殿は、あれ程臆病にはおはしますぞ。」といへば、「壁に耳、天に口といふことあり。おそろし〳〵、聞かじ。」といひながら、みなしのびつゝ笑ひに笑ひけり。



清涼殿正面圖

荒海の障子

別當惟方
検非違使別當藤原惟方。

あなる
あるなる
あんなる

有職
少納言入道
藤原通憲入道信西。

神樂岡
京都市左京區吉田神社の東方、俗稱吉田山。

先蹤

光頼卿かやうに振舞ひ給へども、急ぎても出でられず、殿上の小蔀の前、見參の板高らかにふみ鳴らして立たれたりけるが荒海の障子の北、萩の戸の邊に、弟の別當惟方のおはしましけるを招き寄せ、宣ひけるは、「公卿僉議とて催されつる間、參じたれども、承り定めたる事もなし。誠やらむ、光頼も死罪に行はるべき人數にてあなる。傳へ承る如きは、その人皆當時の有職、然るべき人共なり。その中に入らむことはなはだ面目なるべし。さても先日右衛門督が車の尻に乘つて、少納言入道が首實檢のために、神樂岡へ向はれけることは如何に。以ての外しかるべからざる擧動かな。近衛大將・檢非違使別當は他に異なる重職なり。その職に居ながら、人の車の尻に乘り給ふ事、先蹤も未だ聞き及ばず、當時も大いに恥辱なり。就中首實檢は甚だ穩便ならず。」とのたまへば、別當「それは天氣にて候ひしかば。」とて、赤面せら

勸修寺内大臣
藤原高藤。

三條右大臣
高藤の子定方。

英雄

さしもどく

大貳清盛
平清盛は當時官太宰大貳であつた。

切目の宿
紀伊國（和歌山縣）日高郡にある。

れけり。

光頼卿重ねて「こは如何に、勅諚なればとて、いかで存ずる旨を一議申さざるべき。われらが曩祖勸修寺内大臣・三條右大臣、延喜の聖代に仕へてより以來、君既に十九代、臣また十一代、承り行ふ事は皆これ德政なり。一度も惡事に從はず。當家はさせる英雄にはあらざれども、ひとへに有道の臣に伴つて、讒佞の輩にくみせざりし故に、昔より今に至るまで人にさしもどかるるほどのことはなかりしに、御邊始めて暴惡の臣に語らはれて累家の佳名を失はむこと口惜しかるべし。大貳清盛は熊野參詣を遂げずして、切目の宿より馳せ上るなるが、和泉・紀伊・伊賀・伊勢の家人等待ちうけて、大勢にてあなる。信頼卿がかたらふ所の兵若干ならじ。平家の大勢押寄せて攻めむには、時刻をやめぐらすべき。もしまた火などをかけなば、君もいかでか安穩に渡ら

なりーたらーむーだにも

申し合はするとこそ聞ゆれ

主上　第七十八代二條天皇。

上皇　第七十七代後白河天皇。

朝餉の煙

影ろふ

かくござんなれ

せ給ふべき。灰燼の地となりたらむだにも、朝家の御歎なるべし。如何にいはむや、君臣ともに自然のこともあらば、天下の珍事、王道の滅亡この時にあるべし。右衞門督は、御邊に大小事を申しあはするとこそ聞ゆれ。相構へて〳〵、隙を窺ひ王體恙なく在します樣に思案せらるべし。さて、主上は何處におはしますぞ。」「黒戸の御所に。」「上皇は。」「一本御書所に。」「内侍所は。」「溫明殿に。」「劍璽は何處に。」「夜のおとゞに。」と、左衞門督次第に尋ね給ひければ、別當かくぞ答へられける。また「朝餉の方に人音のし、櫛形の穴に人影のしつるは何者ぞ。」と宣へば、「それには右衞門督すみ候へば、その方ざまの女房などぞ影ろひ候らむ。」と申されければ、光頼卿聞きもあへず、「世の中は今はかくござんなれ。主上の渡らせたまふべき朝餉には信頼住み、君をば黒戸の御所に遷し參らせたり。末代なれども、さすがに日月はいまだ

のろ〳〵し

すさまじげ

許　由　支那古代の隱士、堯が天下を彼に讓らんとするを聞いて、耳汚れたりとて穎川で耳を洗つた。

文法

まじ

らる

けり

き

つ

らむ

ざり

平治物語　三卷、著者不明。或は葉室時長なりともいふ、平治の亂の顚末を記した軍記物語。

地に墜ちたまはぬものを、天照大神・正八幡宮は王法を如何に守り給ひぬるぞ。異國にはかやうの例ありといへども、わが朝には未だかくの如き先蹤を聞かず。前代未聞の不思議かな。」と、のろ〳〵しげに憚る所なく口說き給へば、惟方は人もや聞くらむと、よにすさまじげに立たれたれども、かつは悲しくて、「われ如何なる宿業によつて、かゝる世にうまれ會ひ、憂きことをのみ見聞くらむ。昔の許由にあらねども、今の内裏の有樣を見聞かむ輩は、耳をも目をも洗ひぬべくこそ侍れ。」とて、上の衣の袖絞るばかりに泣かれけり。信頼の座上に著かせられし時は、さしもゆゝしく見え給ひしが、君の御事をかなしみて、うちしをれてぞ出で給ひける。

（平治物語、光頼卿參内の事）

醍醐の帝　第六十代。
時平　藤原氏、延喜九年（一五六九）歿、年三十九。
菅原　名は道眞、延喜三年（一五六三）歿、年五十九。
下さしめ給へり　しに・・・・
心おきて
昌泰四年　紀元一五六一年。

一七　菅公の配流

醍醐の帝の御時、時平のおとゞ左大臣の位にて、年いと若くておはしき。菅原のおとゞは右大臣の位にておはします。その折、みかど御年いと若くおはします。左右大臣に世の政を行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、その折、左大臣御年二十八九ばかりなり、右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしけむ、ともに世の政をせしめ給ひしほどに、右大臣はざえも世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきても殊の外に賢くおはしまし、左大臣は御歳も若く、ざえも殊の外に劣り給へるによりて、右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安からずおぼしたるほどに、さるべきにやおはしけむ、右大臣の御爲によからぬこと出で來て、昌泰四年正月二十五日、太宰權帥になし奉りてながされ給ふ。

この大臣の子ども數多おはせしに、女君たちは壻取し、男君たちは皆ほど〳〵につけて位どもおはせしを、それも皆方々に流され給ひて悲しきに、幼くおはしける男君、女君たち慕ひ泣きておはしければ、「小さきはあへなむ」と、おほやけも許さしめ給ひしかば、ともにゐて下り給ひしぞかし。帝の御掟きはめてあやにくにおはしませば、この御子どもを同じかたにだに遣さざりけり。方々にいと悲しく思して、御前の梅の花を御覽じて、

東風吹かば匂ひおこせようめの花
あるじなしとて春なわすれそ

また、亭子の帝にきこえさせ給ふ。

流れゆくわれはみくづになりはてぬ
君しがらみとなりてとゞめよ

おほやけ
あやにく
春なわすれそ
亭子の帝　第五十九代宇多天皇。
しがらみ

山崎

山城國（京都府）乙訓郡。

菅公左遷乘船の圖

圖は道眞が延喜元年（九〇一）正月廿五日、太宰權帥として配所へ赴かうとして船出するところである。濱邊に敷皮を敷いた上に、冠を被つた官人が見送つてゐるのは、追立の官人檢非違使で、その左右に弓をとつて居るのは檢非違使の下部である。その外の人は船出を見送つて歎いて居る各階級の人々で、中には泣き倒れて居る人もある。屋形から軸によつて隨從の人々が居る。艫の方の舟屋形にゐるのが主人公の道眞である。

菅公左遷乘船の圖

なきことによりかく罪せられ給ふを、からく思し歎きて、やがて山崎にて出家せしめ給ひて都遠くなるまゝに、あはれに心細くおぼされて、

君がすむ宿の梢を
　　ゆくゝと
　　隱るるまでも

かへりみしはや

また、播磨の國におはしましつきて、明石のうまやといふ處に御宿りせしめ給ひて、驛の長のいみじう思へる氣色を御覽じて、作ら

筑紫

古は九州の總名。けれどもこゝは筑前（福岡縣）太宰府をさす。

（北野緣起繪詞）

せ給へる詩いと哀し。

驛長無驚時變改。
一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし著きて、ものあはれに心細く思さるるゆふべ、遠方に所々煙立つを御覽じて、

夕されば野にも　山にも立つ烟
　　なげきよりこそ
　　もえまさりけれ

又、雲の浮きてたゞよふを御覽じても、

月日こそは……給はめとこそはあめれ

大貳の居ところ
太宰府。

御覽じやられけるに……

文集
白氏長慶集。

白居易
號は樂天、支那唐の詩人、大中元年（西曆八四七）歿、年七十五。

山わかれ飛びゆく雲の歸り來る
かげ見るときはなほ賴まるる

さりともと世を思しめされけるなるべし。月のあかき夜、

海ならずたゞよふ水の底までも
きよきこゝろは月ぞ照らさむ

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照らし給はめとこそはあめれ。

筑紫におはします所の御門もかためておはします。大貳の居どころは遙かなれども、樓の上の瓦などの、心にもあらず御覽じやられけるに、またいと近く觀音寺といふ寺のありければ、鐘の聲をきこしめして作らせ給へる詩ぞかし。

都府樓纔看瓦色。　觀音寺只聽鐘聲。

これは、「文集の白居易が『遺愛寺鐘欹枕聽、香爐峰雪撥簾看。』と、いふ詩にもまさざまに作らしめ給へり。」とこそ、昔の博士どもは申しけれ。

後集
菅家後集。

またかの筑紫にて、九月十日、菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月の今宵、內裏にて菊の宴ありしに、この大臣の作らしめ給へりける詩を、帝かしこく感じ給ひて、御衣賜はり給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、御覽ずるに、いとゞ其のをり思し召しいでて作らせ給ひける。

去年今夜侍清涼。　秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今在此。　捧持毎日拜餘香。

この詩いとかしこく、人々感じ申されき。

このことども、たゞちりぢりなるにもあらず、かの筑紫にて作り集めさせ給へりけるを、かきて一卷とせしめ給ひて、後集と名づけられたり。またをり〳〵の歌をかきおかせ給へりける、お

のづから世に散りきこえしなり。

また雨の降る日、うちながめ給ひて、

あめの下かわけるほどのなければや
著てしぬれぎぬひるよしもなき

やがて、かしこにてうせ給へり。

夜の中に、この北野にそこらの松をおほさしめ給ひて渡り住み給ふこそは、只今の北野宮と申して、あらひと神におはしますめれば、おほやけも行幸せしめ給ふ。いとかしこくあがめ奉り給ふめり。

筑紫のおはしましし所は、安樂寺といひて、おほやけより別當・所司などなさせ給ひて、いとやむごとなし。

（大鏡）

そこら　そこら

北野宮　官幣中社北野神社、京都市上京區にある。

渡り住み給ふこそは……おはしますめれば　大鏡　八卷、著者不明。文德天皇から後一條天皇まで百七十六年間の出來事を記した假名文の歴史。

竹田出雲　名は清定、大阪の人、淨瑠璃作者、寶暦六年（一七五六）歿、年六十六。

一八寺子屋

竹田出雲

道眞の一子菅秀才は、道眞の左遷後、寺子屋の師匠なる舊臣武部源藏の家に匿まはれて居たが、事遂に露顯に及び、時平の家來春藤玄蕃及び松王丸は、源藏を召喚して菅秀才の首引渡しを命じた。その不在中、一人の女房、小太郎といふ七歳の男兒を伴ひ來りて弟子入りを依頼し、自らは、隣村に用事ありと稱して立去つた。源藏は、菅秀才の命運の窮せるを見て、當惑し、顏色蒼ざめて歸來したが、小太郎の顏貌が菅秀才に酷似せるを見て大いに喜び、之を身代りとして一時を糊塗せんと考へた。

かゝる所へ春藤玄蕃首見る役は松王丸、病苦を助くる駕乘物、門口に舁き据うれば、後には大勢村の者、附き隨うて、「申上げます。皆是にをる者の子供が、手習に參つてをります。若し取違へ首

討たれては、取返しがなりませぬ。何卒お戻し下され。」と願へば、玄蕃「やあ、かしましい蠅蟲奴等。うぬらが餓鬼の事まで、身共が知つた事か。勝手次第に連れ失せう。」と、呵りつくれば松王丸「やれお待ちなされ、暫く。」と、駕より出づるも刀を杖「憚りながら彼等とても、油斷はならぬ。病中ながら拙者めが檢分の役勤むるも、外に菅秀才の顔見知りし者なき故、今日の役目しおほすれば、病身の願御暇下さるべしと、有難き御意の趣、疎かには致されず。菅丞相の所縁のもの、此の村に置くからは、百姓共もぐるになつて、銘々が忰に仕立て、助けて歸る手も有る事。こりややい百姓めら、ざは〳〵とぬかさずとも、一人づつ呼び出せ。面改めて戻してくりよ。」と、退引させぬ釘鑓、打てば響けの内には夫婦、豫て覺悟も今更に、胸轟かすばかりなり。

表はそれとも白髪の親仁、門口より聲高に「長松よ〳〵。」と呼

菅丞相
菅原道眞

び出せば「おつ」と答へて出てくるは、腕白顔に墨べつたり、似ても似付かぬ雪と墨。「是ではない。」と、赦しやる。「岩松は居ぬか。」と呼ぶ聲に「祖父様、何ぢや。」とはしこくて、出でくる子供の頑是なき、顔は丸顔きみしり茄子「詮議に及ばぬ、連れうせう。」と睨みつけられ「おゝ、こはや、嫁にもくはさぬ此の孫を、命の花落ち遁れし。」と、祖父が抱へて走り行く。次は十五の涎くり「ぼんよ〳〵。」と親父が手招き「父よ、おれはもう爰から抱かれて往の。」と、甘える顔は馬顔で、聲蚤「おゝ泣くな、抱いてやらう。」と、干鮭を猫なで親がく

頑是なし
きみしり茄子
むしり立ての茄子。

寺子屋淨瑠璃本

胡亂

源藏　武部源藏、道眞の家來、主君より筆道の傳授を受け道眞左遷の後寺子屋の師匠となる。

はへ行く。「私が忰は器量よし。お見違へ下さるな。」と、斷りいうて呼び出すは、色白々と瓜實顏「こいつ胡亂。」と引捕へ、見れば首筋眞黑々、墨か痣かはしらねども「こいつでない。」と突き放す。其の外山家・奧在所の、子供殘らず呼び出して、見せても見せても似ぬこそ道理、土が產ました量り芋、子ばかりよつて立歸る。「すは、身の上。」と源藏も、妻の戸浪も胴を据ゑ、待つ間程なく入り來る兩人「やあ源藏、此の玄蕃が目の前で、討つて渡そと請け合うた菅秀才が首、さあ請け取らう、早く渡せ。」と手詰の催促、ちつとも臆せず「假初ならぬ右大臣の若君、搔首・捻首にもいたされず、暫くは御容赦。」と、立上るを松王丸「やあ、其の手はくはぬ。暫しの容赦と隙とらせ、逃支度しても、裏道へは數百人を附け置き、蟻の這ひ出る處もない。生顏と死顏は相好が變るなどと、身代りの贋首、それもたべぬ。古手な事して後悔すな。」と、言はれてぐつと

瀨戸際

せき上げ「やあ、いらざる馬鹿念、病みほうけた汝が目王がでんぐり返り、逆樣眼で見ようは知らず、紛れもなき菅秀才の首、追付け見せう。」「おゝ其の舌の根の乾かぬ中に、早く討て、とく斬れ。」と、玄蕃が權柄はつとばかりに源藏は、胸を据ゑてぞ入りにける。

傍に聞き居る女房は、爰ぞ大事と心も空、檢使は四方八方に、眼を配る中にも松王、机文庫の數を見廻し「やあ、合點の行かぬ、先達て往んだ餓鬼等は以上八人。机の數が一脚多い。其の忰は何處にをるぞ。」と見咎められて、戸浪ははつと「いや、こりや今日始めて寺、いや寺參りした子がござんす。」「何、馬鹿な。」「おゝ、それそれは、即ち菅秀才のお机文庫。」と、木地を隱した塗机、ざつと捌いて言ひ拔ける。「何にもせよ隙どらすが油斷のもと。」と、玄蕃諸共突つ立上る。こなたは手詰、命の瀨戸際、奧にはばつたり首討つ音、はつと女房胸を抱き、踏ん込む足もけしとむ內、武部源藏

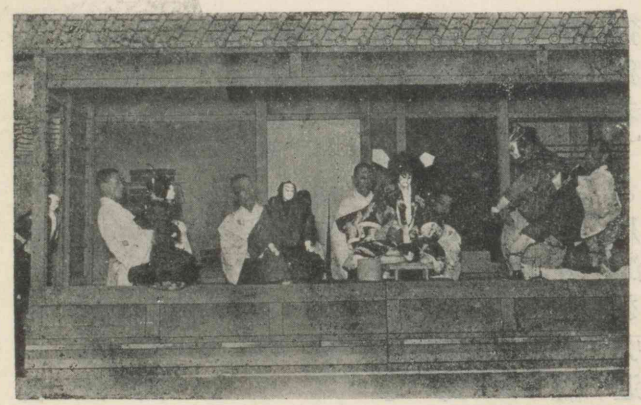
淨玻璃の鏡
閻魔の廳にある鏡、この鏡に映して善人か惡人かを見分け善人には金製の札を渡して極樂へ、惡人には鐵製の札を渡して地獄へ送るといふ。

白臺に、首桶乘せてしづ〳〵出で、目通りに差置き、「是非に及ばず、菅秀才の御首討ち奉る。固より大事な御首、性根をすゑて、さあ松王丸、しつかりと檢分せよ。」と、忍びの鍔元寛げて、虚といはば斬り付けん、實といはば助けむと、固唾を呑んで控へ居る。「はゝは何のこれしきに、性根所か、今淨玻璃鏡にかけ、鐵札か金札か、地獄・極樂の境。家來衆、源藏夫婦を取卷きめされ。」畏まつたと捕手の人數、十手振つて立ちかゝる。女房戸浪も身を固め、夫は固より一所懸命、「さあ實檢せよ、檢分。」といふ一言も命がけ、後ろは捕手、向うは曲者。玄蕃は始終眼を配り、こゝぞ絶體絶命と思ふ内、はや首桶引寄せ、蓋引明けた首は小太郎、贋というたら一討とはや拔きかける。戸浪は祈願、「天道樣、佛神樣、憐み給へ。」と女の念力。眼力光らす松王が、ためつすがめつ窺ひ見て、「むう、こりや菅秀才の首討つたは、まがひなし、相違なし。」といふにもびつく

寺小屋
向つて右より
春藤玄蕃。
松王丸。
武部源藏。
戸浪。

青息吐息

り源藏夫婦、あたりきよろ〳〵見合はせり。


寺子屋（舞臺面）

檢使の玄蕃は檢分の詞證據に、「出かした、出かした。よく討つた。褒美にはかくまうた科赦してくれる。いざ松王丸、片時も早く時平公へお目にかけん。」「いかさま隙取つてお咎めもいかが。拙者は是よりお暇賜はり、病氣保養致したし。」「おゝ、役目は濟んだ。勝手にせよ。」と首請取り、玄蕃は館へ、松王は駕に搖られて立歸る。夫婦は門の戸ぴつしやりしめ、物もえ言はず青息吐息、五色の息を一時に、ほつと吹き出すばかりなり。

胸撫で下し源藏は、天を拜し地を拜し、「あゝ、有り難や忝なや。凡人ならぬ我が君の、御盛德が顯れて、松王めが眼が霞み、若君と見定めて歸つたは、天成不思議のなす所、御壽命は萬々年、悦べ女房。」「いや、もう〳〵 大抵の事ぢやござんせぬ。あの松王めが眼の球へ、菅丞相樣が入つてござつたか。但し首が黄金佛ではなかつたか。似たというても瓦と金寶の花の御運開と、あまり嬉しうて涙がこぼれる。はあゝ有難や尊や。」と、悦び勇む折からに、小太郎が母いきせきと、迎と見えて門の戸叩き、「寺入の子の母でござんす。今漸く歸りました。」といふ聲聞くより又びつくり、一つ遁れて又一つ、「こりやまあ何と、どうせう。」と、妻が騒げど夫は胴据ゑ、「こりや、最前言うたは爰の事。若君には替へられぬ。狼狽者。」と、戸浪を引退け、門の戸ぐわらりと引明くれば、女は會釋し、「これはまあ〳〵お師匠樣でござりますか。わるさをお賴

み申します。何處に居やるぞ、お邪魔であろに。」といふを幸ひ、「いや奥に子供と遊んで居ります、連れ立つて歸られよ。」と、眞顏でいへば、「おゝ、そんなら連れて歸りましよ。」と、ずつと通る後ろより、只一討と斬り付くる。女もしれ者ひつぱづし、逃げても逃さぬ源藏が、刃鋭く斬り付くるを、我が子の文庫ではつしと請けとめ、「これ待つた、待たんせ。こりやどうぢや。」と、刎ねる刃も容赦なく、又斬り付くる文庫は二つ、中よりばらりと經帷子、南無阿彌陀佛の六字の幡、顯れ出でしは、「こはいかに。」と、不思議の思に劒も鈍り、進み兼ねてぞ見えにける。小太郎が母涙ながら、「若君菅秀才のお身がはり、お役に立てて下さつたか、まだか樣子が聞きたい。」と、いふにびつくり、「して〳〵それは得心か。」「得心なりやこそ此の經帷子、六字の幡。」「むう、して其の許は何人の御内證。」と尋ぬる内に門口より、「梅は飛び櫻は枯るる世の中に、何とて松

のつれなかるらむ。女房悦べ、悴はお役に立つたぞ。」と、聞くよりわつとせき上げて、前後不覺に取亂す。「やあ未練者め。」と叱りつけ、ずつと通るは松王丸。見るに夫婦は二度びつくり。夢か現か夫婦かと、呆れて詞もなかりしが、武部源藏威儀を正し、「一禮は先づ後の事。これまで敵と思ひし松王、打つて變つた所存はいかに。訝しさよ。」と尋ぬれば、「おゝ御不審尤も。存じの通り、我々兄弟三人は、銘々に別れて奉公。情なや此の松王は時平公に隨ひ、親兄弟とも肉縁切り、御恩請けた丞相樣へ敵對。主命とはいひながら、皆これ此の身の因果、何とぞ主從の縁切らむと、作病構へ暇の願。菅秀才の首見たらば、暇やらむと今日の役目。よもや貴殿が討ちはせまい。なれども身代りに立つべき一子なくば如何せむ。爰ぞ御恩を報ずる時と、女房千代と言ひ合はせ、二人の中の悴をば、先へ廻して此の身代り。机の數を改めし

も、我が子は來たかと心の著。菅丞相には我が性根を見込み給ひ、何とて松のつれなからうぞとの御歌を、松はつれない〳〵と、世上の口に懸る悔しさ。推量あれ源藏殿。悴がなくばいつ迄も、人でなしといはれむに、持つべき者は子なるぞや。」と、いふに女房猶せき上げ、「草葉の蔭で小太郎が、聞いて嬉しう思ひましよ。持つべき者は子なりとは、あの子が爲によい手向。思へば最前別れた時、いつにない跡追うたを叱つた時の其の悲しさ。冥途の旅へ寺入と、早蟲がしらせたか。隣村へ行くというて、途まで いんで見たれども、子を殺さしにおこして置いて、どうまあ内へいなるるものぞ。死顏なりとも今一度見たさに、未練と笑うて下さんすな。包みし祝儀はあの子が香奠、四十九日の蒸物迄、持つて寺入さすといふ、悲しい事が世に有らうか。育ちも生まれも賤しくば、殺す心もあるまいに、死ぬる子はみめよしと、美しう

生まれたが、可愛や其の身の不仕合。何の因果に疱瘡迄しまうた事ぢや。」とせき上げて、かつばと伏して泣きければ、倶に悲しむ戸浪は立寄り、「最前にも、連合が身代りと思ひ付いた側へいて、『お師匠様、今から頼み上げます。』というた時の事思ひ出せば、他人のわしさへ骨身が碎ける。親御の身ではお道理。」と涙添ふれば、「いやこれ御内證。こりや女房も何でほえる。覺悟した御身代り、内で存分ほえたでないか。御夫婦の手前もある。いや何、源藏殿。申し付けてはおこしたれども、定めて最期の節、未練な死を致したで御座らう。」「いや若君菅秀才の御身代りと言ひ聞かしたれば、潔う首差伸べ。」「あの逃げ隠れも致さずにな。」「につこりと笑うて。」「むゝゝ出かし居りました。利口な奴、立派な奴、健氣な八つや九つで、親に代つて恩送り、お役に立つた孝行者、手柄者と思ふから、思ひ出すは櫻丸、御恩も送らず先立ちし、さぞ

や草葉の蔭よりも、羨ましかろ、けなりかろ。悴が事を思ふにつけ、思ひ出さるる出さるる。」と、流石同腹同性を、忘れかねたる悲歎の涙。「なうその伯父御に、小太郎が逢ひますわいの。」と取付いて、わつとばかりに泣き沈む。歎も漏れて菅秀才、一間の内より立ち出で給ひ、「我に代ると知るならば、この悲しみはさすまいに、かはいの者や。」と御袖を、絞り給へば、夫婦ははつと共に浸(ひた)す る有難涙。「序ながら若君様へ御土産。」と、松王突立ち、「申し付けた用意の乘物、早く〳〵。」と呼ばはるにぞ、「はつ。」と答へて家來共、御目通に舁き据うる。「はや御出。」と戸を開けば、菅丞相の御臺所、「なう母様か。」「我が子か。」と、御親子不思議の御對面。源藏夫婦横手を打ち、「方々(はうぐ)と御行方尋ねしに、何處にか御座なされし。」「されば〳〵、北嵯峨の御隱家、時平の家來が聞き出し、召捕に向ふと聞き、某山伏の姿となり、危い處を奪ひ取つたり。急ぎ河内の

六道
地獄・餓鬼・畜生、修羅・人間・天上の六道。

能化
師となつて他を教化するもの、所化に對する語、六道能化の菩薩とは地藏菩薩をさす。

賽の河原
冥途の三途の川のほとり、小兒が小石で塔を造らうとすると大鬼が來ては崩してしまふ、それを地藏菩薩が現れて救ふといふ。

死出の山
冥途の閻魔王國の境にあるといふ山。

鳥邊野
京都市東山區にある墓地、鳥邊山ともいふ。

國へ御供なされ、姫君にも御對面、こりや〳〵 女房、小太郎が死骸あの乘物へ移し入れ、野邊の送り營まむ。」「あい。」と返事の其の中に、戸浪が心得抱いてくる、死骸を網代の乘物へ、乘せて夫婦が上着を取れば、あはれや內より覺悟の用意、下に白無垢・麻裃、心を察して源藏夫婦、「野邊の送に親の身で、子を送る法はなし。我々夫婦が代らむ。」と、立寄れば松王丸、「いや〳〵、是は我が子にあらず。菅秀才の亡骸を御供申す。いづれもは、門火々々。」と、門火を賴み賴まるる。御臺若君諸共に、しやくり上げたる御涙、冥途の旅へ寺入の、師匠は彌陀佛・釋迦牟尼佛、六道能化の弟子になり、賽の河原で砂手本、いろは書く子のあへなくも、ちりぬる命是非もなや。あすの夜誰か添乳せむ。らむ憂い目見る親心、劒と死出の山けこえ、あさき夢見し心地して、跡は門火にゑひもせず、京は故郷と立別れ、鳥邊野さして連れ歸る。

（菅原傳授手習鑑）

荻原井泉水
名は藤吉、東京市の人、明治十七年生、俳人。

東福寺
京都市東山區、臨濟宗、藤原道家寛元元年（一九〇三）創建、辨圓開基。

嵯峨
京都市左京區。

山崎
京都府乙訓郡、大阪府と接する。

深草
京都市伏見區。

一九 竹・石・雨

荻原井泉水

竹といふと、月並な文人畫を聯想させるやうに、惡く獨りよがりな植物とのみ思つてゐたが、それは私の見方が足りないのであつた。東京の市內に居ては、新年の門飾とか七夕祭とかいふ他には竹を眺める事は稀だし、旅行をしても、大きな竹藪があるなと見て過ぎる位では、本當の竹の姿は解らない。私が京都に來て、東山の麓、東福寺の境內に住むやうになつて以來、しみ〴〵と竹林を眺め、竹林に親しんでみると、其の愛すべき形態や、其の寂しい品趣がしつくりと味ははれるのである。

京都は竹林の多い所である。殊に嵯峨や山崎のあたり、東山から深草の邊まで、昔のまゝの竹林が到る所に殘つてゐる。東

開山　辨圓圓爾、駿河國（静岡縣）の人、正和（一九七二）の初、諡を聖一國師と賜ふ、弘安三年（一九四〇）寂、年七十九。

塔頭

元政　高僧、深草に瑞光寺を創建す、寛文八年（一三三八）寂、年四十六。

福寺の境内十萬坪の七八分は、いまだに竹林として、筍の生産僅に二三千圓を得るだけに棄ててある。此の寺の開山が初めて爰に禪堂を創つた頃は勿論、其の後、漸次に塔頭の院が作られて行く時も、竹林を切つては地を墾くといふ風だつたのであらう。で、私の居る院の背面にも、隣の院との境にも、その竹林が自然の厚い、高い垣をなしてゐるのである。かういふ所では、家の中に住むといふよりも、竹林の中に住むといふ感じの方が強い。竹林の中に、ずつぽりと住みついてゐてこそ、竹といふものの親しさ美しさが初めて解つて來るのである。

屋前竹葉垂レ、屋後竹葉隔リ、
屋上竹葉覆ヒ、中有リ愛スルヲ竹客。

是は深草の元政の作だが、彼が手づから竹藪を墾し、弟子達を督して作つたといふ、其の竹葉庵の窓に、彼が靜かに凭れてゐる姿も想像される。而して彼が竹を愛し、竹を友とし、竹を詠ひ、竹を寫して樂しんでゐた其の氣持も、今は私に解る氣がするのである。

竹といふものは極めて自然の感じがする。生えて伸びたままである。松や楓のやうに枝を切られたり、葉を摘まれたりしないが、疎密は常に宜しきを得てゐる。春は葉の散る頃、夏は若竹のそよぐ頃も好いが、秋から冬に、立木の青い色が枯れかけた中に、竹の青い幹と葉とが、すい〳〵と、又ふさ〳〵と立ち連つてゐる姿はなつかしい、藪として見ると、もんもりと深い感じでありながら、夕陽がさつと射しこむ時は、其の一本々々が透明であるかのやうに奥まで光を入れて、かさ〳〵と餌をあさる雞の姿などをのぞき込ませる。

竹といふものは實に靜寂そのもののやうである。風が木の

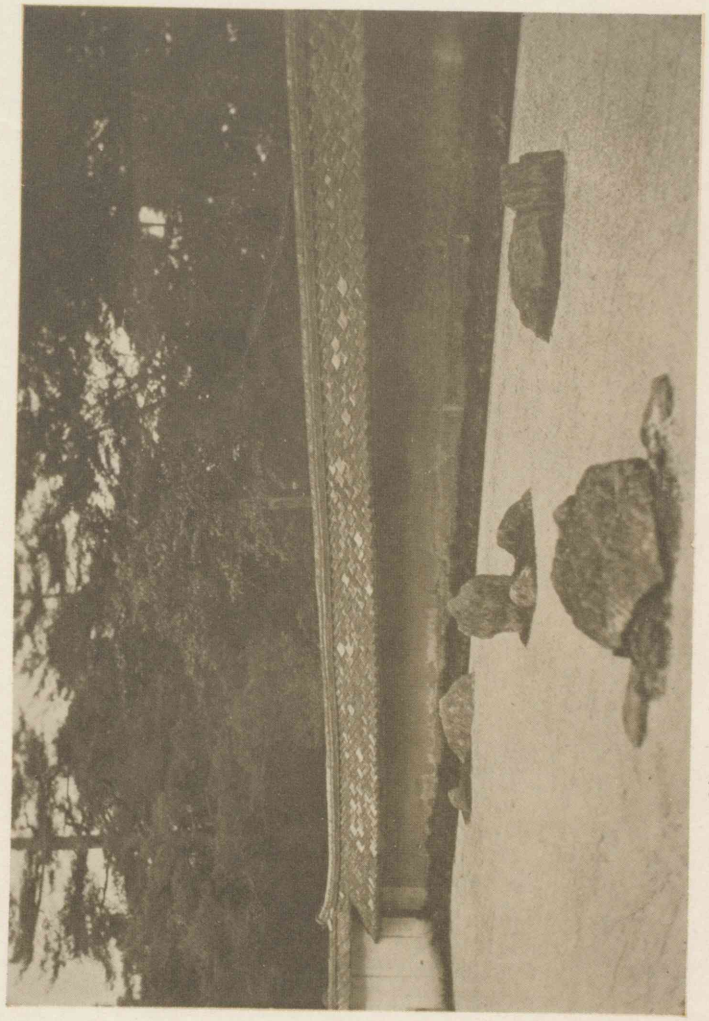
竹　（東福寺境内）

枝を吹き鳴らす時でも竹はわつさりとして落著いてゐる。藪からすこし離れてすんなりと立つてゐる竹を見ると、憂鬱の人といふ感じがする。それは常に何かを思索してゐるやうで、己の姿を己が凝視しようとしてゐるやうである。さうした一本の竹が、微しの風もないのに、ふつと其の穂を動かして、ゆさりとうなづく事がある。月が青白く空氣をよどまして、ふしぎな影が忍び寄つて來るやうな夜などは、その細い幹から、細い枝から、葉からが地の精の神經のやうにさへ見える。かういふ風に竹の精神を握つて描いた古の名畫も少くはない。

石

石といふものに生命のある筈はないが、石といふもの程眺めて倦きないものはない。私の居る院の庭は、是といふ結構も施してなく、一面廣やかに苔を植ゑ、遠くに杉の三四本が高く聳え、

結構



（龍安寺の庭）　石

山茶花

近くの方に松・檜を數本、低く土塀に沿うて列べ、つゝじ・山茶花などがあるだけで、からりとした中に、何氣なく、四角な自然石が一つ置いてある。さして大きくはなく、又、格別面白い形でもなく、たゞ其處に腰をかけて見たくなる位のものだが、朝夕に見るともなく、此の庭を見てゐると、必ず其の石に目がとまる。日毎月毎少しの變化もない其の石が、ふしぎにも心を牽くものになつて來る。暖かい日がほか〳〵と其の石の膚にあたつてゐる時は、それを眺めてゐる自分の身體も、ぬく〳〵と溫かいやうに感じ、時雨がほろ〳〵と其の石の面をぬらしてゐる時は、自分も何か淋しいやうなしめやかな氣持に誘はれる。松の葉が細かく此の石の上に散り敷く時は、此の石があつてよいと思ふ。雀が二三羽下りて來て遊んで居る時も、此の石があつてよいと思ふ。兎に角、石といふものは眺めてゐる程、親しみを感じて來る。

利休
千宗易、茶人、天正十九年(三五)歿、年七十一。

相阿彌
名は眞相、足利義政に仕へた、造庭・書・畫・詩・歌・香・茶に通ず。

龍安寺
京都市右京區花園にある、臨濟宗、その庭を虎の子渡の庭といふ、相阿彌の作と傳へられる。

本法寺
京都堀川通の北端にある、日蓮宗。

光悅
本阿彌光悅、畫家、書家、刀劍鑑定家、傍ら諸藝に通じた、寛永十四年(三九七)歿、年八十一。

京都の名園と言はれるものに利休や相阿彌の作と傳へるものも少くないが、いづれも石といふものを實に好く生かしてある。龍安寺の庭は樹木を用ひずして、數個の石を置き並べただけで作つてある。本法寺の庭は芝生の中に石を深く疊み込んだ趣向で、光悅が作る所と傳へられてゐる。櫻の花とか紅葉とか季節的に發するものは、餘りにあわたゞしくて且果敢ない。石は春夏秋冬にかゝはらずして、常在不易の光と力とを持つてゐる。石には大きな潛勢力がある、それを支へるものを取去れば、非常な力を以て墜落して觸れるものを打碎かずには居ない。で、石はそれを置くべき所に据ゑる事がむづかしい、たゞ土の上に置けば泰然としてゐるやうなものの、其の形、大きさに依つて、又、周圍の樹木や流水の調子に依つて、其の場所、其の位置の宜しきを得せしめなければ、何となく落著かない、卽ち「動く」といふ感

じがあつて惡いのである。しかして眞に其の置くべき所を得せしめた石には安けさがあり、靜けさがあり、品位がある。相阿彌や光悅が、一つの石に托して、自分の魂の安けさ、靜けさ、高貴さを現し、それを一つの藝術として、千古に傳へようとした所以もそこにあるのだと思ふ。

雨

雨の美しさ、雨の趣――それも私は京都に來てから本當に味はひ得た樣に思ふ。春の雨の降るといふよりも、靜かに濡らす、地上を潤すといふ感じも好い、風がすくない所なので、雨はしとしとと滴る樣に落ちる。鴨川べりの柳・長い橋・古風な家構などがみな、雨を得て繪畫的に生きる。夏の雨の打灌ぎ、烟らし、地の底まで浸すといふ感じも好い、若葉の綠も其の雨を得ていよいよ濃くなる、青い繪の具が流れさうに見える。竹林からは其の

紙本水墨

上梓

猿蓑集

去來・凡兆の撰、蕉門の連句を集めたもの。

蕪村

本名は谷口寅、與謝氏ともいふ、俳人、畫家、天明三年（一七八三）歿。

雨に依つて筍がだん〳〵と伸びる、墨の垂れるやうな雨空の下に道が薄白くあつて、竹林のにじんだやうな綠の前をもつとりとした牛が濡れて牽かれて來る、全く紙本水墨の境地である。

秋の終から冬の初に降る時雨の味は又面白い。古人は時雨をほろ〳〵降ると言つてゐるが、それは全くほろ〳〵と輕い物がこぼれ落ちるやうな感じなのである。殊に竹の葉に觸れると輕く鳴る、其の音を聞いて、おゝ時雨が來たのであるかと耳を立てる間もなく歇んで、しばらく經つと再びほろ〳〵と其の音がする。昔の俳人は非常に此の時雨を賞でたもので、芭蕉一門の選集として京都から上梓した猿蓑集には其の卷頭に時雨の句をならべてあり、京都に住んでゐた蕪村にも時雨の句はなかなか多い。

鶯の竹に來そめて時雨れけり　蕪村

歲時記

俳諧に用ひられる季題を輯錄した書。

其角

姓は榎本、寶井氏ともいふ、俳人、寶永四年（一七〇七）歿、年四十七。

知恩院

京都市東山區、華頂山の西麓、三條四條の中間にあたる、淨土宗。

清水寺

京都市東山區。

大佛

方廣寺、京都市東山區。

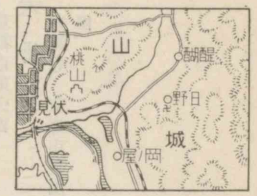
夏の鶯を老鶯と言ひ、冬の鶯を笹子と歲時記にはあるが、實際は冬の初に、やはり老いた鶯が鳴くものだといふ事も、迂濶ながら、此の頃私は知つたのである。

あれ聞けと時雨くる夜の鐘の聲　其角

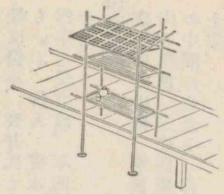
京都は寺が多いだけあつて鐘の聲も到る處で聞かれる。知恩院の鐘・清水寺の鐘・大佛の鐘・東福寺の鐘、それ〴〵に其の音色が違ふのである。

氣象學者の話によると、時雨といふものは小さく凝集した雨雲が、ほつと溶けて消えたり又出來たりする時々に起る現象で、氣流の關係から或一局所に起る、それは四圍に山があつて盆地をなした所で、水蒸氣の多い、且冷え易い所に限るものだといふ。其の點で、京都は時雨の名所とするに足りる、ほんたうの時雨の味は京都の樣な所でなければ解らぬといつてもよい。（山川行住）

日野山



閼伽棚



普賢
文殊と共に釋迦佛に侍してその教を輔ける菩薩。

不動
不動明王、又は不動尊といふ、五大明王の一、其の中央に居る、大日如來の化身。

往生要集
六卷、比叡山横川の楞厳院惠心僧都の作。

正木の葛

觀念の便
空蟬
禁戒
跡の白波
世の中を何にたとへむ朝ぼらけ、漕ぎ行く船のあとの白波。沙彌滿誓。（拾遺集）

岡の屋
山城國（京都府）宇治郡宇治村大字五箇莊の宇治川に臨める所。（前頁地圖參照）

滿沙彌
滿誓沙彌、元正帝の靈龜・養老頃（一三七五—一三八三）の人。

二〇 日野山の閑居

今、日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさし出して、竹の簀の子を敷き、其の西に閼伽棚を造り、中には西の垣にそへて阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日を受けて眉間の光とす。かの帳の扉に普賢並びに不動の像を懸けたり。北の障子の上に小さき棚を構へて、黑き皮籠三四合を置く。すなはち和歌・管絃・往生要集の如き抄物を入れたり。傍に箏・琵琶各一張を立つ。いはゆる折箏・つぎ琵琶これなり。東にそへて蕨のほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけてこゝに文机をいだせり。枕の方に炭櫃あり。之を柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地をしめ、あばらなる姫垣を圍ひて園とす。卽ちもろ〳〵の藥草を植ゑたり。假の庵の有樣かくの如し。

其の處のさまをいはば、南に筧あり、岩を疊みて水をためたり。林軒近ければ爪木を拾ふにともしからず。名を外山と云ふ。正木の葛跡をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念の便なきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲の如くにして西方に匂ふ。夏は時鳥を聞く。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋は蜩の聲耳に充てり、空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。積もり消ゆるさま罪障に譬へつべし。

もし念佛ものうく讀經まめならざる時は、自ら休み、自ら怠るに、妨ぐる人もなく、又恥づべき友もなし。ことさらに無言をせざれども、獨り居れば口業を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなけれども、境界なければ、何につけてか破らむ。もし跡の白波に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、滿沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風、葉をならす夕には、潯陽の江をおも

桂の風云々
潯陽江頭夜客ヲ送ル楓葉荻花秋瑟々。白樂天。（琵琶行）
潯陽江
支那江西省九江府德化縣に在る。
源都督
桂大納言源經信、琵琶の名手、永德元年（一七五七）歿、年八十二
秋風の樂
盤涉調の曲名。
流泉の曲
琵琶の祕曲の一。

みさご

ひやりて、源都督のながれをならふ。もしあまりの興あれば、しばしば松の響に秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悅ばしめむとにもあらず。獨り調べ、獨り詠じて、自ら心を養ふばかりなり。

大かた此のところに住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今までに五とせを經たり。かりの庵もやゝふる屋となりて、軒には朽葉ふかく、土居に苔蒸せり。おのづから事のたよりに都を聞けば、此の山に籠りゐて後、やむごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。まして其の數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。たび〳〵の炎上に滅びたる家、またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみ、のどけくして恐なし。程せばしといへども、夜臥す床あり、晝居る座あり。一身を宿すに不足なし。がうなは小さき貝を好む、これよく身を知るによりてなり。みさご

（知れ—れば
知れ—らば）
親昵
絲竹

は荒磯にゐる、すなはち人を恐るるが故なり。われ亦かくの如し。身を知り世を知れれば、願はず、まじらはず、たゞ靜かなるを望とし、愁なきをたのしみとす。すべて世の人の住家を造る習、必ずしも身の爲にはせず。朋友の爲に造る。或は主君・師匠及び財寶・馬牛の爲にさへ之を造る。われ今身の爲に結べり、人の爲に造らず。故いかんとなれば、今の世の習、此の身のありさま、伴ふべき人もなく、賴むべき奴もなし。たとひ廣く造れりとも、誰をか宿し、誰をか据ゑむ。それ人の友たるものは、富めるを貴み、懇なるを先とす。必ずしも情あると直なるとをば愛せず。只絲竹・花月を友とせむにはしかず。人の奴たる者は賞罰の甚しきを顧み、恩の厚きを重くす。更にはごくみあはれぶといへども、やすくしづかなるをば願はず。たゞ我が身を奴とするに如かず。もし爲すべきこと

あればすなはちおのづから身をつかふ。たゆからずしもあらねど、人を從へ人を顧みるよりは安し。もしありくべきことあれば、みづから歩む。苦しといへども、馬・鞍・牛車と心をなやますには似ず。今一身を分ちてふたつの用をなす。手の奴、足の乘物、よく我が心に適へり。心また身のくるしみを知れれば、くるしむ時は休めつ、まめなる時はつかふ。つかふとてもたびたびすぐさず。ものうしとても心をうごかすことなし。いかに況や常にありき常に動くは、これ養生なるべし。何ぞいたづらにやすみ居らむ。人を苦しめ人を惱ますはまた罪業なり。いかが他の力をかるべき。

衣食住のたぐひまた同じ。藤の衣・麻の衾、得るに隨ひて肌をかくし、野邊のつばな・峰の木の實、わづかに命をつなぐばかりなり。人にまじはらざれば、姿を恥づる悔もなし。糧乏しければ、

たくらぶ

七珍

方丈記

鴨長明の隨筆集。鴨長明―鎌倉時代の文學者、建保四年（一八七六）歿、年六十二。

おろそかなれども猶味を甘くす。すべてかやうのこと、樂しく富める人に對していふにはあらず。たゞ我が身一つにとりて、昔と今とをたくらぶるばかりなり。それ三界は唯心一つなり。心もし安からずば、牛馬・七珍も由なく、宮殿・樓閣も望なし。今寂しきすまひ、一間の庵、みづからこれを愛す。おのづから都に出でては、乞食となることを恥づといへども、歸りてこゝに居る時は、他の俗塵に著することをあはれぶ。もし人このいへる事を疑はば、魚と鳥とのありさまを見よ。魚は水に飽かず。魚にあらざれば其の心を知らず。鳥は林をねがふ。鳥にあらざれば其の心を知らず。閑居の氣味も亦かくの如し。住まずして誰かさとらむ。

（方丈記）

草引き結ぶ

よかむなり

こたびこそは（參らめ）

二　雅文抄

一　驛

治まれる世は、驛路のゆきかひも賑ははしく、人宿す家はた建てつゞけて、草引結ぶ思もなきものから、さすがにうちとけてしも寢られぬは、旅路の習なるべし。曉の鐘はいづこもおなじ響にて、いととく立出づる旅籠馬のこゑ〳〵、枕上に聞えてこゝちよげなるに、「今日は天氣もよかむなり。何がしの浦の眺いかにをかしからまし。かしこの御社にもこたびこそは。」などいひつゝ、さゝやく音のほのかに聞ゆるは、あなたに寢たる旅人なるべし。家なる人々も起き出でて、朝食のことなどとかくまかなひありく程、やう〳〵物さわがしくなりて、物擔ひゆく男どもの俚謠うたふなど、忙はしげに聞ゆ。とばかりありて、門のもとに引寄せつゝ、「馬まゐりて候。」といふは、吾が乘るべきにやと思ふもいとをかし。

概園文集

三卷、中島廣足の隨筆集。中島廣足―肥後國（熊本縣）の人、國學者、元治元年（一八六四）歿、年七十三。

村田の春鄕

村田春道の子、江戸（東京市）の人、眞淵の門人、明和五年（一七六八）歿、年三十。

云はまくも
斯くぞあるべきと
いへり
斯くあるべしとぞ
いへる
はや

二　富士を觀て

己、眞淵、先に富士の嶺を見放けて思へらく、遠つ神、吾が大君の御國の有樣はたゞ斯くのごとしと。今年、村田の春鄕が此の嶽に向ひて云へらく、「云はまくも畏き大御前の、白き御衣奉りて、高御座におはしますらむは、斯くぞあるべき。」と、云へり。此の言らを相うべなひ、相喜びて更に稱へ言をせり。抑、これの富士の高嶺はや、久方の天つ日を冠と著、明星を鬘に垂らし、白雪を衣とし、青雲を裳とし、二つの國を鞍に敷き、百の峰を臣と率ゐ、八十國原の草木を大寶とし、海の千島をまつろへる諸國と見放け、天地

茜さす

なだりになだる

民草

天と長く

地と平かに

賀茂眞淵集　五卷歌集雜文紀行等を集む。賀茂眞淵―岡部氏、遠江國（靜岡縣）濱松の人、德川時代の國學者、明和六年、（一七六九）歿、年七十三。

の分きの始より、寄り合ひの極み、動かず盡きず、茜さす日出づる國に立ちて、日の入る國まで聞え繼ぎ、日の經、日の緯、影面、背面の貌等しくして、曲れる所無く、微に隱るる隈無く、ひたなだりになだり、裳裾廣に廣ごり在せる大神になもある。

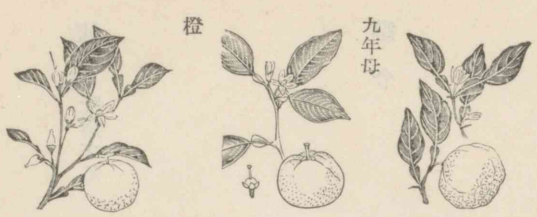
しかれこそすめらがみことの、安らけき稜威政を本として、狹く敎を立て給はずし有れば、民草も心にか黑き隱れを置かず、殊に裏表を云はず、天と長く、地と平かにしりませる有樣を、見足らはし、思ひ足らはす事は、これの神高嶺の御面になもありける。

（賀茂眞淵集）

三　古よりも後の世の勝れること

古よりも後の世の勝れること、萬の物にも事にも多し。その一つをいはむに、古は橘をならびなき物にしてめでつるを、近き世は蜜柑といふ物ありて、この蜜柑に比ぶれば、橘は數にもあらずけおされたり。その外、柑子・柚・九年母・橙などの類多き中に、蜜柑ぞ味殊にすぐれて、中にも橘によく似て、こよなく勝れる物なり。この一つにておしはかるべし。或は古にはなくて今はある物も多く、古はわろくて今のはよき類多し。これをもて思へば、今より後も亦いかにあらむ、今に勝れる物多く出で來べし。今の心にて思へば、古は萬に事足らず、あかぬこと多かりけむ。されどその世にはさは覺えずやありけむ。今より後また、物の多くよきが出で來む世には、今をもしか思ふべけれど、今の人事足らずとは覺えぬが如し。

（玉勝間）



玉勝間　十五卷、本居宣長の隨筆。本居宣長―號は鈴の屋、伊勢國（三重縣）の人、國學者、享和元年（一八〇一）歿、年七十二。

岩城準太郎
富山縣の人、明治十一年生、國文學者、奈良女子高等師範學校教授。

肺肝を吐露する

辭令

古典

典籍

三　國學者の業績

岩城準太郎

「獨り燈火の下に書をひろげて、見ぬ世の人を友とするこそ、こよなう慰むものなれ。」とは、徒然草の名文句であるが、人間と人間とが、相互に肺肝を吐露して眞實に諒解するのは、言語・文章の媒介によるのである。まだ見ぬ世界の人と魂相通ずるを得るのは、卽ちふみのおかげである。

國と國と相知り、國民と國民とが相理解するのは、外交と貿易とによるばかりではない。相互に他の文章を讀むことによる。矯飾と辭令とを剝ぎ去つた赤裸の國民は、その創作するところの文學に最もよく活躍するからである。

一國の國民がその祖先と相面接する思をするのは、過去の國民の書き遺した文學を讀む時である。父祖の遺文に接する時のなつかしさはいふまでもない。江戸時代の國民、鎌倉・室町時代の國民、平安時代の國民、更に溯つて上古・太古の國民の、その時代時代に創作した文學を繙く時こそ、本當に我が血脈の生々相繫がる宿緣を直感するのである。

古代國民の面影を髣髴しようとするには、直接古代國民の創作したものに當らねばならぬ。その思想を知り、その感情を解し、その生活に直面しようとするには、一意その遺文・遺作を味讀するに限る。我が國民の固有せる生活の眞相を、生き〳〵と今日の我等に見せてくれるのは、卽ち古典である、古文學である。

歲月の久しきに隨つて遺文・遺作が亡びる。時代の古きに隨つて文筆の人が數少い。歷史あつて以來三千年、上世に溯れば溯るほど、典籍が稀になるのである。此の稀に存する古文學こそ、本當に貴重な古代の鏡である。祖先の面影を窺ふべき大切

風雨千歳の淘汰

なフイルムである。これを書き遺した上世の文學者は、數多いその代の國民から、特に選び上げられた極めて少數の代辯者であつて、風雨千歳の淘汰を經て、今日に傳はつた古典は、眞に天佑によつて生命を全うした稀代の珍寶である。

かう見てくると、古典の研究は、たゞに古物いぢりのものずきでないのみならず、學問のための學問と言ふやうなのんきなものでもない。必要だの不必要だのといふ理窟の問題でもない。實に、我等の衷心の要求からやむにやまれぬ感情の問題である。如上の意味において、自分は古典に對してかぎりない愛敬を捧げ、探究の念を起すのである。此の點に著目し、此の如き見解から、古典の研究を開始したものは、卽ち我が國學者であつて、これらの人々の忠實熱心な研究によつて、從來暗がりの中に放置せられてゐた古典が、漸次に究明せられ、我がなつかしい同胞國民

啓蒙的研鑽

の面影を、まのあたり見るが如く感ずることが出來るやうになつた。今までは折角あの貴重な古典を有つてゐながら、言語解釋の困難であるがために、祖先の心胸に觸れることが出來なかつたが、これら學者は、先づ言語を討究し、傳說を說明し、歌謠を解釋し、史籍物語等古典の全部に亙つて啓蒙的研鑽に力めたので、我等後生がどの位その餘澤に浴してゐるか計られない。我等は國學者の開いてくれた道に立つて、遠い祖先への面接に急ぐ時、しみ〴〵有難さを感じて、その功業を讚美しないではゐられない。

二三　松陰と國體論

德富蘇峰

公人として彼の主張は、國體を顯揚するにありき。國民をして、我が世界無比の國體を自覺せしむるは、第一著なり。此の自覺心を事業に施し、國威を海外に輝かし、國勢を四表に張るは、第二著なり。此れが爲に、個人の禍福・利益を度外視して、君國に盡くす、これ第三著なり。而して之を一串するに、皇室中心主義を以てす。

若し近世的名詞を以て約言すれば、第一は國民的自覺なり。第二は帝國主義なり。第三は獻身的精神なり。舊き眞理は、新しき名號を帶びて、世界の活題目となりつゝあり。而して松陰は、五十年前に於て、既に其の豫言者にてありき。

松陰曰く、國體と云ふは、神州は神州の體あり。異國は異國の

德富蘇峰
名は猪一郎、熊本縣の人、文久三年（一八六三）生、評論家、歴史家。

彼
吉田松陰を指す。吉田松陰―名は矩方、通稱は寅次郎、長州（山口縣）萩の藩士、安政五年（一八五八）歿、年二十九。

祖述

體あり。異國の書を讀めば、兎角異國の事のみを善と思ひ、我が國をば却つて賤みて、異國を羨む樣に成行くこと、學者の通患にて、是れ神州の體は、異國の體と異なる譯を知らぬ故なり。

吉田松陰

彼は確に國家に國性あるを知れり。彼は國家に獨自一己なるものあるを知れり。而してこれを自覺するを以て、國民たるの第一義となせり。彼は此の點に於て素行を祖述したりと雖も、決して素行の蓄音機にあらざりき。彼は其の啓發の端緒を、素行に得たるも、其の之を自得するに到りたるは、ひとへに彼の見識に由らずんばあらず。彼其の坐獄

祈年祭
峻國
天押日命 大伴氏の祖神、天孫降臨の時弓箭を持して天降る。

日錄に於て語りて曰く、吾幼にして、漢籍にのみ浸りて、尊き皇國の事には、甚だ疎ければ、事々に恥ぢ思ふ事も多けれど、試に思ふ所と、見聞する所とを擧げて、自ら省み、且は同志の人々へも示すなり。抑、皇統綿々千萬世に傳はりて、變易なきこと偶然に非ずして、卽ち皇道の基本、亦爰にあるなり。蓋し天照大神の神器を、天孫瓊々杵尊に傳へ給へるや。寶祚之隆與天壤無窮の御誓あり。されば漢土・天竺の臣道は、吾知らず。皇國に於ては、寶祚素より無窮なれば、臣道も亦無窮なること、深く思を留む可し。更に又祈年祭の祝詞に謂へる、「狹國は廣く、峻國は平けく、島の八十島、おつる事無く。」また「遠國は、八十綱打掛てひき寄することの如く。」などいふこと、徒に考ふべからず。臣道いかにぞと問はば、天押日命のことだてに「海行かば水つく屍、山行かば草むす屍大君のへにこそ死なめ、のとには死なじ」是なん臣道ならん。

喝破
駸々然

是に由りて之を觀れば、彼が國體論も、帝國主義も、武士道も、自ら一串の主義より出て來りたること疑ふ可からず。其の主義とは何ぞや皇室中心主義これなり。

松陰は君臣の義に就いては、孔孟の行動に對して、大不滿なりき。彼は講孟劄記(安政二年六月)に於て、喝破して曰く、

「經書を讀むの第一義は、聖賢に阿らぬこと要なり。孔孟生國を離れて、他國に事へ給ふこと濟まぬことなり。我が邦は上天朝より下列藩に至るまで、千萬世に襲して絕えざること、中々漢土などの比す可きに非ず。故に漢土の臣は、譬へば半季渡りの奴婢の如し。其の主の善惡を擇んで轉移すること、固より其の所なり。聞く、近世海外の諸蠻、各其の賢智を推擧し、其の政治を革新し、駸々然として、上國を凌侮するの勢あり。我何を以てか是を制せむ。他なし、前に論ずる所の我が國體の

闔國

考證

外國と異なる所以の大義を明らかにし、闔國の人は、闔國の爲に死し、闔藩の人は、闔藩の爲に死し、臣は君の爲に死し、子は父の爲に死する志確乎たらば、何ぞ諸蠻を畏れんや。願はくば諸君と茲に從事せむ。」と。

彼は實に此の國體論を提げて、天下の人心を警醒し、天下の民情を統一し、以て外國に當らんと欲したり。故に彼の國體論は、古典學者の考證論にあらずして、當今の國民をして、三百年來長夜の眠を破り、新奇の時態に應酬せしめんとする、血あり、生命あり、活力あるの政綱なりき。

（吉田松陰）

恪勤

鞏固

中正を逸す

二四　非常時に於ける我等の覺悟

我が帝國は今や正に非常の時艱に直面してゐる。三千年の光輝ある歷史を有する我が帝國を、一層善美なる國家として後世に傳ふべき任に在る我等現代の國民は、此の非常時に際し各自一層精勵恪勤奉公の誠を竭すと共に、國を擧げて團結を固くし、以て難局打開に當らねばならぬ。而して之が爲には先づ國民的信念を鞏固にし、同時に時局の眞相を明らかにしなければならぬ。

然らば非常時局とは何であるか。非常時とは其の言葉は極めて簡單であるが、諸々の國家的難事の累積に對し期せずして發せられた國民的叫びであつて、其の內容は勿論多種多樣である。就中最も重大なるものとして、內には中正を逸したる過激

思想の傳播、公私の經濟の窮迫があり、之に加へて外には外交上の困難を招來してゐる。而して是等より派生する諸々の問題は集積して非常時の內容を構成し、その打開と解消の責は懸つて我等の双肩にある。

歐洲大戰後、世界的に急激深刻になつた思想上の不安動搖は我が國にも波及し、遂に偏頗なる唯物思想、殊に我が國體を無視せる矯激なる共產主義思想の如きが、漸次各地方に瀰漫するに至つた。實に現下非常時の重大要素の一は、かゝる誤れる思想の浸潤による國民思想の動搖不安である。

抑、我が帝國は、建國以來萬邦に比類なき國體の下に、三千年の歷史を重ね、燦然たる光輝を中外に宣揚し來つた。我が帝國は、建國以來君民同祖の一大家族國であつて、國民は悉く其の血液を一にせりと言ふ誇の下に、互に心を一にし、此の大同團結の中

歐洲大戰　西暦一九一四年（大正三年）から一九一九年（大正八年）に亙る。

瀰漫

心には、大宗家たる皇室を戴き、國は卽ち家であるといふ不動の信念に生きて來たものである。從つて君は民を慈み給ふこと子の如く、民は君を大御親と仰ぎ奉り、然も萬民互に兄弟の情誼を以て團結し、かくしてあらゆる時代を通じて、常に皇國の爲に奉公の誠を捧げて、近代の隆昌を見るに至つたのである。

我が國體は、建國の當初に於て確立し、爾來三千年、愈〻光輝を發して來た。これ實に我が國民の國體に對する不動の信念の一貫せるがためである。而して國民が此の信念に依つて堅く團結し、本然の國民性に醒めて邁進せる時、常に國難は打開せられ國運は伸張せられた。これ國史の示す所である。されば帝國の國民たるものは、須く悠久三千年の歷史に顧みて建國の大精神に覺め、協心戮力、萬邦無比の國體をして愈〻其の光輝を發揚せしめることを念としなければならぬ。

協心戮力

経濟機構
惹起

困憊

思想的に非常時にある我が國は、同時に經濟的にも非常時に直面してゐる。世界的の經濟難が歐洲大戰の結果であることはいふまでもないが、我が國現時の經濟難も其の原因を求むれば、等しく歐洲大戰當時に溯らねばならぬ。歐洲大戰に依りて我が國は一時多額の富を獲得し、之が爲に國民生活は放漫に流れ、浮華輕佻の弊風を生ずるに至つたのであるが、戰後世界的不況の我が國を襲ふや、經濟機構の大變調を來し、好景氣時代の反動により隨所に大波瀾を惹起して、國民の經濟生活は益〻不安の度を高め、昭和六年再び金の輸出を禁止せざるを得ない程の難境に立至つたのである。

而も此の間にあつて農村の疲弊は年と共に著しく、中小商工業者の困憊亦甚しく、實に憂慮に堪へざる情勢を生ずるに至つた。今や公債は增加に增加を重ねて八十億に垂んとし、加ふる

冗費

に國費は一箇年二十二億を突破せざるを得ない必要に迫られてゐる。されば實に此の窮迫せる經濟事情は、現下非常時の一大要素であると言はねばならぬ。而して之が打開の爲には、全國民の奮勵を要すること固よりであつて、一般國民に自力更生の熱烈なる意氣無くんば、到底其の成功を期する事は出來ない。即ち國民各自が其の分に勵みて渾身の力を盡くし、我が力能く家を興し村を興すの氣概あつて、始めて更生の曙光を見ることが出來るのである。しかも此の事たる決して容易の業ではない。克く其の目的を達成せんが爲には、堅忍持久の精神を以てし、早急に成功を夢みて無謀なる計畫に著手し、果ては事成らずして自暴自棄に陷るが如きは、嚴に之を警めねばならぬ。退いては消費經濟の改善を圖つて冗費を省き、進んでは協力一致、以て生產の合理的增加に最善の計畫を樹つべきである。

かくの如く思想問題・經濟問題に因り、內に難事の重積せるに際し、外には又國際聯盟脫退による外交上の困難あり、新興滿洲國の發展を援助して東洋の平和を確保する重任あり。內外多事、非常時日本國民の責務、實に重且大なりと言はねばならぬ。今、我等の眼前に其の解決を待つてゐる非常時局の打開は、固より容易の業ではない。併しながら、由來我が國民は如何なる艱難に遭遇するも、決して之に屈することはなかつた。遠くは元寇の役、近くは明治維新の難局、將又日淸・日露の役の如き、屢〻國難に直面して常に之を克服して來たのである。

我等は今や正に非常時局に直面してゐる。併しながら其の身には祖先の血が流れ、其の心には祖先の精神が宿つてゐる。偉大なる業績を歷史に印せる我等の祖先は、又偉大なる民族的素質を我等に傳へてゐる。我等は今や此の貴き素質を發揮すべき時機に際會したのである。我等の努力の前には、如何なる難局と雖も克服せられずんば止まないであらう。

（非常時と國民の覺悟）

附錄

近世文學

編者

元和偃武を以て時代は近世に入る。約三百年の間、四民太平を謳歌して、藝術の花は所在に妍を競ふ。從來貴族・武士・僧侶等の手にのみあつた文學は、この時代になつて廣く民衆に開放せられ、注目すべき作家の多くはこゝに輩出した。傳統の桎梏に苦しめられることのない民衆の間にのみ眞に自由な世界があつた。こゝにすぐれた文學の生まれたのは當然である。

佛教はたゞ形式的信仰を當代の人々の間に繫ぐに止まり、それに代つたものは儒教であつた。この時代に社會を形成した二大要素は武士と町人とである。武士の道德律たる武士道は、

當代の初に大成したが、忠孝節義を尙んだのは、その長所であり、虛名に縛られ、形式に墮ちようとするのは、その短所である。それに對し町人道があつて、それを鼓吹したのが心學であつたが、いづれもその基調を儒教思想に置くのである。かく儒教偏重の時代は文學にも影響するところが多く、直接世道人心に益のないものは、やがて無用の文學とせられ、それをものする者は戲作者といはれた。しかも作者もそれを首肯するが故に、努めて作品に功利的色彩を附けようとするに腐心しつゝ、構想の不自然さをも顧みなかつた。

今、近世の文學を通覽するに、その初期にあつては、草創の江戸はなほ文化的に惠まれず、文學の中心は京阪にあつた。それが所謂元祿時代である。新興の江戸に文運の昌んになる迄には、開府後百年の歲月を要したのである。文化・文政の大御所樣時

代は正に江戸文化の爛熟期で、かの元祿時代と對比せらるべき近世文學第二の黃金時代を現出したが、天保以後また振はず、振はぬまゝに近代に入るのである。

家康は治世の要諦は、まづ學を授けて、人倫を明らかにするにありとして、學者を優遇し、書籍を公刊する等大いに學問振興に努めたが故に、碩學・鴻儒相次いで出で、博士家の舊說を排し、宋儒の新註を用ひ、爲に傳統の殼は破られ、自由討究の途が開かれたが、その流風はやがて延いて國學にも及び、元祿時代に茂睡・契沖等をして舊說打破の新說を出さしむる趨勢を作つたのである。

しかし、この時代のはじめにあつては、戰國の餘弊をうけて文學はまだ頗る幼稚な情態にあつたといはなければならぬ。何れの方面を見ても、傳統に囚はれて生命ない空疎な制作があつたばかりである。歌は細川幽齋によつて戰亂の間にも餘喘を

保つことが出來た。そして彼の學統を受けた智仁親王と松永貞德とによつて一方宮廷に入り、他方民間に出た。貞德は文學を民衆の間に廣めるに與つて力あつた人である。彼はまた俳人として著聞する。連歌の式目に則とつて俳諧の法式を定めようとしたのは彼であつた。俳諧とは俳言で賦した連歌であり、俳言とは俗語又は漢語等で、まだ歌に用ひられない語であるといふ。けれども彼の俳諧は本質的にはまだ連歌から離脫しきれないものであつた。

小說もかなり書かれてゐるが、まだ純然たる文學的作品として許さるべきものは少い。軍記・倫理・宗教・地理等を小說化した所謂假名草紙が行はれたが、支那小說の飜案や伊曾保物語の飜譯なども注意するに足るべく、事實小說・滑稽短話集などにも見るべきものがないでもない。

啓蒙時代に次いで來る元祿時代は、百花燎亂の時代である。大阪に下河邊長流・釋契沖が出て、古典に對する正しい理解と、傳統に對する正しい批評の下に新國學樹立の基礎を置いたが、殆ど時を同じくして江戸の戸田茂睡は堂上歌學に鋭い批判を下した。併し、歌はなほ新時代の文學としては餘りに古典的である。潑剌たる新時代を代表する文學は俳諧であり、浮世草紙であり、淨瑠璃である。

貞德の單調にして幼稚な俳諧に新生面を開かうとしたのが、西山宗因の談林風である。巧に人事に題材を求め、輕妙な滑稽趣味に立脚するところ、一家の風格を備へて、その風一世を風靡したが、その末派に至つて徒に怪奇にして謎語に近い作をなすに至つて、その弊は極まつたのである。かくて宗因の歿後、さしもに盛であつた談林の俳風も日一日と衰へ、これに代つて起つ

たのが松尾芭蕉の蕉風である。芭蕉が談林風から解脫して蕉風の眼を開いてからその死まで十年、旅から旅へと、漂泊の中に、その俳諧は大成したのである。蕉風の極致は風雅にあり、風雅とは外物のために心を役せられることなく、天地自然と同化することである。「さび」・「しをり」・「ほそみ」を說き、「うつり」・「ひゞき」・「にほひ」を說くところに、彼の俳諧のいかなるものであるかがうかがはれる。芭蕉の死後の俳壇は宛然羣雄割據の觀を呈したが、要するに、衰頽の途を辿りつゝあつたものと見て大過ない。

枯淡な蕉風は町人の趣味性には遠かつた。町人文學として當代に行はれたものは、浮世草紙と淨瑠璃とで、そはいづれも經濟的中心地であり、町人が勢力を有する大阪に生まれ且榮えた。浮世草紙は假名草紙の流をひいて、その描くところは、主として町人生活の實相である。その作家としてはまづ指を井原西鶴

に屈しなければならぬ。彼は談林の俳諧から出て、筆をこれに染めたもので、歡樂世界に身を置いて、あるがまゝのその姿を、その美しい表面はいはずもがな、その醜い裏面までをも鋭く觀察し、簡潔にして犀利な筆で表現した。西鶴以後の浮世草紙はひたすらその模倣を事とするのみであつた。中に就いて八文字屋本にはやゝ見るに足るものが無いではないが、西鶴に比べてはすべてこれ月前の螢火に過ぎない。

淨瑠璃の起源は近古時代にあつたらう、それが三味線の伴奏をとり、操人形と握手したのは近世の初である。かくて上方に起つた淨瑠璃が江戸に入り、さらに逆に京阪に齎されたのは寛文の頃であつた。爾來大いに行はれたが、元祿の頃に鬼才竹本義太夫出で、作家に近松門左衞門を得て、斯界の隆盛その極に達したのである。近松が生涯作るところ數十曲の多きに達した

が、義太夫と提携する迄の作はなほ從來の淨瑠璃の型を守り、事件の顚末を略叙するばかりで、脚色單調、文學また平板で、戲曲的技巧に慊焉たるものがあつたが、貞享以後は次第にかうした弊から脱して、渾然たる作を遺すに至つた。彼は作中のいかなる人物にでも溫かい同情をもつて寫してゐる。近松以後の淨瑠璃は、恰も西鶴以後の浮世草紙と同じく、また多くいふに足るものがない。

偃武の後、既に百年を經て江戸の秩序整ふと共に、學藝の中心も漸くこゝに移るに至り、享保の頃、田安侯の聘に應じて荷田在滿東下し、次いで賀茂眞淵之に代るに及び、江戸の國學は日一日と興隆の勢に向つた。眞淵は古道を明らめようとして入つた古典の研究から轉じて古文辭の復活に及び、その詩人的天分は、學者であると共に歌人として重きをなすに至り、門下また俊秀

に乏しくはなかつた。縣門の學究的代表者は伊勢の本居宣長なるべく、その古典に對する見識は凡ならぬものがあつた。

かくて江戸は學藝の府となり、その知識弘く上下に普及したが、それが輕快な江戸つ子氣質と結びついたところに生まれたのが狂詩であり、狂歌であり、川柳であつた。かく江戸にかうした遊戯文學が流行してゐる頃、俳諧は上方に再びその光彩を搖曳するに至つたのである。横井也有は危く狂體に墮せむとしてゐる、まだ彼に俳諧の復興を望むことは出來ぬ。太祇から蕪村に至つて元祿のそれとはまた別趣な、華麗にして頗る印象的な句風を大成したのである。蕪村以後その衣鉢を繼ぐ弟子少く、代下るにつれて句品ます〳〵下り、遂に天保以後の俗俳となつて行くのである。

江戸の文學は殆ど小說である。上方には八文字屋本以後、後

の讀本に影響を及ぼしたと見るべき二三の作はあつたが、それは直接江戸の小說の興隆には無關係と見てよい。江戸小說の起源はもと小兒の玩弄物であつた繪草紙にはじまる。繪を主として文句は只繪解きの程度で、表紙の色によつて赤本と呼ばれ、次いで黑色の表紙に變つて黑本と呼ばれたが、普通にはなほ赤本といはれてゐた。寶曆の頃、表紙の色が萌黃色となり、次いで明和の頃黃色になつて、赤本・黃表紙と呼ばれるに至つた。これらはもと紙五枚を一册とし、二册又は三册を一部としたが、漸次內容が複雜になつて來るところから、從來の五册を一册に製本し、全十册を二册として發賣するやうになつた。これを合卷といふ。文化頃からのことである。以上赤本乃至合卷を總括して草双紙といふ。

草双紙の外觀から見て分類せられた赤本（黑本を含む）・青本（黃表紙を含む）・合

卷の三種の分類は、また直に移して內容の變遷を窺ふべき區分ともなる。即ち赤本時代は前述のやうにお伽噺や武勇談を繪を主として物語つたものであつたが、漸次軍記や一代記などに取材するやうになりはしたものの、到底小兒用繪本の程度を何ほども越える事はなかつた。これらの双紙は次第に教訓的傾向を帶び來り、先づ洒脫味を失ひ、ついで仇討物・怪談物等と內容が變化するやうになつた。又教養ある階級を讀者としたものに讀本がある。讀本とは青本・合卷等が繪を主としたものであつたに對し、挿繪の少い半紙本をいひ、文化・文政時代をその全盛期とする。多く題材を支那小說や古い淨瑠璃等に取り、時代を近古にかりて忠孝の觀念や武士道の精神を鼓吹しようとし、勸善懲惡の意を寓して筆を運んだもので、かの浮世草紙や、青本などに見えた寫實的傾向は著しく浪漫的となり、町人より武士、人情より義理、滑稽より教訓を寫さうとしたのがその特色である。

その代表的作家は山東京傳と曲亭馬琴とである。

なほこれらと別に、主に世界を狹斜の巷に求めて忠實にその風俗・言語を寫したものに、洒落本といはれる一羣がある。青本が最も盛んであつた安永・天明の頃を、その全盛期とする。寛政二年風俗に害ありとして、幕府はこれを禁止したが、なほ文政頃までその刊行は續けられた。洒落本は最初は殆ど脚色などの認められないやうな片々たるものであつたが、漸次こゝにも複雜な脚色が要求せられるやうになつて、文化・文政の江戸に榮えた。式亭三馬・十返舍一九は滑稽本の、爲永春水は人情本の作者として有名である。

次に淨瑠璃はこの時代は上方では義太夫の創めた竹本座及びその競爭者なる豐竹座ともに衰運に向ひ、相次いで沒落の幕

にとざされて了つた。前期の末から流行し始めた合作の傾向は、この期に入つてます〳〵甚しく、その結果徒に場面の變化をのみ目的として、遂に全篇の統一を顧みないものが多くなつた。これは江戸の作者についても、大體同じことがいはれる。要するにこの時代に入つて歌舞伎が發達するにつれて、操芝居が壓倒せられて行つたと共に、淨瑠璃も一歩々々滅亡に近づいて行つたのである。かくて歌舞伎の發達と同時に、從來役者に掣肘せられて驥足を伸すことを得なかつた脚本界に、並木五瓶・鶴屋南北・河竹默阿彌等の俊材が相次いで現れ、上方にも江戸にも傑出せる曲がかなり制作せられた。

さきに縣門に歌人が輩出したことを述べた。飜つて再び歌壇の情勢を見てこの期を終へようと思ふ。眞淵は萬葉にかへれと敎へたが、その作の上にはその說を如實に示し得なかつた。

それは彼が詩人的素質を有しながら、その學問に囚はれてゐるところに、その矛盾が含まれてゐたのである。幕末に出た諸家、たとへば僧良寬・平賀元義・橘曙覽等はさうした囚はれたところがなかつただけ、その歌は期せずして萬葉に歸つたかに考へられる。その外香川景樹は他の立脚地に立つ偉大な歌人といへる。古今集を宗として歌は調ぶるものなり、ことわるものにあらずと道破してゐる見識は非凡なものがある。四條派の小幅を見るやうな趣が彼の歌に感じられる。動もすれば平弱に陷らうとするのはその病弊である。かうしてゐる中にも時代は移る。さすがに二百數十年の太平の夢の醒め際は騷がしかつた。この際に活躍した所謂志士の歌は、端的にその感懷を洩らして轉、人を動かすものが多い。

五訂

新日本讀本 卷八（終）

常用漢字

（大正十二年五月臨時國語調査會發表、昭和六年五月修正）（千八百五十八字）

【一】一丁七丈三上下不世丙並【丨】中【丶】丸主【丿】之久乏乘【乙】乙九乞也乳亂【亅】了事【二】二五五井【亠】亡交京亭亦【人】人仁仇今介仕他付代令以仰仲件任伊伏伐休伯伴伺似位低住佐何余佛作伸使來佳例侍供依侮侯侵便係促俱俊俗保俠信修俳俵俸倂倉個倍倒候借倫假偉偏停健側偶傍傑備催働傳債傷傾僅像僚僞僧價儀億儉償優【儿】元兄充兆兇先光克免兎兒【入】入內全兩【八】八公六共兵具其典兼【冂】冊再【冖】冗【冫】冬冷凉凖凌凍【凵】凡【凵】凶出【刀】刀刄分切刊刑列初判別利到制刷券刺刻則削前剛副剩割創劇劍劑【力】力功加劣助努効勅勇勉動勘務勝勞募勢勤勳勵勸【勹】包【匕】化北【匚】區【十】十千升午半卑卒卓協南塗塵境墓塀增墨墮壁壇壓壞【士】士壯壹壽【夂】夏【夕】夕外多夜夢【大】大天太夫央失奇奉奏契奔奢奥奪奬奮【女】女奴好如妃妊妥妙妨妹妻姉始姑姓委姦姪姫姻姿威娘娯娠娼婚婦婿媒嫁嫡嫌孃【子】子字存孝季孤孫學【宀】宅守安宏完宗官定宜客宣室宮害宴家容宿寄密富寒察寢實審寫寛寶【寸】寸寺封射將專尉尊尋對導【小】小少尙【尢】就【尸】尺尼尾尿局居屈屈屋展層履屬卷卽【广】厄厘厚原厭【厶】去參【又】及友反叔取受【口】口古句叫召可史右司各合吉同名后吏吐向君吟否含呈吸吹告咸周味呼命和咽哀品員哲唐唯唱商問啓善喉喜喪喫單嗣嘉器噴嚴囑【囗】囚四回因困固國圍園圓圖團【土】土在地坂均坊坑坪垂型埋城域執培基堀堂堅堤堪報場塔塀墨墮壁壇壓壞【士】士壯壹壽【夂】

【山】山岡岩岳岸峠峯島
峽崇崎崩【巛】川州巡巣
【工】工左巧巨差【己】己
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣【干】干
平年幸幹【幺】幻幼幾【广】
床序底店府度座庫庭庶
康廉廓廢廣廳【廴】延廷
建廻【廾】弄弊【弋】式
【弓】弓弔引弟弱張强彈
【彡】形彩彫影彰【彳】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復徵徽德徹【心】心
必忌忍志忘忙忠快念怒
思怠急性怨怪怯恐恥恨
恩恭息悔悟悖患悲惟悼

情惑惜惠惡惰惱想愁愉
意愚愛感慈態慕慘慢愼
慣慨慮慰慶慾憂憐憚憲
憶憾憤懇應懲懷懸戀
【戈】成我戒戰戲戴【戶】
戶戾房所扇【手】手才打
扱扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓拔拘
拙招拜括拳拾持指振捕
捧描捨掃授掌排掛採探
控推揚接提換握揷揭揮
援損搖搜摘携摩撫擇擊
操擔據擬擴攝【支】支
【攴】收改攻放政故敍敎
斂救敗敢散敬敵敷數整
【文】文【斗】斗料斜【斤】

斤斥斬新斷斯【方】方施
旋旅族旗【无】既【日】日
旦旨早旬旭昇昌明易昔
星春昭昨是映時晩晝普
景晴晶智暇暖暗暑暮暴
曆曇曜【曰】曲更書曹會
替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木未末本
札朱机朽杉材村束柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染柔查柩柱柳栗校
株根格栽桃案桐桑梅條
梨械棄棋棒棟森棺植楠
業極榮構概樂樓標樞模
樣樹橋機橫檄檢櫻欄權
【欠】次欲款欺歌歎歐歡

【止】止正此步武歲歷歸
【歹】死殊殉殖殘【殳】段
殺殿毀【毋】母每毒【比】
比【毛】毛【氏】氏民【气】
氣【水】水氷永汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河
沸油治沼沿況泉泊法波
泣泥注泰泳洋洗津洪活
派流浦浪浮浴海浸消涉
液淑淚淡淨淫深混淸淺
添減淵渡溫測港渴湖湧
湯源準溢溶溺滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏演漕漠漢
漫漸潔潛潮澤激濁濃濕
濟濱瀧灣【火】火灰災炊
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營爆爐【爪】
爪爭爲爵【父】父【爻】爾
【片】片版牌【牙】牙【牛】
牛牧物牲特犧【犬】犬犯
狀狂狩狹猛猫猶獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴環
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畜畝略番畫異留當疊
【疋】疋疎疑【疒】疫疲疾
病症痘痛痢療癖【癶】登
發【白】白百的皆皇【皮】
皮【皿】皿盆益盛盜盟盡
監盤【目】目盲直相省眉

看眞眠眼着睡督【矢】矢
知短【石】石砂砲破研硬
硯碁碎碑確磁磨礎【示】
示社祈祕祖祝神票祭禁
禍福禦禮【禾】秀私秋科
秒租秩移稅程稚種稱稻
稿穀積穗穩【穴】穴究空
突窃窒窓窮【立】立章童
端競【竹】竹竿笑笛符第
筆等筋筒答策算管箱節
範築篤簡簿籍【米】米粉
粒粘粗粹精糖糞【糸】系
紀約紅紋納純紙級紛素
紡索紫累細紳紹紺終組
結絕絡給統絲絹經綠維
綱網綴綻綿緊緒線締緣

編緩緯練縛縣縫縮縱總
績繁織繕繪繭繰繼續
【缶】缺【网】罪置署罰罵
罷羅【羊】羊美羣義【羽】
羽翁翌習翼【老】老考者
【而】耐【耒】耕【耳】耳聖
聞聯聲職聽【聿】肅肇
【肉】肉肖肝股肥肩育肺
胃背胎胞胴胸能脅脈脊
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜
膝膽臆膺臟【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【臼】與興擧舊【舌】舌舍
【舛】舞【舟】舟航般舵舶
船艦【艮】良【色】色【艸】
芝花芽芳苑苗若苦英茂

茶草荒荷莊菊菌菓菜華
萬落葉著葬蒙蒸蓄蔓薄
藏藝藤藥【虍】虎虐處虛
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲
蠶蠻【血】血衆【行】行術
街衝衡衞【衣】衣表衰袋
袖被裁裂裏裕補裝裸製
複褒襲【西】西要覆【見】
見規視親覺覽觀【角】角
解觸【言】言訂計討訓託
記訟訪設許訴診詐詔評
詞詠試詩詰話詳誇誌認
誓誕誘語誠誤說課調談
請論諭諸諾謀謁諮講謝
謠謹謬證識譜警譯議護
譽讀變讓【谷】谷【豆】豆

豐【豕】豚象豪豫【貝】貝
貞負財貧貨販貫責貯貳
貴買貸費貿賀賃賄資賊
賓賜賞賢賣賤賦質賴購
贈贊【赤】赤【走】走赴起
超越趣【足】足距跡路踊
躍【身】身【車】車軌軍軒
軟軸較載輕輩輪輯輸輿
轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰
農【辵】辷迎近返迫迭述
迷追退送逃逆透逐途通
速造連週進逸遂遇遊運
過道達違遙遞遠遣適遭
遲遷選遺避還邊邂【邑】
邦邪邸郊郎郡部郵都鄕
【酉】酌配酒酢酬酷酸醉
醜醫【采】釋【里】里重野
量【金】金釜針釣鈍鈴鉛
鉢銀銃銅銘鋭鋒鋼錯錄
錢鍋鎖鎭鏡鑄鐘鐵鑑鑛
【長】長【門】門閉開閑問
閣閲關【阜】防附降限陛
院陣除陪陳陰陵陶陷陸
陽隆隊階隔隙際障隣隨
險隱【隹】隻雀雄雅集雇
雌雙雜離難【雨】雨雪雲
零雷電需震霜霧露靈
【青】青靜【非】非【面】面
【革】革靴【音】音響【頁】
頂項順頓預頑領頭頻題
額顏願顚類顧顯【風】風
【飛】飛翻【食】食飢飲飯
飾養餓餘餅館餐【首】首
【香】香【馬】馬馳駁駄駐
騎騰騒驅驗驚驛【骨】骨
髓體【高】高【髟】髮【鬥】
鬪【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮
鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
【鹵】鹽【鹿】鹿麗【麥】麥
【麻】麻【黃】黃【黑】黑默
點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】
齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】
龜

注意

（一）本表にない漢字は假名で書くこと（二）固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、だし外國（支那を除く）の人名地名は假名書とすること（三）代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと（四）外來語は假名で書くこと。

略字表

（臨時國語調査會發表）

左の字體を本位として用ひること。

（括弧内の小字は字典體）

勧（勸）権（權）潅（灌）歓（歡）観（觀）
沢（澤）択（擇）訳（譯）駅（驛）釈（釋）
変（變）恋（戀）蛮（蠻）湾（灣）
茎（莖）径（徑）経（經）軽（輕）
併（併）塀（塀）瓶（瓶）餅（餅）研（研）
斉（齊）斎（齋）済（濟）剤（劑）
残（殘）浅（淺）賤（賤）銭（錢）
労（勞）営（營）栄（榮）学（學）覚（覺）
挙（擧）誉（譽）断（斷）継（繼）
歯（齒）齢（齡）湿（濕）顕（顯）
窓（窗）総（總）属（屬）嘱（囑）
為（爲）偽（僞）帯（帶）滞（滯）
参（參）惨（慘）両（兩）満（滿）
発（發）廃（廢）鼠（鼠）猟（獵）
乱（亂）辞（辭）潜（潛）賛（贊）
走（走）徒（徒）従（從）縱（縱）
悩（惱）脳（腦）処（處）拠（據）
担（擔）胆（膽）来（來）麦（麥）
寿（壽）鋳（鑄）数（數）楼（樓）

楽（樂）　薬（藥）　読（讀）　続（續）
竜（龍）　滝（瀧）　随（隨）　髄（髓）
麻（麻）　麗（麗）　聴（聽）　廳（廳）
虚（虛）　戯（戲）　遅（遲）　解（解）
独（獨）　触（觸）　畳（疊）　摂（攝）
虫（蟲）　蚕（蠶）　仮（假）　児（兒）
励（勵）　営（營）　国（國）　囲（圍）
円（圓）　図（圖）　壱（壹）　実（實）
写（寫）　宝（寶）　扣（控）　叙（敍）
条（條）　様（樣）　帰（歸）　気（氣）
炉（爐）　犠（犧）　献（獻）　画（畫）

当（當）　尽（盡）　礼（禮）　称（稱）
糸（絲）　欠（缺）　声（聲）　台（臺）
旧（舊）　万（萬）　号（號）　証（證）
豊（豐）　弁（辨辯）　逓（遞）　辺（邊）
医（醫）　鉄（鐵）　関（關）　双（雙）
霊（靈）　余（餘）　舘（館）　体（體）
塩（鹽）　点（點）　覚（覺）
闘（鬪）　刺（刻）　亀（龜）

略字表　終

日本文學年表

（五訂新日本讀本附錄）

文學の種類

上古（大和時代）

- 祝詞
- 古事記
- 日本書紀
- 風土記
- 宣命

中古（平安朝時代）（自一四五五 至一八五二）

- 竹取物語
- 伊勢物語
- 宇津保物語
- 落窪物語
- 源氏物語
- 狹衣物語
- 堤中納言物語
- 今昔物語
- 榮華物語
- 大鏡
- 今鏡
- 士佐日記
- 蜻蛉日記
- 紫式部日記
- 和泉式部日記
- 一 古今集
- 二 後撰集
- 三 拾遺集
- 四 後拾遺集
- 五 金葉集
- 六 詞花集
- 七 千載集
- 記紀歌謠集
- 萬葉集（長歌）（短歌）
- 連歌
- 神樂歌
- 催馬樂
- 漢和朗詠集
- 新撰朗詠集
- 梁塵秘抄
- 民謠
- 文鏡祕府論
- 袋草紙
- 枕草紙
- 凌雲集
- 文華秀麗集
- 經國集
- 本朝文粹
- 懷風藻

近古（鎌倉・室町時代）（自一八五三 至二二六二）

- 字治拾遺物語
- 石清水物語
- 古今著聞集
- 十訓抄
- 水鏡
- 吉野拾遺
- 增鏡
- 神皇正統記
- 保元物語
- 平治物語
- 平家物語
- 源平盛衰記
- 太平記
- 義經記
- 曾我物語
- お伽草紙
- 十六夜日記
- 海道記
- 東關紀行
- 八 新古今集
- 金槐和歌集
- 玉葉集
- 新葉集
- 俳諧
- 菟玖波集
- 六菟玖波集
- 新菟玖波集
- 舞曲
- 小歌
- 狂言
- 謠曲
- 方丈記
- 徒然草
- 五山文學

近世（江戸時代）（自二二六三 至二五二七）

- 假名草紙
- 太閤記
- 浮世草紙
- 日本永代藏
- 世間胸算用
- 武道傳來記
- 草雙紙
- 黃表紙
- 酒落本
- 讀本
- 雨月物語
- 椿說弓張月
- 里見八犬傳
- 合卷本
- 滑稽本
- 東海道中膝栗毛
- 浮世風呂
- 艀娥日記
- 花屋日記
- 七番日記
- 奧の細道
- 旅のなぐさ
- 菅笠日記
- 賀茂眞淵集
- 桂園一枝集
- 狂歌
- 古今夷曲集
- 萬歲狂歌集
- 良寬和尙歌集
- 御傘（松永貞德）
- 宗因千句
- 芭蕉七部集
- 蕪村七部集
- 一茶發句集
- 流行歌
- 長唄
- 歌澤
- 常盤津
- 清元
- 御詠歌
- 松の落葉
- 淨瑠璃
- 國性爺合戰
- 曾我會稽山
- 近松門左衛門
- 菅原傳授手習鑑
- 假名手本忠臣藏（竹田出雲）
- 本朝二十四孝（近松半二）
- 脚本
- 幻住庵記
- 風俗文選
- 鶉衣
- おらが春
- 折焚く柴の記
- 駿臺雜話
- 雲萍雜志
- 閑田耕筆
- 玉勝間
- 花月草紙
- 泊洒筆話
- 梧窓漫筆
- 松廼舍落葉
- 年々隨筆
- 藤簍册子
- 琴後集
- うけらが花
- 羅山文集
- 藤樹先生文集
- 白石詩草
- 鳩巢文集
- 栗山文集
- 山陽詩集
- 山陽文集
- 言志四錄
- 正氣歌・常陸帶
- 新論
- 星巖集
- 拙堂文集

作家

- 安藤太郎
- 柿本人麿
- 山上憶良
- 山部赤人
- 伴家持
- 大犬養岡麿
- 海犬養岡麿
- 紀貫之
- 河內紀友人
- 凡河內躬恒
- 紀貫之
- 在原業平
- 紀貫之
- 清少納言
- 紫式部
- 西行
- 阿佛尼
- 吉田兼好
- 北畠親房
- 鴨長明
- 藤原定家
- 井原西鶴
- 松尾芭蕉
- 貝原益軒
- 近松門左衛門
- 森川許六
- 新井白石
- 室鳩巢
- 柳澤淇園
- 竹田出雲
- 賀茂眞淵
- 橫井也有
- 谷口蕪村
- 本居宣長
- 上田秋成
- 加藤千蔭
- 村田春海
- 太田南畝
- 橘南谿
- 良寬
- 松平定信
- 石原正明
- 小林一茶
- 瀧澤馬琴
- 香川景樹
- 清水濱臣
- 柴田鳩翁
- 三浦梅園
- 中島廣足
- 賴山陽
- 坪內逍遙
- 落合直文
- 德富蘇峰

近世

- 傳記的政治小說
- 經國美談
- 佳人奇遇
- 蓬生日記（一葉）
- 短歌
- 亂れ髮
- 竹の里歌
- 日本派俳句
- 春夏秋冬（子規等）
- 日本俳句抄
- 新體詩
- 孝女白菊の歌
- 水沫集
- 戲曲
- 黃門記
- 童幼講釋
- 夜討曾我
- 隨筆
- そゞろごと
- 花紅葉
- 漢詩文
- 蒼海全集
- 藤公詩存

近世（江戸時代）（自二二六三至二五二七）

- 假名草紙
- 太閤記
- 浮世草紙
- 日本永代藏
- 世間胸算用
- 武道傳來記
- 草雙紙
- 黃表紙
- 洒落本
- 讀本
- 雨月物語
- 椿說弓張月
- 里見八犬傳
- 合卷本
- 滑稽本
- 東海道中膝栗毛
- 浮世風呂
- 艇賦日記
- 花屋日記
- 七番日記
- 奥の細道
- 旅のなぐさ
- 菅笠日記
- 賀茂眞淵集
- 桂園一枝
- 狂歌
- 古今夷曲集
- 萬歲狂歌集
- 良寛和尙歌集

近世（自一八五三至二二六二）

- 源平盛衰記
- 太平記
- 義經記
- 曾我物語
- お伽草紙

近世（明治・大正時）

- 傳記的政治小說
- 經國美談
- 佳人奇遇
- 雪中梅
- 創作
- 浮雲
- 五重塔
- うたかたの記
- 滝口入道
- たけくらべ
- 金色夜叉
- 不如歸
- 高野聖
- 舞姬
- 破戒
- 運命
- 春
- 我輩は猫である
- 草枕
- ふらんす物語
- 鶏籠
- 虞美人草
- 平凡
- 土
- 新生
- 高瀨舟
- 宣言
- 蓬生日記
- 短歌
- 亂れ髪
- 竹の里歌
- 萩の家歌集
- アラ、ギ（雜誌）
- 啄木歌集
- 長塚節歌集
- 春泥集
- 空穗歌集
- 自選歌集叢書
- 日本派俳句
- 春夏秋冬（子規等）
- 日本俳句抄
- 子規句集
- 明治新題句集
- 海紅
- 新傾向句の研究
- 春夏秋冬（虛子）
- 井泉水句集
- 筑波會・秋聲會其他
- 新俳句帖
- 紅葉句帳
- 新體詩
- 孝女白菊の歌
- 水沫集
- 若菜集
- 天地玄黃
- 一葉舟
- 夏草
- 落梅集
- 天地有情
- 無弦弓
- 泣菫詩集
- 春鳥集
- 海潮音
- 白羊宮
- 日本民謠全集
- 邪宗門
- 廢園
- 啄木遺稿
- 獨歩詩集
- 舞ごろも
- 日本象徵詩集
- 白秋小唄集
- 春月小曲集
- 白秋詩集
- 川路柳虹詩集
- 明治大正詩選
- 童謠
- 日本童謠集
- 戲曲
- 黃門記
- 童幼講釋
- 夜討曾我
- 狩場曙
- 勸善懲惡
- 覗機關
- 桐一葉
- 香手鳥
- 孤城落月
- 牧の方
- 俠客春雨傘
- 日蓮上人
- 辻說法
- 新曲浦島
- 義民甚兵衛
- 井伊大老の死
- 修善寺物語
- 隨筆
- そゞろごと
- 花紅葉
- 雪月花
- 黃菊白菊
- 自然と人生
- 武藏野
- 病間錄
- 仰臥漫錄
- 墨汁一滴
- 潮待草
- 萩之家遺稿
- 筆のしづく
- みゝずのたはごと
- 筆のまに〳〵
- 竹柏集
- 斷腸亭雜藁
- 偶像再興
- 光あれ
- 三太郎日記
- 人生と趣味
- 嵐の前
- 小鳥の來る日
- 洗心雜話
- 山水巡禮
- 飯倉だより
- 冬彥集
- 漢詩文
- 蒼海全集
- 藤公詩存
- 春濤集
- 槐南集
- 評論
- 小說神髓
- ニイチエ美的生活論
- 囚はれたる文藝
- 幸田露伴
- 非自然主義
- 萩之家遺稿
- 近代文學十講
- 文藝思潮論
- 劇場最近十年
- 心頭雜草
- 宗教文學論
- 文藝百科要義
- 近代文藝十二講
- 日本現代文學十二講
- 御傘（松永貞德）
- 宗因千句
- 芭蕉七部集
- 蕪村七部集
- 一茶發句集
- 流行歌
- 長唄
- 歌澤
- 常盤津
- 清元
- 御詠歌
- 松の落葉
- 淨瑠璃
- 國性爺合戰
- 曾我會稽山
- 近松門左衛門
- 菅原傳授手習鑑
- 假名手本忠臣藏（竹田出雲）
- 本朝二十四孝（近松半二）
- 本脚
- 幻住庵記
- 風俗文選
- 鶉衣
- おらが春
- 白石詩草
- 鳩巢文集
- 折焚く柴の記
- 駿臺雜話
- 栗山文集
- 閑田耕筆
- 山陽詩集
- 玉勝間
- 山陽文集
- 花月草紙
- 言志四錄
- 泊洒筆話
- 新論
- 松廼舍落葉
- 星巖集
- 年々隨筆
- 梧窓漫筆
- 藤簍冊子
- 拙堂文集
- 琴後集
- うけらが花
- 羅山文集
- 藤樹先生文集
- 貝原益軒
- 近松門左衛門
- 森川許六
- 新井白蛾
- 室鳩巢
- 柳澤淇園
- 竹田出雲
- 賀茂眞淵
- 橫井也有
- 谷口蕪村
- 本居宣長
- 上田秋成
- 加藤千蔭
- 村田春海
- 太田南畝
- 橘南谿
- 良寛
- 松平定信
- 石原正明
- 小林一茶
- 瀧澤馬琴
- 香川景樹
- 清水濱臣
- 柴田鳩翁
- 中島廣足
- 賴山陽
- 三浦梅園
- 二葉亭四迷
- 北村透谷
- 上田萬年
- 幸田露伴
- 德富蘇峰
- 坪內逍遙
- 落合直文
- 芳賀矢一
- 正岡子規
- 尾崎紅葉
- 夏目漱石
- 藤岡作太郎
- 大町桂月
- 國木田獨歩
- 高山樗牛
- 田山花袋
- 土井晚翠
- 樋口一葉
- 島崎藤村
- 岡本綺堂
- 綱島梁川
- 佐佐木信綱
- 高濱虛子
- 五十嵐

近代（明治・大正時代）

傳記的政治小說

經國美談
佳人奇遇
雪中梅
創作
浮雲
五重塔
うたかたの記
濱口入道
たけくらべ
金色夜叉
不如歸
高野聖
舞姫
破戒
運命
春
我輩は猫である
草枕
ふらんす物語
鶏籠
虞美人草
平凡
土
新生
高瀬舟
宣言
暗夜行路
大衆文學

蓬生日記（一葉）

短歌

亂れ髪
竹の里歌
萩の家歌集
アラヽギ（雜誌）
啄木歌集
長塚節歌集
春泥集
空穗歌集
自選歌集叢書

日本派俳句

春夏秋冬（子規等）
日本俳句抄
子規句集
明治新題句集
海紅
新傾向句の研究
春夏秋冬（虚子）
井泉水句集
筑波會・秋聲會其他
新俳句帖
紅葉句帳

新體詩

孝女白菊の歌
水沫集
若菜集
天地玄黃
一葉舟
夏草
落梅集
天地有情
無弦弓
泣菫詩集
春鳥集
海潮音
白羊宮
日本民謠全集
邪宗門
廢園
啄木遺稿
獨歩詩集
舞どろも
日本象徵詩集
白秋小唄集
春月小曲集
白秋詩集
川路柳虹詩集
明治大正詩選
童謠
日本童謠集

戲曲

黃門記
童幼講釋
夜討曾我
狩場曙
勸善懲惡
覗機關
桐一葉
沓手鳥孤城落月
牧の方
俠客春雨傘
日蓮上人辻說法
新曲浦島
義民甚兵衛
井伊大老の死
修善寺物語

隨筆

そゞろごと
花紅葉
雪月花
黃菊白菊
自然と人生
武藏野
病間錄
仰臥漫錄
墨汁一滴
潮待草
萩之家遺稿
筆のしづく
みゝずのたはごと
筆のまに〳〵
竹柏集
斷腸亭雜藁
偶像再興
光あれ
三太郎日記
人生と趣味
嵐の前
小鳥の來る日
洗心雜話
山水巡禮
飯倉だより
冬彦集
藪柑子集
三都物語
生命の微光
靜思餘錄
山中雜記
七寶の柱
春を待ちつゝ
樹木とその葉
季節の窓
野を歩む者
旅と歌と
若き自然
靜と動との間
洗心錄
生田春月全集
感想小品
芥川龍之介集
草木蟲魚
茶話抄
水莖
樹下石上
續冬彦集

漢詩文

蒼海全集
藤公詩存
春濤集
槐南集
評論
小說神髓
ニイチェ美的生活論
囚はれたる藝文
幸田露伴
非自然主義
北村透谷
近代文學十講
德富蘆花
文藝思潮論
劇場最近十年
心頭雜草
宗教文學論
高山樗牛
文藝百科要義
田山花袋
土井晚翠
樋口一葉
藤岡東圃
國木田獨歩
大町桂月
芳賀矢一
正岡子規
尾崎紅葉
上田萬年
北村透谷
德富蘆花
夏目漱石
二葉亭四迷
落合直文
坪內逍遙
島崎藤村
佐佐木信綱
高濱虛子
五十嵐
網島梁川
岡本綺堂
河井酔茗
金子薰園
尾上柴舟
島木赤彦
沼波瓊音
近松秋江
薄田泣菫
長塚節
吉江孤雁
正富汪洋
北原白秋
石川啄木
吉田絃二郎
川路柳虹
三木露風
芥川龍之介
西條八十
生田春月
相馬御風
萩原井泉水
山村暮鳥
若山牧水
土岐善麿

日本文學年表

（新日本讀本附錄）（五訂）

文學の種類

作家	作品	巻数課数
太安麿	古事記	一〇・一六
柿本人麿	萬葉集	七・一九
山上憶良	竹取物語	九・八
山部赤人	伊勢物語	九・七
大伴家持	古今集	九・七
海犬養岡麿	土佐日記	八・五
紀貫之	枕草子	九・四
清少納言	源氏物語	一〇・二
紫式部	和漢朗詠集	一〇・三
	榮華物語	一〇・一
	大鏡	八・七
西行	山家集	八・七
	文鏡祕府論	八・一〇
	凌雲集	六・一〇
	文華秀麗集	八・七
	經國集	九・七
凡河内躬恒	古今集	九・七
紀貫之	後撰集	九・七
紀友則	拾遺集	九・七
在原業平	伊勢物語	九・八
	竹取物語	七・九
藤原定家	新古今集	八・一〇
	保元物語	六・一〇
	平治物語	八・一〇
	平家物語	九・一
	源平盛衰記	六・八
阿佛尼	十六夜日記	八・一〇
	太平記	九・一六
	曾我物語	六・四
	東關紀行	七・八
	謠曲	七・一
	狂言	七・二
	増鏡	一〇・九
	新葉集	七・一〇
北畠親房	神皇正統記	五・三
吉田兼好	徒然草	一〇・八
	方丈記	九・六
	五山文學	七・三
	鴨長明	八・一〇
井原西鶴	世間胸算用	九・一
松尾芭蕉	奥の細道	九・二
	蕉門の俳句	九・三
貝原益軒	益軒十訓	四・六
		六・一〇
近松門左衛門	曾我會稽山	九・四
森川許六	風俗文選	一〇・六
新井白石	折り焚く柴の記	三・三
室鳩巣	駿臺雜話	五・三
		九・七
柳澤淇園	雲萍雜志	一・一四
竹田出雲	菅原傳授手習鑑	八・八
	賀茂眞淵集	一〇・五
	岡部日記	
橫井也有	鶉衣	一〇・六
谷口蕪村	蕪村七部集	八・九
本居宣長	玉勝間	六・六
	鈴の屋集	七・四
		八・三一
上田秋成	藤簍冊子	一〇・七
加藤千蔭	うけらが花	九・一七
村田春海	琴後集	七・九
		一〇・五
太田南畝	狂歌	五・一九
	狂句	五・一九
橘南谿	東遊記	四・九
良寛	良寛和尚歌集	六・七
賴山陽	山陽文集	八・一四
	山陽詩集	一〇・五
	山陽文集	一〇・五
	栗山文集	一〇・五
	言志四錄	一〇・五
	正氣歌・常陸帶	一〇・五
	新論	一〇・五
	星巖集	一〇・五
	拙堂文集	一〇・五
	羅山文集	一〇・五
	藤樹先生文集	一〇・五
白石	詩草	一〇・五
	鳩巢文集	一〇・五
	鶏肋集	一〇・五
	南海文集	一〇・五
	東關紀行	一〇・五
	海道記	一〇・五
	十六夜日記	一〇・五
金槐和歌集		一〇・五
玉葉集		一〇・五
新葉集		一〇・五
萬葉集（長歌）（短歌）	萬葉集	一〇・一六
記紀歌謠	古今集	一〇・一六
	後撰集	一〇・一六
	拾遺集	一〇・一六
	金葉集	一〇・一六
	花葉集	一〇・一六
	詞家集	一〇・一六
	千載集	一〇・一六
連歌		
俳諧	蕉玖波集	
	蕉玖波集	
	蕉玖波集	
舞曲	小歌	
民謠	神樂歌	
	催馬樂	
	漢和朗詠集	
	新撰朗詠集	
	梁塵祕抄	
流行歌	長唄	
	澤瀉	
	常盤津	
	清元	
	御詠歌	
	松の落葉	
淨瑠璃	國性爺合戰	
	曾我會稽山（近松門左衛門）	
	菅原傳授手習鑑	
	假名手本忠臣藏（竹田出雲）	
	本朝二十四孝（近松半二）	
	本脚	
幻住庵記	風俗文選	
	鶉衣	
	おらが春	
	折焚く柴の記	
	駿臺雜話	
	雲萍雜志	
	閑田耕筆	
	玉勝間	
	花月草紙	
	泊洒筆話	
	梧窓漫筆	
	松廼舍落葉	
	年々隨筆	
	藤簍冊子	
	琴後集	
	うけらが花	
文鏡祕府論	枕草子	
袋草紙		
枕草紙		
懷風藻	本朝文粹	
大山伴家持	海犬養岡麿	
柿本人麿	在原業平	
山上憶良	紀友則	
山部赤人	原業平	
凡河内躬恒	紀貫之	
紀貫之	土佐日記	
紫式部	紫式部日記	
	和泉式部日記	
清少納言	枕草子	
源氏物語	蜻蛉日記	
和漢朗詠集	新撰朗詠集	
榮華物語	梁塵祕抄	
大鏡	神樂歌	
西行	催馬樂	
山家集	漢和朗詠集	
藤原定家	新撰朗詠集	
鴨長明	梁塵祕抄	
新古今集	長唄	
方丈記	澤瀉	
徒然草	常盤津	
五山文學	清元	
	御詠歌	
	松の落葉	
井原西鶴	國性爺合戰	
松尾芭蕉	曾我會稽山（近松門左衛門）	
	菅原傳授手習鑑	
	假名手本忠臣藏（竹田出雲）	
	本朝二十四孝（近松半二）	
	本脚	
貝原益軒	益軒十訓	
近松門左衛門	曾我會稽山	
森川許六	風俗文選	
新井白石	折り焚く柴の記	
室鳩巣	駿臺雜話	
柳澤淇園	雲萍雜志	
竹田出雲	菅原傳授手習鑑	
	賀茂眞淵集	
	岡部日記	
橫井也有	鶉衣	
谷口蕪村	蕪村七部集	
本居宣長	玉勝間	
	鈴の屋集	
上田秋成	藤簍冊子	
加藤千蔭	うけらが花	
村田春海	琴後集	
太田南畝	狂歌	
	狂句	
橘南谿	東遊記	
良寛	良寛和尚歌集	
賴山陽	山陽文集	
	山陽詩集	
	山陽文集	
	栗山文集	
	言志四錄	
	正氣歌・常陸帶	
	新論	
	星巖集	
	拙堂文集	
松平定信	花月草紙	
石原正明	年々隨筆	
小林一茶	おらが春	
瀧澤馬琴	南總里見八犬傳	
香川景樹	桂園一枝	
清水濱臣	泊洒文藻	
柴田鳩翁	鳩翁道話	
三浦梅園	梅園叢書	
中島廣足	櫻園文集	
賴山陽	山陽文集	
坪内逍遙	逍遙全集	
落合直文	落合直文集	
德富蘇峰	蘇峰文集	
蘇峰	蘇峰文集	

紙 語 記 記 記

紙 記 紙 藏 用 記 紙 紙 本 本 語 月 傳 本 本 毛 呂

小說　談 遇 梅 作 雲 塔 記 道 べ 叉 歸 聖 姫 戒 命 は る 枕 語 籠 草 凡 生 舟 言

日記

嵯峨日記　花屋日記　七番日記　奥の細道　旅のなぐさ　菅笠日記

蓬生日記（一葉）

短歌

賀茂眞淵集　桂園一枝　狂歌　古今夷曲集　萬歲狂歌集　良寛和尚歌集

亂れ髮　竹の里歌　萩の家歌集　アラヽギ（雜誌）　啄木歌集　長塚節歌集　春泥集　空穗歌集　自選歌集叢書

日本派俳句

御傘（松永貞德）　宗因千句　芭蕉七部集　蕪村七部集　一茶發句集

春夏秋冬（子規等）　日本俳句抄　子規句集　明治新題句集　海紅　新傾向句の硏究　春夏秋冬（虛子）　井泉水句集　筑波會・秋聲會其他　新俳句帖　紅葉句帳

新體詩

流行歌　長唄　歌澤　常磐津　淸元　御詠歌　松の落葉

孝女白菊の歌　水沫集　若菜集　天地玄黃　一葉舟　夏草　落梅集　天地有情　無弦弓　泣菫詩集　春鳥集　海潮音　白羊宮　日本民謠全集　邪宗門　廢園　啄木遺稿　獨步詩集　舞ごろも　日本象徵詩集　白秋小唄集　春月小曲集　白秋詩集　川路柳虹詩集　明治大正詩選

童謠　日本童謠集

戯曲

浄瑠璃　國性爺合戰　曾我會稽山（近松門左衛門）　菅原傳授手習鑑　假名手本忠臣藏（竹田出雲）　本朝二十四孝（近松半二）　脚本

黃門記童幼講釋　夜討曾我狩場曙　勸善懲惡覗機關　桐一葉　杏手鳥孤城落月　牧の方　侠客春雨傘　日蓮上人辻說法　新曲浦島　義民甚兵衛　井伊大老の死　修善寺物語

隨筆

幻住庵記　風俗文選　鶉衣　おらが春　折焚く柴の記　駿臺雜話　雲萍雜志　閑田耕筆　玉勝間　花月草紙　泊洦筆話　梧窓漫筆　松廼舍落葉　年々隨筆　藤簍冊子　琴後集　うけらが花

そゞろごと　花紅葉　雪月花　黃菊白菊　自然と人生　武藏野　病間錄　仰臥漫錄　墨汁一滴　潮待草　萩之家遺稿　筆のしづく　みゝずのたはごと　筆のまに〳〵　竹柏集　斷腸亭雜稾　偶像再興　光あれ　三太郎日記　人生と趣味　嵐の前　小鳥の來る日　洗心雜話　山水巡禮　飯倉だより　冬彥集

漢詩文

羅山文集　藤樹先生文集　白石詩草　鳩巢文集　栗山文集　山陽詩集　山陽文集　言志四錄　正氣歌・常陸帶　新論　星巖集　拙堂文集

蒼海全集　藤公詩存　春濤集　槐南集

評論

小說神髓　ニイチェ美的生活論　囚はれたる文藝　非自然主義　近代文學十講　文藝思潮論　劇場最近十年　心頭雜草　宗教文學論　文藝百科要義　近代文藝十二講　日本現代文學十二講

	太平記	七・二三　九・一六
	曾我物語	六・四
	東關紀行	七・一八
	謠曲	七・一一
	狂言	七・一二
井原西鶴	世間胸算用	九・一一
松尾芭蕉	奥の細道	九・一二
	蕉門の俳句	九・一三
貝原益軒	益軒十訓	四・二六　六・二〇
近松門左衛門	曾我會稽山	九・一四
森川許六	風俗文選	一〇・六
新井白石	折り焚く柴の記	三・二一
室鳩巢	駿臺雜話	二・一三　三・一八　五・二三　九・一七
柳澤淇園	雲萍雜志	一・一四
竹田出雲	菅原傳授手習鑑	八・一八
賀茂眞淵	賀茂眞淵集	八・二一
	岡部日記	一〇・五
横井也有	鶉衣	一〇・六
谷口蕪村	蕪村七部集	八・九
本居宣長	玉勝間　鈴の屋集	六・六　七・一四　八・二一　一〇・七
上田秋成	藤簍冊子	八・五
加藤千蔭	うけらが花	九・一七
村田春海	琴後集	七・九　一〇・五
太田南畝	狂歌	五・一九
	狂句	五・一九
橘南谿	東遊記	四・一九
良寛	良寛和尚歌集	六・七
松平定信	花月草紙	六・六　七・一四　九・一七
石原正明	年々隨筆	七・九
小林一茶	おらが春	六・一九
瀧澤馬琴	南總里見八犬傳	七・七
香川景樹	桂園一枝	六・七
清水濱臣	泊洦文藻	六・七
柴田鳩翁	鳩翁道話	二・二二
三浦梅園	梅園叢書	一・二四　四・二一
中島廣足	橿園文集	六・六　七・九　八・二一　一〇・五
賴山陽	山陽文集	八・一四
坪內逍遙	逍遙全集	二・一七　八・一三
落合直文	落合直文集	二・一五
德富蘇峰	蘇峰文集	二・一三　五・二一　六・一七　七・一　八・二三
二葉亭四迷	二葉亭全集	一・五
夏目漱石	漱石全集	一・一一　二・一五　二・八　五・五　七・三
芳賀矢一	國民性十論　月雪花　筆のまに〳〵	三・三　四・二四　六・二二
正岡子規	子規全集	四・六
尾崎紅葉	紅葉全集	七・八
幸田露伴	露伴叢書	一・一六　一・二五　二・九
上田萬年	國語のため	二・三
北村透谷	透谷全集	六・三
德富蘆花	蘆花全集	一・一〇　二・一七　三・七
大町桂月	桂月全集	三・一　四・一三　九・一九
藤岡東圃	國文學全史	八・六
國木田獨步	獨步全集	三・二〇
高山樗牛	樗牛全集	四・二一　五・二七　七・二三　八・二三
田山花袋	花袋全集	五・四
土井晩翠	天地有情	九・二
樋口一葉	一葉全集	八・四
島崎藤村	藤村全集	一・一六　一・二　二・五　四・九　五・二四　六・二三　七・五　九・九
岡本綺堂	綺堂全集	六・二一
綱島梁川	病間錄	二・五　一〇・二
佐佐木信綱	旅と歌と	四・七　六・一八　一〇・一四
高濱虛子	虛子全集	五・六
五十嵐力	八重葎　水莖　國語の愛護	一・一四　二・一四　三・三　八・三

小説
談　遇　梅　作　雲　塔　記　道　べ　叉　歸　聖　姫　戒　命　は　る　枕　物語　籠　草　凡　生　舟　言　路　學

蓬生日記（一葉）

短歌
亂れ髪　竹の里歌　萩の家歌集　アラヽギ（雜誌）　啄木歌集　長塚節歌集　春泥集　空穂歌集　自選歌集叢書

日本派俳句
春夏秋冬（子規等）　日本俳句抄　子規句集　明治新題句集　海紅　新傾向句の研究　春夏秋冬（虚子）　井泉水句集　筑波會・秋聲會其他　新俳句帖　紅葉句帳

新體詩
孝女白菊の歌　水沫集　若菜集　天地玄黄　一葉舟　夏草　落梅集　天地有情　無弦弓　泣菫詩集　春鳥集　海潮音　白羊宮　日本民謡全集　邪宗門　廢園　啄木遺稿　獨歩詩集　舞ごろも　日本象徴詩集　白秋小唄集　春月小曲集　白秋詩集　川路柳虹詩集　明治大正詩選
童謡
日本童謡集

戯曲
黄門記童幼講釈　夜討曾我狩場曙　勸善懲惡覗機關　桐一葉　沓手鳥孤城落月　牧の方　侠客春雨傘　日蓮上人辻説法　新曲浦島　義民甚兵衛　井伊大老の死　修善寺物語

随筆
そゞろごと　花紅葉　雪月花　黄菊白菊　自然と人生　武蔵野　病間録　仰臥漫録　墨汁一滴　潮待草　萩之家遺稿　筆のしづく　みゝずのたはごと　筆のまに〱　竹柏集　斷腸亭雜藁　偶像再興　光あれ　三太郎日記　人生と趣味　嵐の前　小鳥の來る日　洗心雜話　山水巡禮　飯倉だより　冬彦集　藪柑子集　三都物語　生命の微光　靜思餘録　山中雜記　七寶の柱　春を待ちつゝ　樹木とその葉　季節の窓　野を歩む者　旅と歌と　若き自然　靜と動との間　洗心録　生田春月全集　感想小品　芥川龍之介集　草木蟲魚　茶話抄　水莖　樹下石上　續冬彦集

漢詩文
蒼海全集　藤公詩存　春濤集　槐南集

評論
小説神髄　ニイチェ　美的生活論　囚はれたる文藝　非自然主義　近代文學十講　文藝思潮論　劇場最近十年　心頭雜草　宗教文學論　文藝百科要義　近代文藝十二講　日本現代文學十二講

頼山陽	山陽文集	八・一四
坪内逍遙	逍遙全集	二・一七　八・一三
落合直文	落合直文集	二・一五
徳富蘇峰	蘇峰文集	二・二三　五・二一　六・一七　七・一　八・二三
二葉亭四迷	二葉亭全集	一・五
夏目漱石	漱石全集	一・二一　二・五　二・一八　五・五　七・三
芳賀矢一	國民性十論　月雪花　筆のまに〱	三・二三　四・二四　六・二二
正岡子規	子規全集	四・六
尾崎紅葉	紅葉全集	七・八
幸田露伴	露伴叢書	一・二六　一・二五　二・九
上田萬年	國語のため	二・三
北村透谷	透谷全集	六・三
徳富蘆花	蘆花全集	一・一〇　二・一七　三・一七
大町桂月	桂月全集	三・一　四・一三　九・一九
藤岡東圃	國文學全史	八・六
國木田獨歩	獨歩全集	三・二〇
高山樗牛	樗牛全集	四・二一　五・二七　七・二三　八・二三
田山花袋	花袋全集	五・四
土井晩翠	天地有情	九・二
樋口一葉	一葉全集	八・四
島崎藤村	藤村全集	一・六　一・一二　二・五　四・九　五・一四　六・二三　七・五　九・九
岡本綺堂	綺堂全集	六・一一
綱島梁川	病間録	二・五　一〇・二
佐佐木信綱	旅と歌と	四・七　六・一八　一〇・一四
高濱虚子	虚子全集	五・六
五十嵐力	八重葎　水莖　國語の愛護　新國文學史	一・四　二・四　三・三　八・三　九・一
姉崎嘲風	光あれ	一・一五　五・二六
河井酔茗	酔茗詩集	一・九　二・二〇
金子薫園	金子薫園全集	五・一八
尾上柴舟	尾上柴舟集	五・一八
島木赤彦	赤彦全集	六・二三
沼波瓊音	凡人に聴け	一・二一
近松秋江	都會と田園	二・一九　三・六
薄田泣菫	茶話　獨樂園	四・一〇　五・二四
長塚節	土	六・二一
吉江喬松	自然讀本	六・二四
正富汪洋	汪洋新詩集	六・二
相馬御風	靜と動との間　野を歩む者　砂に坐して居る	一・二三　三・二三　四・二〇　六・九
荻原井泉水	山川行住　山水巡禮	一・一七　三・一四　八・一九
山村暮鳥	風は草木にさゝやいた	三・二
若山牧水	牧水全集	一・二三　五・二七
土岐善麿	やきりんご　春歸る	一・九　二・八
北原白秋	白秋全集	一・二　三・二〇　四・二　八・二
石川啄木	啄木全集	五・一八
吉田絃二郎	吉田絃二郎全集	四・二五　五・二三
川路柳虹	川路柳虹詩集	三・一八　五・二三
三木露風	露風詩話	四・一三　七・六
芥川龍之介	芥川龍之介全集	六・五
西條八十	少年詩集　日本精神	一・二〇　七・二
生田春月	生田春月全集	二・一四

樂（樂）薬（藥）読（讀）続（續）

畄（留）尽（盡）礼（禮）称（稱）

昭和九年十一月二十六日
文部省檢定濟
中學校國語漢文科用・實業學校國語科用

大正十四年十月十三日發行
昭和三年七月廿三日訂正三版發行
昭和六年七月卅一日訂正五版發行
昭和九年七月二十日訂正七版印刷
昭和九年十月廿八日訂正八版印刷

大正十五年一月五日訂正再版發行
昭和三年十一月五日訂正四版發行
昭和六年十一月二十日訂正六版發行
昭和九年七月廿八日訂正七版發行
昭和九年十一月三日訂正八版發行

定價
卷一—八 各金六拾錢
卷九—十 各金五拾五錢

檢定濟
文部省

五訂 新日本讀本

編者 吉澤義則
東京市神田區神保町一丁目二五ノ一

發行兼印刷者 鈴木金之助
大阪市東區博勞町五丁目五十六番地

發行者 鈴木常松
東京市神田區神保町一丁目二五ノ一

發兌 大阪市東區博勞町五丁目五十六番地

修文館
振替口座東京二六四四番
振替口座大阪四七一番